宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第18集

KAMIMAKI

上牧第2遺跡

MOCHIOBARU

母智丘原第2遺跡

九州農業試験場畑地利用部施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999年

宮崎県埋蔵文化財センター

KAMIMAKI

上牧第2遺跡

MOCHIOBARU

母智丘原第2遺跡

九州農業試験場畑地利用部施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999年

宮崎県埋蔵文化財センター

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃より深い御理解をいただき厚く御礼申し上げます。

宮崎県教育委員会では、九州農業試験場畑地利用部施設整備事業に伴い、上牧第２遺跡・母智丘原第２遺跡の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。

上牧第２遺跡では、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が検出されました。特に、縄文時代中期後半から後期の土器を出土した竪穴住居が確認されたことは注目されます。また、母智丘原第２遺跡では、古墳時代を中心とした集落跡や遺物が確認されました。

こうした先人の歩みを振り返り、郷土の歴史を解明する貴重な資料を得られたことは大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成11年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長　田　中　　守

例　言

1．本書は九州農業試験場畑地利用部施設整備事業に伴い宮崎県教育委員会が行った上牧第２遺跡、母智丘原第２遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、建設省九州地方建設局鹿児島営繕工事事務所の依頼を受けた宮崎県教育委員会が主体となり、平成９年度に宮崎県埋蔵文化財センターが行なった。

3．現地での実測・写真撮影等の記録は上牧第２遺跡については久木田が、母智丘原第２遺跡については高橋が行い、空中写真については業者に委託した。

4．整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成、実測、トレースは主として久木田、高橋が行い、一部を整理補助員の協力を得た。

5．本書で使用した位置図及び周辺地形図は、国土地理院発行の５万分の１図と都城市農政課作成の２千５百分の１図である。

6．土層断面および土器の色調は『新版標準土色帖』に拠った。

7．本書で使用した方位は磁北（Ｍ．Ｎ.）及び座標北（Ｇ．Ｎ.）である。座標は国土座標第Ⅱ系に拠る。レベルは海抜絶対高である。

8．本書で使用した遺構略号は次の通りである。

ＳＡ・・・竪穴住居跡　　ＳＢ・・・掘立柱建物跡　　ＳＣ・・・土坑

ＳＥ・・・溝状遺構　　ＳＩ・・・集石状遺構　　Ｐ・・・・柱穴

9．本書の執筆及び編集は上牧第２遺跡を久木田が、母智丘原第２遺跡を高橋が行った。

10．出土遺物・その他諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 2～3
第Ⅲ章　上牧第２遺跡 …… 4～91
　第１節　調査の概要 …… 4
　第２節　縄文時代の遺構と遺物 …… 9
　第３節　弥生から古墳時代の遺物 …… 52
　第４節　古代の遺物 …… 60
　第５節　中世から近世の遺構と遺物 …… 62
　第６節　時期不明の遺構と遺物 …… 66
　第７節　まとめ …… 74
第Ⅳ章　母智丘原第２遺跡 …… 93～118
　第１節　調査の概要 …… 93
　第２節　縄文時代の遺物 …… 99
　第３節　古墳時代の遺構と遺物 …… 99
　第４節　時期不明の遺構 …… 103
　第５節　まとめ …… 110

挿　図　目　次

第１図　遺構位置図 …… 3
第２図　基本土層柱状図 …… 4
第３図　上牧第２遺跡周辺地形図 …… 5
第４図　ＳＡ１実測図 …… 6
第５図　御池ボラ(第Ⅵ層)上検出遺構分布図 …… 7・8
第６図　ＳＡ１出土遺物実測図 …… 10
第７図　ＳＡ１出土遺物実測図 …… 11・12
第８図　ＳＡ１出土遺物実測図 …… 13
第９図　ＳＡ１出土遺物実測図 …… 15
第10図　ＳＡ１出土遺物実測図 …… 16
第11図　ＳＡ１出土遺物実測図 …… 17
第12図　ＳＡ１出土遺物実測図 …… 18
第13図　ＳＡ１出土遺物実測図 …… 19
第14図　ＳＡ２実測図 …… 20
第15図　ＳＡ２出土遺物実測図 …… 22
第16図　包含層出土遺物実測図 …… 24
第17図　包含層出土遺物実測図 …… 25
第18図　包含層出土遺物実測図 …… 26
第19図　包含層出土遺物実測図 …… 27・28
第20図　包含層出土遺物実測図 …… 29
第21図　包含層出土遺物実測図 …… 31
第22図　包含層出土遺物実測図 …… 32
第23図　包含層出土遺物実測図 …… 33
第24図　包含層出土遺物実測図 …… 35
第25図　包含層出土遺物実測図 …… 36
第26図　包含層出土遺物実測図 …… 37

第27図　包含層出土土器片錘実測図……38
第28図　包含層出土石器実測図……39
第29図　包含層出土石器実測図……40
第30図　包含層出土石器実測図……41
第31図　包含層出土石器実測図……42
第32図　包含層出土石器実測図……43
第33図　V層上検出遺構分布図……53・54
第34図　弥生～古墳時代の遺物実測図……55
第35図　弥生～古墳時代の遺物実測図……56
第36図　弥生～古墳時代の遺物実測図……57
第37図　古代の遺物実測図……61
第38図　畝状遺構分布図……62
第39図　SE3・4平面及び土層断面実測図…63・64
第40図　SE3・4出土及び包含層出土遺物実測図……65
第41図　SB1実測図……66
第42図　SI1・SC2実測図……67・68
第43図　SI1・SC2出土遺物実測図…69
第44図　SC3実測図……70
第45図　SC4実測図……71
第46図　SE1・2・5平面及び土層断面実測図……72
第47図　SE6・7平面及び土層断面実測図…73
第48図　母智丘原第2遺跡周辺地形図……93
第49図　土層断面図……94
第50図　遺構配置図1（Ⅲ層上面）……95・96
第51図　遺構配置図2（V層上面）……97・98
第52図　包含層出土遺物実測図……99
第53図　SA1……100
第54図　SA1出土遺物実測図……101
第55図　包含層出土遺物実測図……102
第56図　包含層出土遺物実測図……103
第57図　SB1・SB2……104
第58図　SC1・SC2・SC3・SC4…105
第59図　SC5・SC6……106
第60図　SC7……107

表　目　次

第1表　縄文時代の遺物観察表……44～50
第2表　石器計測表……51
第3表　弥生土器・土師器観察表……58・59
第4表　古代の遺物観察表……62
第5表　中・近世の遺物観察表……66
第6表　SC1・SC2出土遺物観察表……74
第7表　母智丘原第2遺跡出土土器観察表…109
第8表　母智丘原第2遺跡出土石器計測表…109

図　版　目　次

図版1～15　上牧第2遺跡……77～91
図版16～21　母智丘原第2遺跡…113～118

第Ⅰ章　はじめに

第1節　調査に至る経緯

農林水産省九州農業試験場畑地利用部（都城市横市町6644番地）の構内では、平成5年度に実施した、農用地整備公団の広域農道建設予定地分布調査において、遺物の散布を確認し、同時期に施工されていた畑地利用部の排水路工事掘削面において、文明ボラ直下の溝状遺構を確認したため、今後の開発事業については、計画段階で県教育委員会文化課に協議するよう申し入れた。同12月に試験場から畑作物変換利用実験棟他3施設の整備計画に係る文化財の取扱いについて協議申し入れがあり、建設予定地を試掘調査した結果、柱穴や中世の土師質土器片が出土したため、建物の建設位置を遺構等の希薄な部分へ変更し、発掘調査を回避する措置を講じた。その後、平成8年度に実施した平成9年度開発事業調査で、九州農業試験場から「特定国有財産整備計画」による甘藷交配採種施設等の研究施設や職員宿舎の新設を計画している旨回答があったため、平成8年11月7日・8日の二日間試掘調査を実施した。試掘調査では、御池ボラ層上位で縄文後期の文化層及び古墳時代～中世の文化層を確認したため、研究施設建設予定地及び宿舎建設予定地を各々隣接する遺跡名（上牧、母智丘原）から上牧第2遺跡、母智丘原第2遺跡と命名した。

この結果を受けて、県文化課と埋蔵文化財センターは九州農業試験場畑地利用部と事前の協議を行い、やむを得ず遺跡影響が及ぶ施工範囲約2,000㎡を記録保存することとし、上牧第2遺跡（調査対象面積約1,800）を平成9年8月18日から平成9年11月17日まで、母智丘原第2遺跡（約240㎡）を平成10年1月19日～平成10年2月13日まで発掘調査した。

第2節　調査の組織

調査主体　宮崎県教育委員会

教育長	岩切　重厚	
文化課長	仲田　俊彦	
埋蔵文化財係長	北郷　泰道	
〃　主査	永友　良典	（調整担当）

宮崎県埋蔵文化財センター

所　長	藤本　健一	
副所長	岩永　哲夫	
庶務係長	三石　泰博	
調査第二係長	岩永　哲夫	（兼務）
〃　主査	谷口　武範	
〃　主事	久木田浩子	（調査担当）
〃　主事	高橋　誠	（調査担当）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

上牧第２遺跡・母智丘原第２遺跡の所在する都城市は東側を鰐塚山系、西側を瓶台山や白鹿岳などの山地や霧島山系に囲まれた盆地の中央部に位置する。両遺跡は市域西部の横市町に所在し、大淀川の支流横市川と庄内川によって南北を挟まれた、標高180ｍ前後の丘陵上に立地している。上牧第２遺跡と母智丘原第２遺跡は小谷を挟んで向かい合っており、谷の北側に上牧第２遺跡、南側に母智丘原第２遺跡が位置している。

当遺跡の周辺には、遺跡分布調査や発掘調査により数多くの遺跡の存在が知られている。また、これまで報告例の少なかった縄文時代の遺跡についても、近年の発掘調査件数の増加によりその様相が次第に明らかになりつつある。以下、当遺跡を中心として周辺の遺跡を鳥瞰してみる。

当遺跡の南東約0.8㎞の丘陵上には牧の原第２遺跡が位置し、古墳時代の竪穴住居跡１軒、土坑10数基などが確認されており、縄文時代後期の土器も出土している。母智丘原第１遺跡は南西部に隣接し、土坑、ピットそれぞれ１基と弥生時代・平安時代の土器を確認している。丸山遺跡は0.8～１㎞北西の丘陵 上に位置し、縄文時代早期の集石遺構と土器が確認されている。約1.5㎞西の丘陵上に位置する伊勢谷第１遺跡からは縄文時代前期～中期の陥し穴状遺構10基や中期～晩期の竪穴住居跡２～３基、中近世の遺構などが検出されている。母智丘の南東側丘陵から低地にかけては中世の城郭跡である新宮城、中世の水田跡が確認された畑田遺跡、母智丘谷遺跡、鶴喰遺跡が位置する。鶴喰遺跡ではその他中世建物群や古墳時代の竪穴住居跡群を検出している。同遺跡の対岸にある中尾山・馬渡遺跡からは縄文時代晩期の土坑群、平安時代の掘立柱建物とそれにともなう大量の遺物が出土している。とくに墨書土器、越州窯系青磁、緑釉土器の出土が注目される。約２㎞南東に隔てた加治屋遺跡では弥生時代後期末の竪穴住居跡が７軒確認されている。その北東約0.6㎞には田谷尻枝遺跡が所在し、縄文時代早期と中期の陥し穴遺構、中近世の掘立柱建物跡や道路状遺構などが確認されている。東に隣接する胡麻段遺跡では縄文時代早期の遺物が出土している。東側に約1.5㎞隔てた横市川左岸には肱穴遺跡が位置する。縄文時代晩期～弥生時代前期の集落跡や近世までの水田跡が確認されており、擦り切り石包丁の出土が注目される。東南東約3.5㎞には、古代末から中世にかけての集落跡である正坂原遺跡が所在する。

(参考文献)

都城市教育委員会　『都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内中央部）』　都城市文化財調査報告書第５集　1986

『母智丘原第１遺跡　県指定志和池１号墳』　都城市文化財調査報告書第９集　1989

『田谷・尻枝遺跡』　都城市文化財調査報告書第38集　1997

『鶴喰遺跡』　都城市文化財調査報告書第38集　1997

1．上牧第２遺跡
2．母智丘原第２遺跡
3．牧の原第２遺跡
4．母智丘原第１遺跡
5．丸山遺跡
6．伊勢谷第１遺跡
7．新宮城跡
8．畑田遺跡
9．母智丘谷遺跡
10．鵜嗅遺跡
11．中尾山・馬渡遺跡
12．池原遺跡
13．加治屋遺跡
14．田谷・尻枝遺跡
15．胡麻段遺跡
16．肱穴遺跡
17．西原第２遺跡
18．都之城跡
19．都城古墳
20．ニタ元遺跡
21．正板原遺跡
22．月野原第２遺跡
23．安水城跡

第１図　遺跡位置図（1／50,000）

第Ⅲ章　上牧第２遺跡

第１節　調査の概要

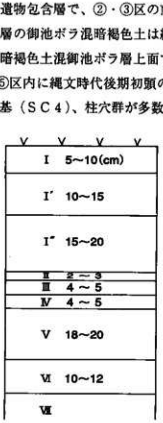
本遺跡は標高約180ｍの丘陵上に位置する。

調査は建物が造られる部分のみの約1,800㎡を対象地として行った。調査区は５区（①～⑤区）に分かれている。土層確認のトレンチを設定し、土層の堆積状況を確認した後、調査対象地の耕作土の除去を重機で行った。

基本層序は第２図を参照されたい。

第Ⅰ層の客土及び表土と第Ⅰ′・Ⅰ″層の耕作土を除去すると第Ⅱ層の文明ボラ混黒色土が確認されるが、旧地形が北から南に向かって緩やかに傾斜し、耕作による掘削を受けていたため、③区にわずかに残っているだけであった。第Ⅲ層の白色パミス混黒色土が古代の遺物包含層であるが、この層についても第Ⅱ層と同じく②・③区にわずかに確認されるだけで、ほとんどが第Ⅳ層の御池ボラ混暗褐色土上面からの調査となった。

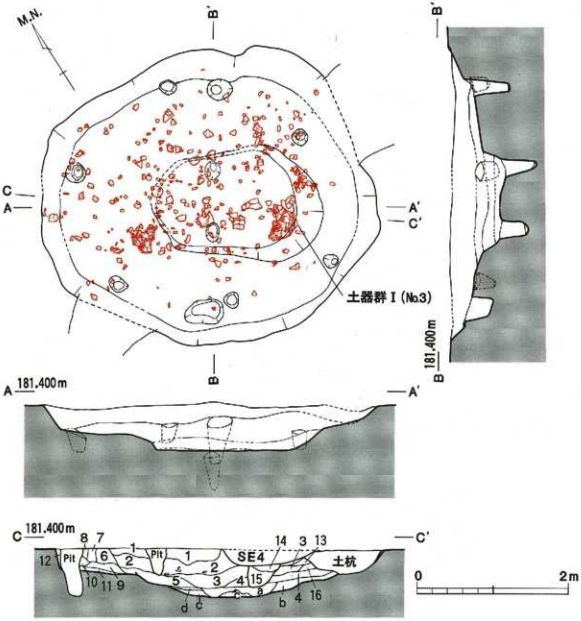
それぞれの区において重機による調査面検出が終了した後、まず、第Ⅱ層が残っている③区の精査を行ったところ、黒色土に文明ボラが縞模様に堆積している状態が確認された。文明ボラ堆積の中世の畑跡と思われるが、畝状遺構の遺存状況は著しく悪く、土層で確認するのも困難であった。その後、手作業によって第Ⅱ～Ⅳ層を掘り下げ、第Ⅴ層上面で遺構検出を行った。第Ⅴ層上面で確認された遺構は、近世の溝状遺構２条（ＳＥ３・４）、時期不明の溝状遺構５条（ＳＥ１・２・５・６・７）、掘立柱建物跡１棟（ＳＢ１）、土坑３基（ＳＣ１・２・３）、集石状遺構１基（ＳＩ１）、柱穴群などである。第Ⅳ層は古墳時代の遺物包含層で、②・③区の南側に遺物の集中が見られたが、遺構を確認することは出来なかった。第Ⅴ層の御池ボラ混暗褐色土は縄文時代中期後葉～後期初頭の遺物包含層で、第Ⅴ層掘り下げ後、第Ⅵ層の暗褐色土混御池ボラ層上面で遺構検出を行った。②区の北西側の端とそこから南南東方向に約50ｍの⑤区内に縄文時代後期初頭の遺物を出土する竪穴住居跡２基が検出された。その他、時期不明の土坑１基（ＳＣ４）、柱穴群が多数検出されている。



第Ⅰ層……表土及び客土。
第Ⅰ′層……耕作土。白色パミス混灰褐色土。やや硬質。
第Ⅰ″層……耕作土。白色パミス混灰褐色土。硬質。
第Ⅱ層……文明白ボラ混黒色土。硬質。
第Ⅲ層……白色パミス混黒色土。古代の遺物包含層。
第Ⅳ層……御池ボラ混暗褐色土。古墳時代の遺物包含層。
第Ⅴ層……御池ボラ混暗褐色土。縄文時代中期後葉～後期初頭の遺物包含層。
第Ⅵ層……暗褐色土混御池ボラ層。硬質。
第Ⅶ層……御池ボラ。

第２図　基本土層柱状図

第３図　上牧第２遺跡周辺地形図（Ｓ＝1／2,500）



SA1

1　ボラ混にぶい黄褐色土～硬質。

2　ボラ混黒褐色土～やや硬質。土器片、炭化物粒を多く含む。

3　ボラ混黒色土～やや硬質。第2層よりもろい。土器、炭化物を多く含む。

4　黒褐色土～非常に硬質。土器、炭化物を多く含む。

5　黒褐色土混ボラ層～硬質。粗い。

6　ボラ混黒褐色土～硬質。粗い。

7　ボラ混褐色土～軟質。若干粘性あり。

8　第6層と同じ。

9　暗褐色土混ボラ層～硬質。もろい。

10　黒褐色土混ボラ層～硬質。もろい。

11　暗褐色土混ボラ層～硬質。しまりあり。

12　ボラ混黒褐色土～軟質でもろい。

13　ボラ混暗褐色土～硬質。

14　ボラ混黒褐色土～非常に硬質。粗い。

15　黒色土～硬質。

16　暗褐色土混ボラ層～硬質。土器片を多く含む。

a　ボラ混黒褐色土～炭化物粒、土器片を多く含む。

b　ボラ混暗褐色土～土器片、炭化物粒を多く含む。土器群Ⅰ縁辺部。

c　黒褐色土混ボラ層

d　ボラ混暗褐色土～炭化物を含む。

第4図　ＳＡ１実測図（Ｓ＝1／50）

第５図　御池ボラ（第Ⅵ層）上検出遺構分布図（Ｓ＝1／350）

第２節　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡が２基検出されている。２基とも平面形は不定円形プランで、中央に土坑状の落ち込みを持つなど規模、形態が類似する。しかし、ＳＡ１からは大量の土器が出土しているが、ＳＡ２では極僅かであった。

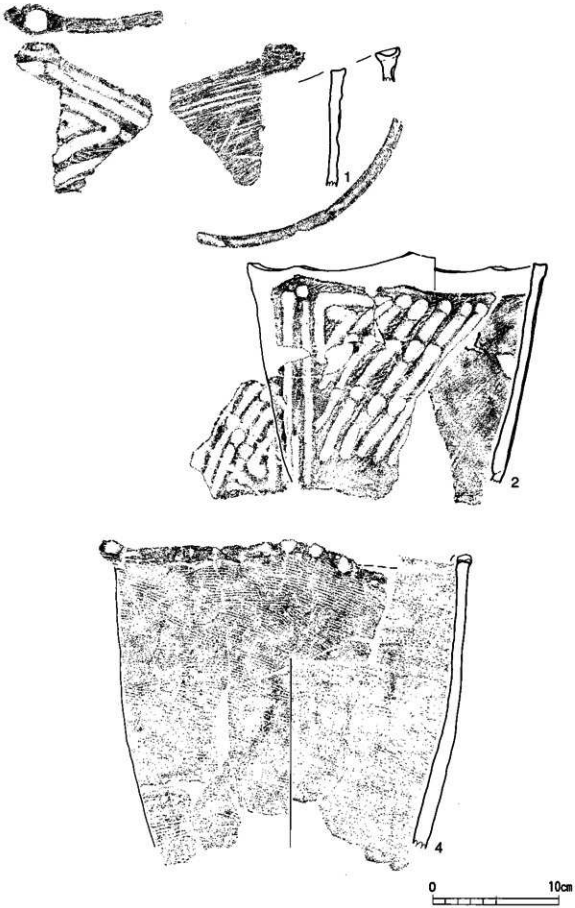
縄文時代の遺物は、住居内および包含層から出土している。住居内の遺物は出土量が多く、器形の復元ができるため良好な一括資料といえる。

ＳＡ１（第４図、図版２）

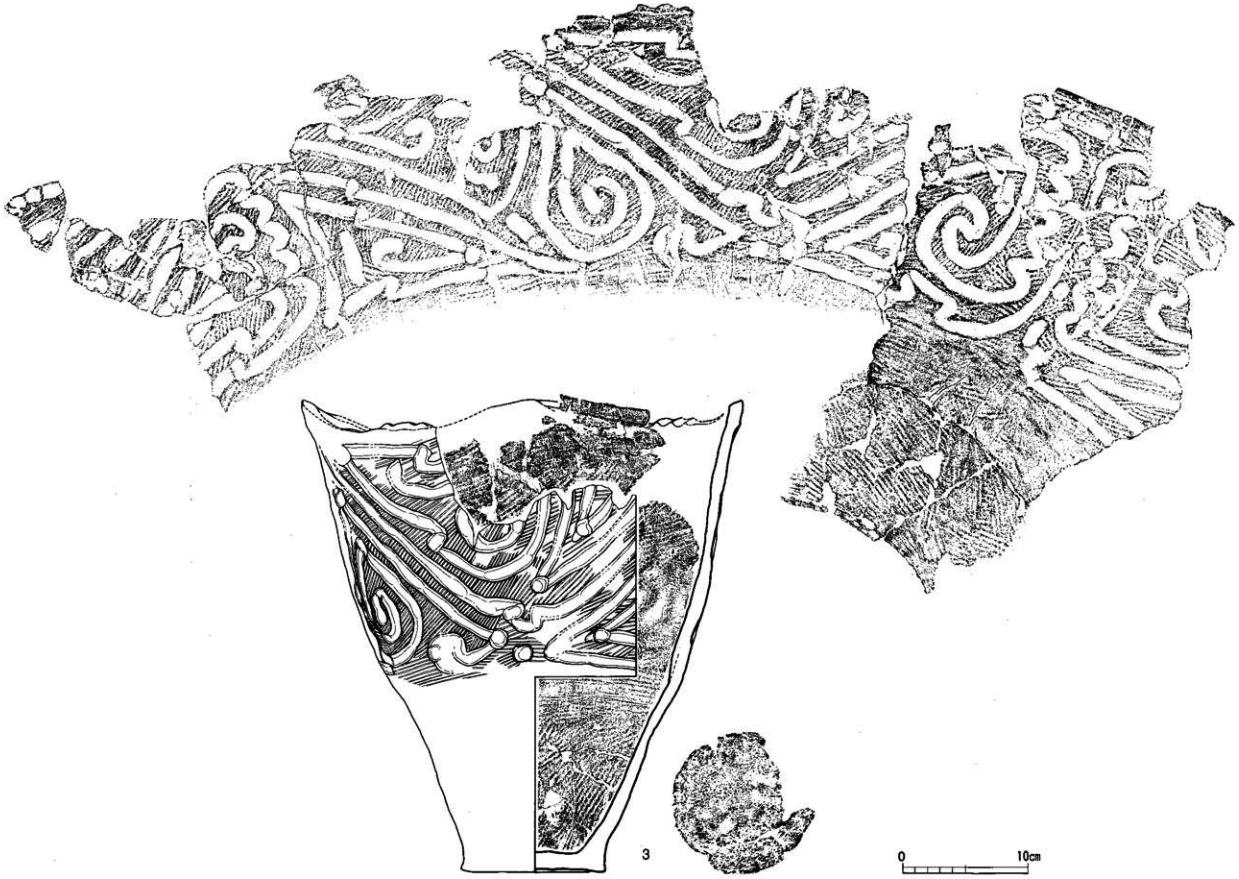
ＳＡ１は、⑤区の南側寄りに位置し、近世の溝と思われるＳＥ４に切られている。検出面は第Ⅵ層の暗褐色土混御池ボラ上面であるが、住居上の第Ⅴ層においても縄文時代後期初頭の土器の集中が見られた。長軸約４.５ｍ、短軸約３.９ｍ、検出面から床面までの深さ約０.６５ｍ、床面積１０.３２㎡の不定円形プランを呈し、中央には長軸約２.３ｍ、短軸約１.６ｍ、床面からの深さ約０.２ｍの楕円形プランの土坑がある。土坑内に深さ約０.３５～０.４ｍの２本の柱穴、壁際に深さ０.２５ｍ程の柱穴６本が配置されている。遺物は、後世の遺構によって攪乱されている部分もあるが、住居内一括資料として、良好な状態で検出された。遺物についての詳細は後述するが、外器面に太めの凹線文が施された阿高系の土器等が出土している。また、中央の土坑内からは石皿、炭化物、ベンガラ粒が出土している。

ＳＡ１出土遺物（図版５～８）

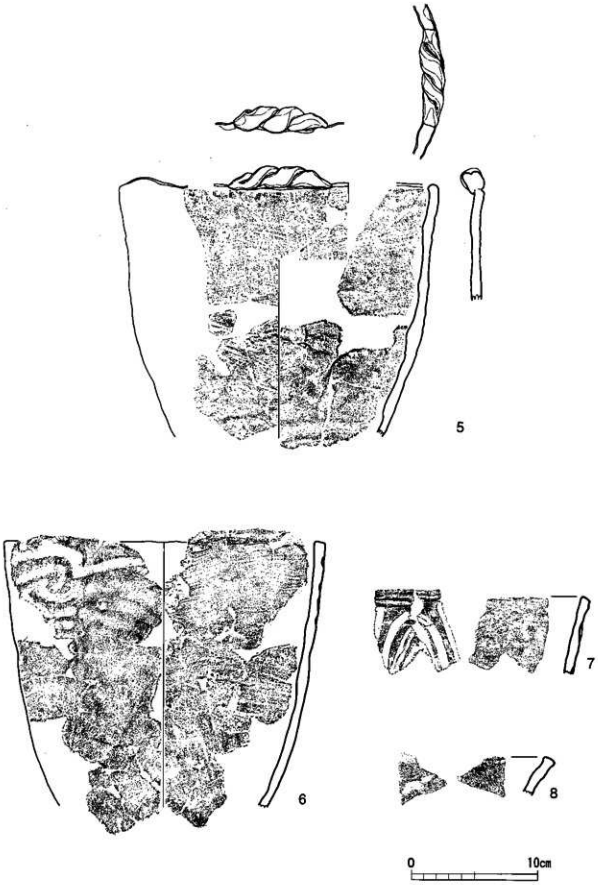
遺物は第６図から第１３図に示している。1～3（Ａ類）は太形凹線文により文様が構成される一群である。１は波状口縁をなす。口唇部は指ナデで凹み、波頂部に粘土を貼り付け、指押圧による凹みが見られる。貝殻状の施文具で器面調整を行った後、指頭により菱形の凹線文様を施している。２は８つの波頂部をもつと思われる深鉢で、貝殻状の施文具で器面調整を行った後、指頭により凹線文様を施している。内器面には外器面文様の反作用の飛び出しが見られる。３は波状口縁を呈する。口縁波頂部には粘土紐をヒレ状に貼り付け、押圧刻目を施している。貝殻腹縁で器面調整を行った後、胴部半分から上に指頭による渦巻状凹線文様を施している。底部は網代底を呈する。２と同じく内器面に外器面文様の反作用の飛び出しがみられる。４・５（Ｃ類）は文様の施されていない土器群である。４は波状口縁で波頂部付近に押圧が施されている。内外器面とも貝殻状の施文具で器面調整を行っている。５は口唇部に粘土紐の貼り付けが見られ、外器面は貝殻状の施文具による器面調整の後ナデ、内器面はナデ仕上げである。６～８（Ｅ類）は平坦な口唇部をもつものである。６は頸部より上位に押圧文が施されている。内外器面ともナデ仕上げである。７は外器面に棒状工具による６㎜幅の弧状の凹線文が施されている。内外器面ともナデ仕上げである。９－１、２、３・１０～１２（Ｇ類）は口縁部が波状の刻目口縁をなすものである。９－１～３は同一個体である。内外器面とも全面に貝殻腹縁で器面調整を行い、胴部より上位の３分の１に凹線文を施している。底部は網代底である。１０は９と類似する。１１は内外器面ともナデ仕上げで、１２は外器面は貝殻状の施文具による器面調整の後ナデ、内器面はナデ仕上げである。胴部より上位の口縁部に凹線文が施されている。１３（Ｉ類）は口縁部に刺突及び凹点文を巡らすものである。口唇部は棒状工具による刻目が見られる。１４・１５（Ｋ類）は施文具に棒状、ヘラ状工具以外



第6図　ＳＡ１出土遺物実測図（Ｓ＝1／3）



第7図　ＳＡ１出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）



第8図　ＳＡ１出土遺物実測図（Ｓ＝1／3）

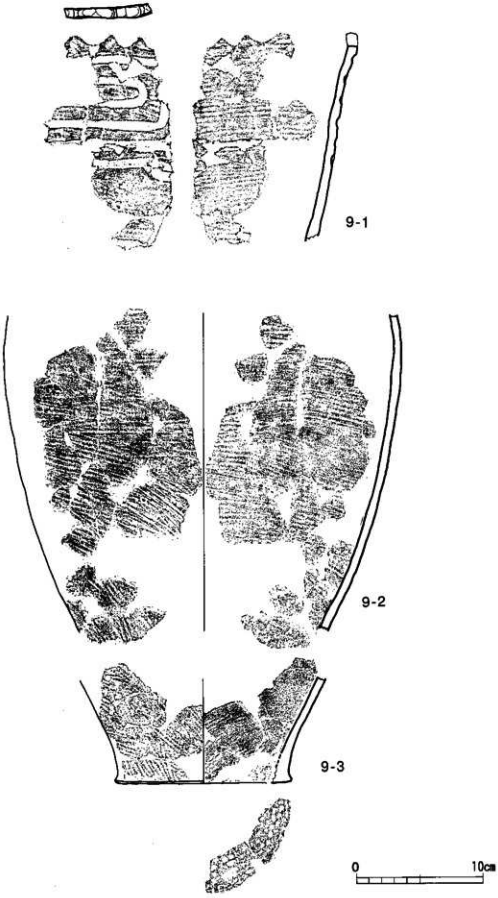
の工具を利用しているものである。14は口縁部に貝殻腹縁による刺突が見られる。15は凹線で区画された中に縄目圧痕が見られる。それぞれ内外器面調整はナデである。16・17（L類）は口唇部に内外両側から凹圧および刻目が施されているものである。内外器面調整はナデである。16は外器面口縁部に指による凹線文と凹点文が施されている。18～20（O類）は口唇部上に凹圧および刻目が施されているものである。18は外器面は貝殻状の施文具による器面調整の後ナデ、内器面はナデである。19・20は内外器面調整はナデである。21・22（P類）は胴部上位および口縁部に文様が施されているものである。21は内外器面調整はナデである。口唇部に棒状工具による5㎜幅の凹線と口縁部には若干他の土器とは凹線幅の異なる文様が施されている。22は内外器面とも貝殻状の施文具で器面調整を行っている。23は口唇部に粘土紐の貼り付けが見られる。24は口唇部に竹管状工具による刺突が見られる。25～30は胴部片である。25は竹管状の工具による6㎜幅の凹線文とその区画内に半竹管状工具の刺突が施されている。26・27は棒状工具による凹線の区画内に、棒状工具先端部による刺突が施されている。28～30は棒状工具による凹線文が施されている。31・32は底部である。31は内外器面および底面に丁寧なナデ仕上げが見られる。32は内外器面とも貝殻状施文具による器面調整が施され、底面は網代底である。33・34は土器片錘である。33は綱代底をもつ底部片を転用している。35は敲石である。側面および平担面に敲打痕があり、一部擦痕も見られる。石材は砂岩である。36は凝灰岩製の磨石である。両面に擦痕が見られる。37は逆台形状の石の側面を固定し、上面で研磨した砥石と思われる。石材は凝灰岩である。38・39は石皿で、石材はどちらとも蟬石安山岩である。38は残存部が1／4程と思われ、大きな石皿と推定される。上面に擦痕が多く見られる。39は鉄分が多く付着した硬質の蟬石安山岩で、上面の中央部にかなりの摩擦を受けている。40は使用痕剥片で、石材は頁岩である。左右側縁に使用による摩滅痕が見られる。

土器分類

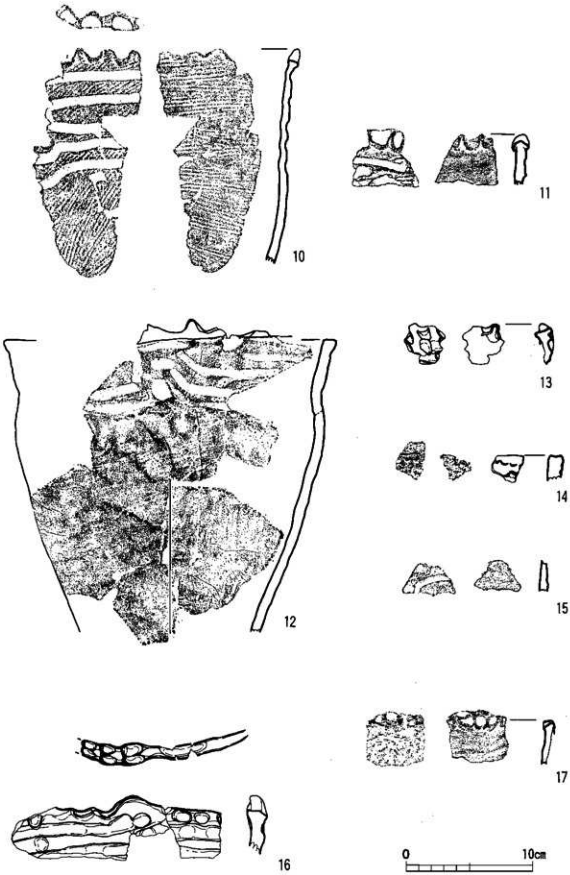
A類～太形凹線文により文様が構成されるもの。（1～3）
C類～文様の施されていないもの。（4・5）
E類～平担な口唇部をもつもの。（6～8）
G類～口唇部G波状の刻目口縁をなすもの。（9－1、2、3・10～12）
I類～口縁部に刺突及び凹点文を巡らすもの。（13）
K類～文様施文具に棒状、ヘラ状工具以外の工具を利用しているもの。（14・15）
L類～口唇部に内外両側から凹圧及び刻目が施されているもの。（16・17）
O類～口唇部上に凹圧及び刻目が施されているもの。（18～20）
P類～胴部上位及び口縁部に文様が施されているもの。（21・22）

ＳＡ２（第14図、図版３）

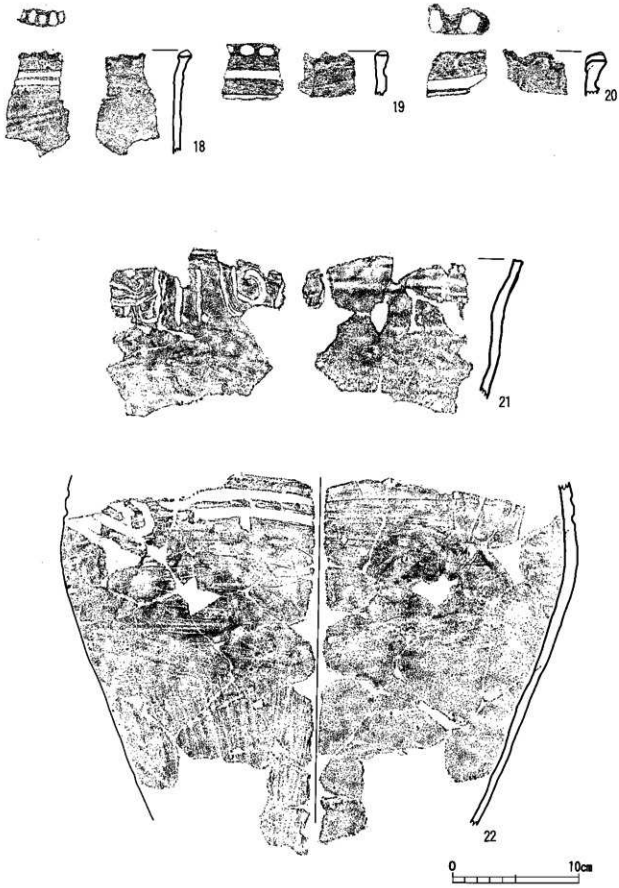
ＳＡ２は、②区の北西に位置する。検出面はＳＡ１と同じく第Ⅵ層の暗褐色土混御池ボラ上面である。長軸約4.65ｍ、短軸約4.3ｍ、検出面から床面までの深さ約0.65ｍ、床面積約10.45㎡の不定円形プランを呈する。ＳＡ１と同様、中央には土坑状の落ち込みがあり、長軸約2.4ｍ、短軸約1.7ｍ、床面からの深さ約0.3ｍを計る。土坑内に深さ約0.6～0.75ｍの２本の柱穴、壁際と床面に0.3



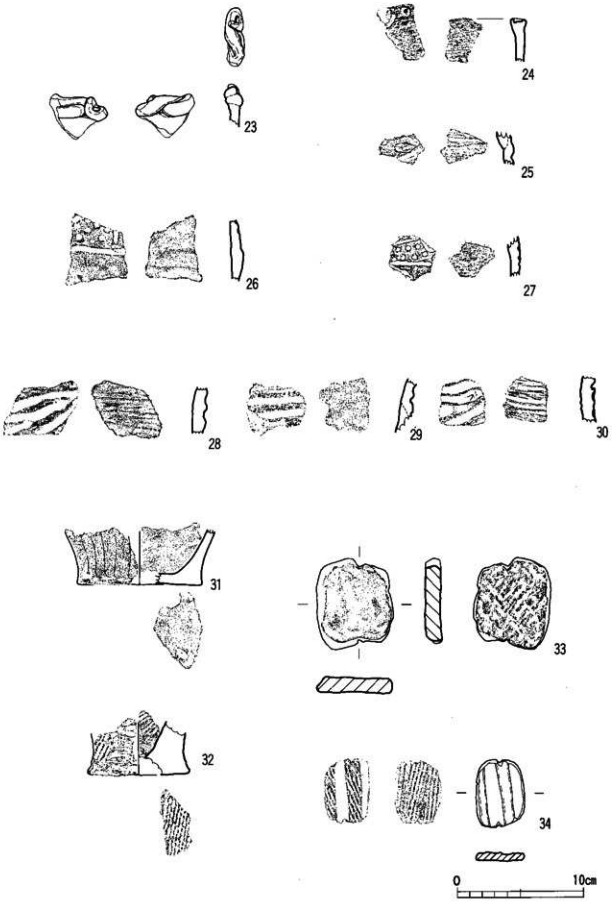
第9図　ＳＡ１出土遺物実測図（Ｓ＝1／3）



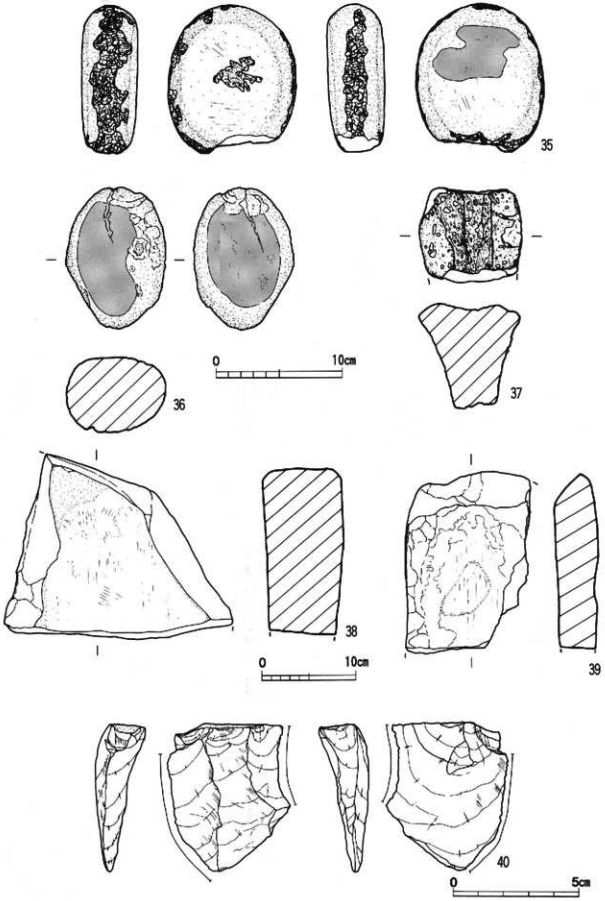
第10図　ＳＡ１出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）



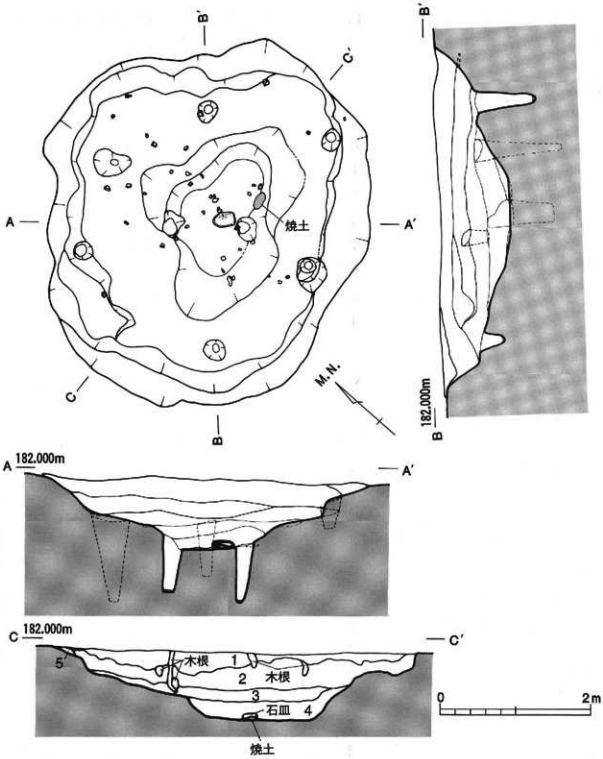
第11図　ＳＡ１出土遺物実測図（Ｓ＝1／3）



第12図　ＳＡ１出土遺物実測図（Ｓ＝1／3）



第13図　ＳＡ１出土遺物実測図（35～37：Ｓ＝1/3、38・39：Ｓ＝1/4、40：Ｓ＝2/3）



SA2
1 ボラ混暗褐色土～しまりあり。やや粘性あり。
2 ボラ混黒褐色土～第1層より硬質。。土器片含む。
3 黒褐色土混ボラ層～硬質で粗い。
4 暗褐色土混ボラ層～もろい。炭化物、焼土を含む。
5 ボラ混暗褐色土～軟質。

第14図　SA2実測図（S＝1／50）

～1.2mの柱穴6本が配置されている。SA1と比べ遺物の出土は少なく、中央土坑にススが付着した土器小片が数点検出されただけであった。また、土坑内には炭化物が多く出土し、土坑床面には焼土と伏せられた石皿が確認された。

SA2出土遺物（図版8）

遺物は第15図に示している。41は口唇部に粘土紐の貼り付けとその下に平行する横方向の凹線文が見られる。42（D類）は頸部付近と思われる。屈曲部に棒状工具による1条の連続凹点文とその下に横方向の凹線文が見られる。内器面には貝殻条痕が施され、外器面凹点文様の反作用の飛び出しが見られる。43は口縁部付近と思われる。棒状工具による8mm程の横方向の凹線文とその下に工具端部による連続刺突文が施されている。44は胴部片で、棒状工具による7mm程の凹線文が施されている。45は胴部片であるが、棒状工具による3～4mm程の凹線の平行施文が見られる。46は底部である。内外器面とも貝殻状工具による器面調整が施され、底面は網代底である。47凝灰岩製の石皿である。石の凹みの状態から見てかなり使い込まれたと思われる製品である。

土器分類

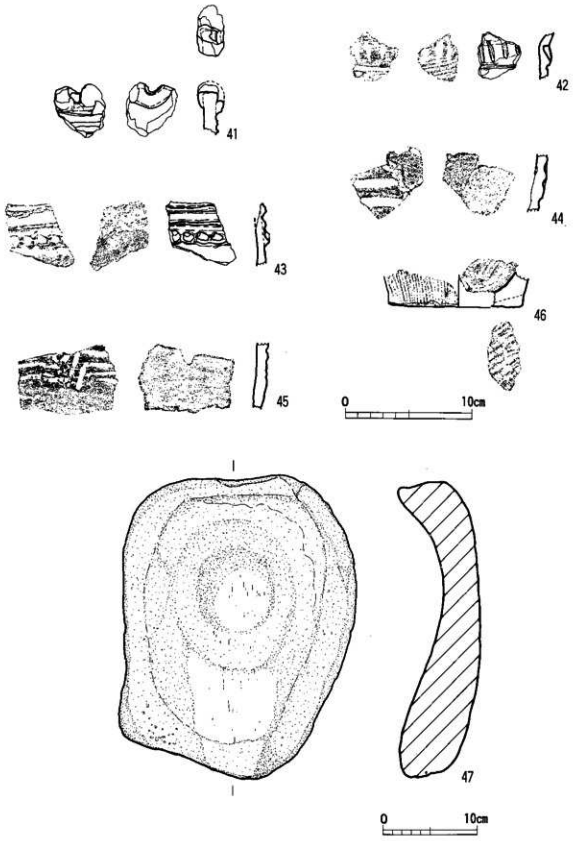
D類～頸部のややしまった深鉢形の土器で、口縁部に口唇部と直交する直線（短線）的な文様をもつもの。(42)

包含層出土の遺物（第16～32図、図版8～11）

縄文時代の土器の遺物包含層は第Ⅳ・Ⅴ層である。竪穴住居跡と同じく阿高系の土器を中心に、市来式系や黒色磨研などの後期の土器も出土している。

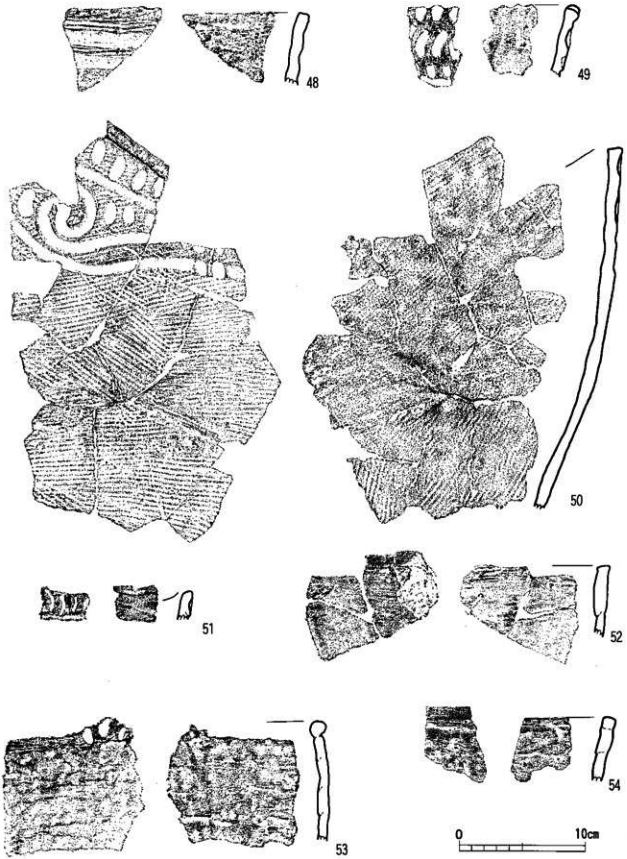
土器

48（A類）は太型凹線文により文様が構成されるもので、貝殻状の施文具で器面調整を行った後、指頭により横方向の凹線文様を施している。内器面はナデ仕上げである。49～51（B類）は口縁部に指頭ないし、ヘラ状施文具による凹線文（半月形状）をもつものである。49は口縁部に棒状工具によって凹線文（C字形）を施し、その下に凹点をもつ。口唇部は棒状工具による押圧刻目が施されている。内外器面調整はナデである。50は波状口縁をなす。平坦な口唇部をもち、口縁部には逆C字形の凹線文と渦巻状の凹線文がある。内外器面とも貝殻状の施文具で器面調整が行われ、器面上位に文様が施文されている。51は波状口縁をなす。口縁部にヘラ状工具による逆C字形の凹線文と横方向の凹線文が施されている。52～55（C類）は文様の施されていないものである。52は平坦な口唇部をなし、内外器面とも ナデ仕上げである。53は内外器面ともナデ仕上げである。口唇部に粘土紐を貼り付け、その上に棒状工具で押圧刻目が施されている。54は内外器面ともナデである。55は外器面ナデ、内器面は貝殻状の施文具で器面調整が行われている。口縁部外面に明瞭な凹点状の指頭痕が見られる。56～58（D類）は口縁部に口唇部と直交する直線（単線）的な文様を持つものである。56は口唇部を貝殻腹縁で刻んでいる。内外器面ともナデ仕上げである。57は波状口縁をなす。内外器面ともナデ仕上げである。口縁部に縦方向の短凹線が施されている。58は口縁付近であると思われる。口縁部に縦方向

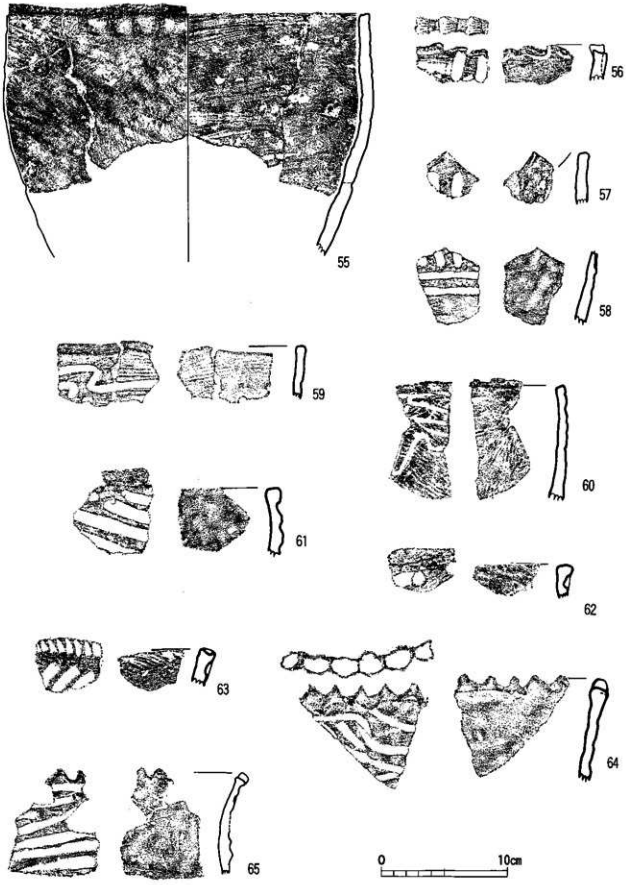


第15図　ＳＡ２出土遺物実測図（41～46：S＝1/3、47：S＝1/4）

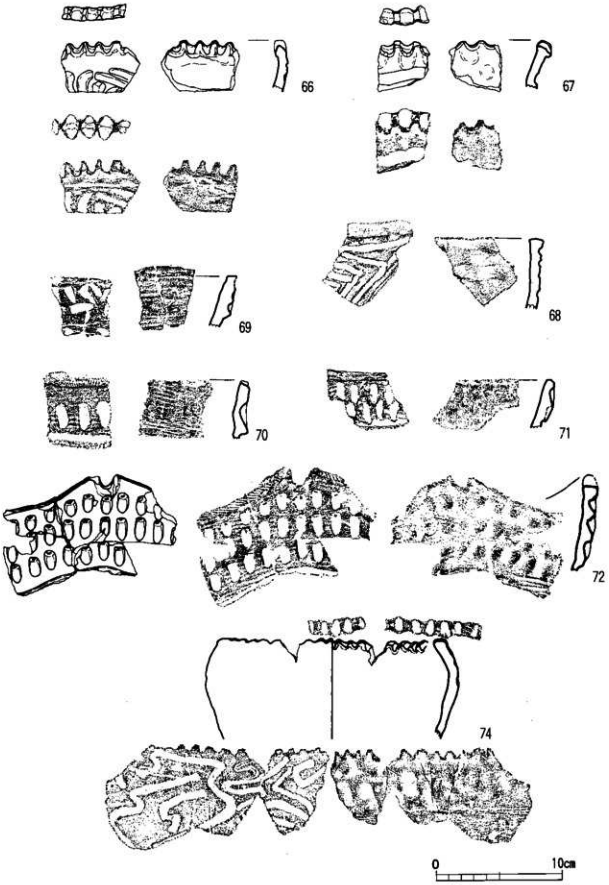
（口唇部と直交する）の短凹線とその下に２条の凹線が見られる。内外器面ともナデ仕上げである。59～62（E類）は平坦な口唇部をもつものである。59は貝殻状の施文具で器面調整を行った後、棒状施文具で平行線文を施している。口唇部から３㎝程下に穿孔が見られ、補修孔の可能性が考えられる。60は貝殻状の施文具で器面調整を行った後、口縁部に細い棒状施文具で入組文を施している。61・62は口唇部が若干厚くなっている。内外器面をナデ調整の後、棒状の施文具で１㎝幅の太形凹線文様が施されている。A類に類似する。63（F類）は口唇部に刻目を持つものである。若干厚くなった口唇部に棒状工具による刻目が施されている。外器面はナデ、内器面は貝殻状の施文具で器面調整を行った後、口縁部に棒状の施文具による８㎜幅の斜方向の平行凹線文様が施されている。64～67（G類）は口縁部が波状の刻目口縁をなすものである。64は内外器面ともナデ仕上げの後、棒状工具による９㎜幅の曲線の平行線文様が施されている。内器面には外器面文様の反作用の飛び出しが見られる。65は内外器面ともナデ仕上げの後、棒状の施文具による９㎜幅の凹線文様が見られる。66は胴部から口縁にかけて内湾する鉢である。内外器面ともナデ仕上げの後、棒状の施文具による５㎜幅の凹線文様が施されている。67は内外器面ともナデ仕上げの後、８㎜程の凹線文様が施されている。68（J類）は口唇部が若干厚くなり、文様が三角形文、菱形文、円形文等規則的な傾向を示しているものである。68は内外器面ともナデ仕上げの後、５㎜幅の凹線による菱形文様が施されている。69～73（K類）は口縁部に刺突および凹点文を巡らすものである。69は平坦な口唇部持ち、肥厚する口縁部に棒状の施文具による凹点文様（口唇に直交１列、平行１列）を巡らす。内器面は貝殻状の施文具による器面調整が見られる。70は波状口縁を呈する。内外器面とも貝殻状の施文具による器面調整の後、口縁部に棒状の施文具による１列の凹点文様を巡らし、その下に横方向の凹線文様が施されている。71は内外器面ともナデ調整の後、肥厚する口縁に棒状の施文具による２列の凹点文様を巡らし、その下に横方向の凹線文が施されている。72は波状口縁をなす。口唇部に貝殻条痕が施され、波頂部に棒状工具による押圧の凹みが見られる。外器面はナデ、内器面は貝殻状の施文具による器面調整の後、口縁部に竹管状施文具による３列の刺突が巡らされている。73は６つの波頂部を持つ波状口縁をなす。内外器面とも貝殻状の施文具による器面調整の後、口縁部に棒状の施文具で口唇部に直交した凹点文列を巡らしている。また、文様は２分割されており、凹点文列の下には２条の凹線文様と山形曲線の凹線文様が施され、その凹線文上に凹点文を施している。内器面には外器面文様の反作用の飛び出しが見られる。口唇部から４～５㎝下に２つの穿孔が確認され、補修孔の可能性も考えられる。74（K類）は口唇部に棒状工具による押圧刻目が施されている。口縁は内湾し、内外器面ともナデ調整の後、棒状施文具による６㎜幅の凹線文様が施されている。文様は複線による入組文様の系統をひくものと思われる。75・76（J類）は、同一個体と思われる。施文具に棒状・ヘラ状工具以外に貝殻を利用しているものである。波状口縁をなし、貝殻状の施文具で器面調整を行った後、胴部の半分から上に太形凹線文様を施し、口縁部には貝殻腹縁による連続押し引き文が巡らされている。76は口唇部から１㎝程下に穿孔が見られ、補修孔の可能性が考えられる。77―１・77―２（L類）は、口唇部に内側、外側の両方から棒状工具による刻目が施されているものである。横方向の棒状工具による７㎜幅の凹線文様が胴部上位に施文されている。内器面はナデで、外器面の胴部下位は斜方向の貝殻条痕が見られる。78・79（M類）は凹線文様間に竹管端部による刺突をもつものである。78は内外器面ともナデ調整の後、口縁部に竹管状施文具による横方向の凹線文様とその間に竹管端部による連続刺突が見られる。口唇部には貝殻腹縁の刺突が



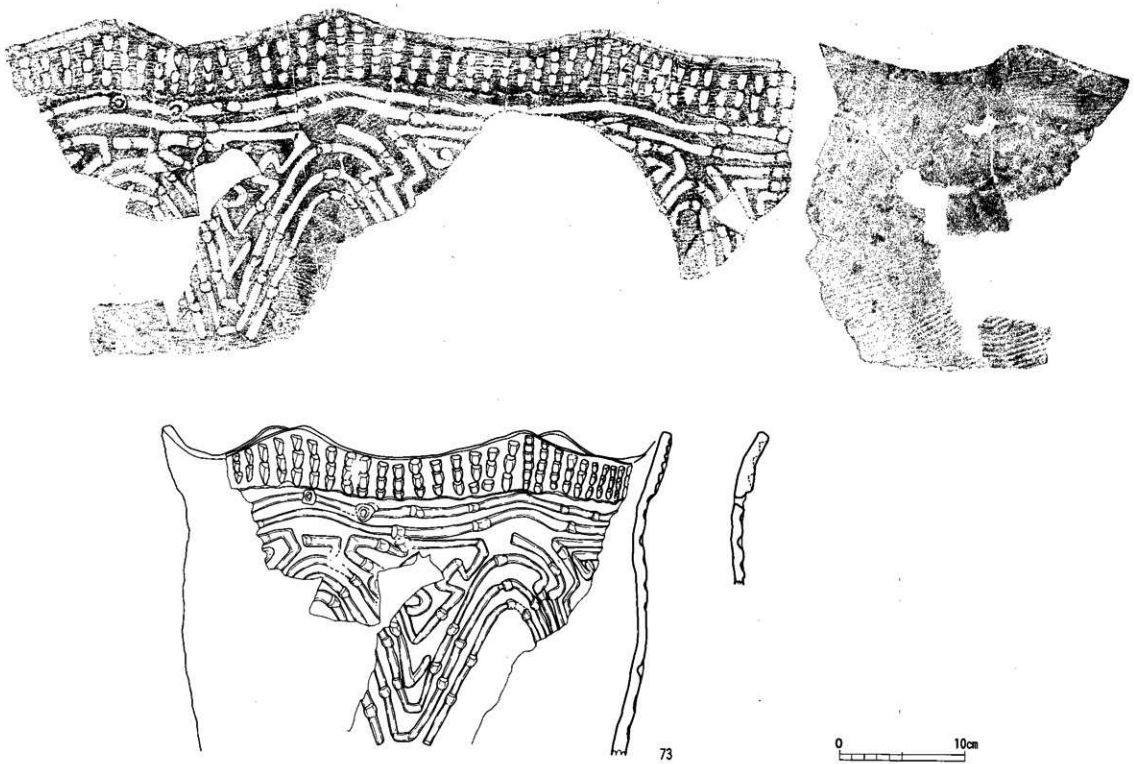
第16図　包含層出土遺物実測図（S＝1／3）



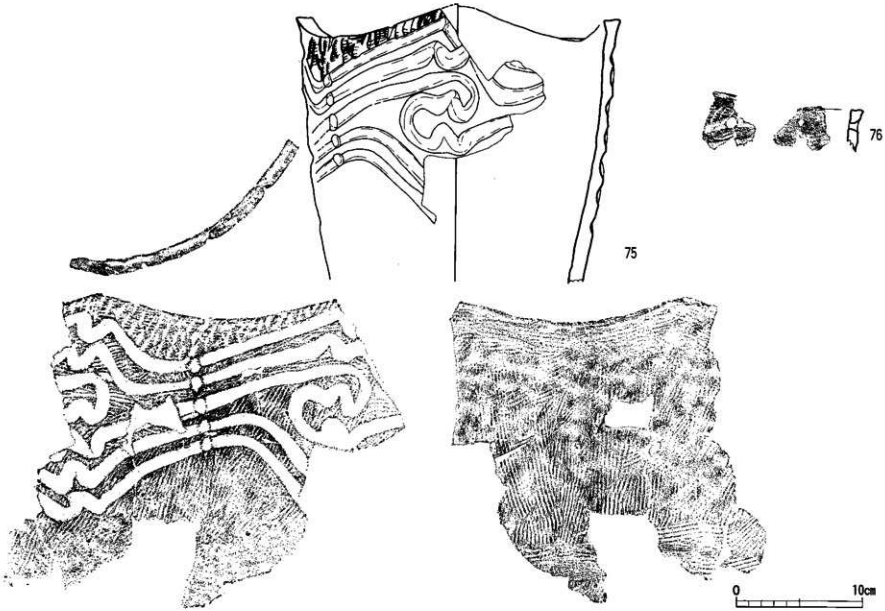
第17図　包含層出土遺物実測図（S＝1／3）



第18図　包含層出土遺物実測図（S＝1/3）



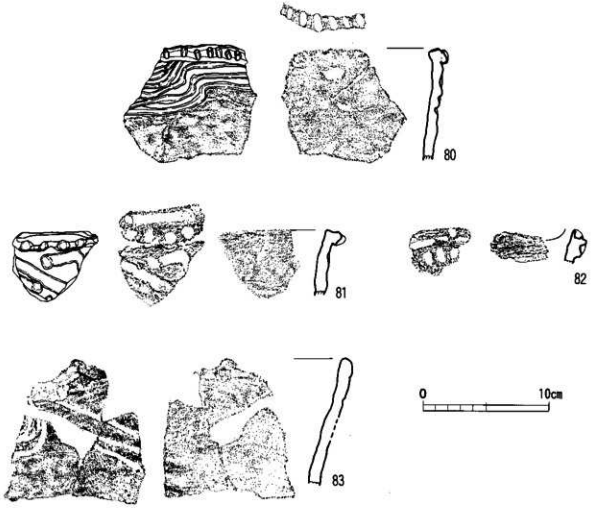
第19図　包含層出土遺物実測図（S＝1／3）



第20図　包含層出土遺物実測図（S＝1／3）

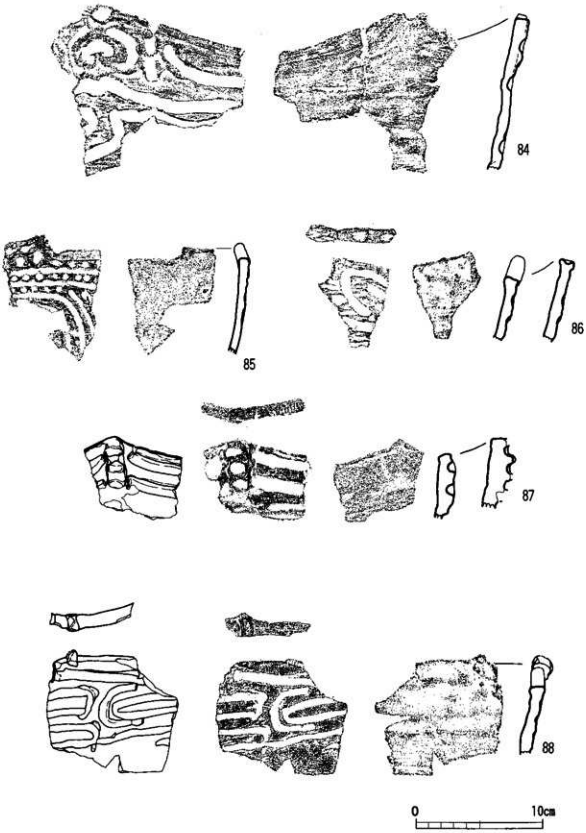
ある。79は口縁部に竹管状工具によって横方向主体の7㎜幅の凹線文様を施し、凹線文間に竹管端部による連続刺突が見られる。80～82（N類）は口縁に粘土帯を貼り付け、工具で凹点文を巡らしているものである。80は内外器面をナデ調整の後、上位に棒状の施文具による5㎜幅の平行線文を施している。口縁に粘土帯を貼り付け、竹管状の施文具で凹点文を巡らしている。口唇部上には刻目がある。81は内外器面ともナデ調整の後、太形凹線文様が施されている。口縁部に粘土帯を貼り付け、棒状工具で押圧刻目を巡らしている。口唇部には太い凹線が見られる。82は波状口縁をなす。波頂部に棒状工具による刺突と外器面には棒状工具による凹線文・凹点文が施されている。83（P類）は口唇部粘土紐を貼り付け押圧を行い、口縁部外器面にヘラ状の施文具による3㎜幅の直線・曲線の凹線文様が施されている。84は波状口縁をなす。口縁部は粘土を貼り付け若干肥厚させている。内外器面ともナデ調整の後、太形凹線文様を施している。口唇部には押圧による凹みが見られる。85はヒレ状の口縁部をもつものである。内外器面ともナデ仕上げの後、棒状の施文具による曲線・直線の4㎜幅の凹線文様と口縁部の凹線間には棒状施文具端部の刺突が巡らされている。86は85と同じくヒレ状の口縁部を持ち、口唇部には押圧による凹みが見られる。内外器面ともナデ調整の後、棒状の施文具による6.5㎜幅の凹線文様が施されてる。87は波状口縁をなす。口縁部に口唇部に直交する粘土を貼り付け、指頭による押圧を施している。口唇部には条痕が見られる。88は平坦な口唇部の上に口唇部に直交して粘土の貼り付けがみられる。内外器面ともナデ仕上げの後、棒状の施文具による6㎜幅の直線・曲線的な凹線文が施されている。89は平坦な口唇部を持ち、内外器面ともナデ調整の後、棒状の施文具で4㎜幅の平行凹線文様を施している。90は波状口縁を呈する。内器面はナデで、外器面は貝殻状の施文具で器面調整を行った後、棒状の施文具で3㎜幅の凹線文様を施している。文様は左右対称に展開している。91は内外器面ともナデ仕上げである。口縁部に粘土紐を貼り付け、ヘラ状工具で斜方向に交差する刻みを施文している。波状口縁をなすか。92は口唇部に貝殻腹縁による刻目と、肥厚する口縁にヘラ状工具端部の刺突を巡らしている。市来式系の土器である。93～105は胴部片である。93・94は曲線的な凹線文 間に棒状工具端部の刺突があるものである。93は内外器面ともナデ仕上げの後、棒状の施文具で3㎜幅の曲線的な凹線文間に半竹管状工具による端部刺突を施している。94は内外器面をナデ仕上げの後、棒状の施文具で4㎜幅の曲線的な凹線文様間に棒状施文具の端部刺突が施されている。95は内外器面ともナデ仕上げの後、ヘラ状工具による凹線文様が施されている。96は内外器面ともナデ仕上げの後、棒状の施文具による横方向の凹線文様が施されている。97は外器面はナデ、内器面は貝殻状の施文具で器面調整をした後ナデ仕上げを行なっている。外器面には棒状工具による5㎜幅の曲線的な凹線文様を横方向に切る短凹線文が施されている。98は胴部が最大に膨らむ器形で、最大径より上位に棒状の施文具による8㎜幅の凹線文様が施されている。内外器面ともナデ仕上げである。99は内外器面とも貝殻状の施文具で器面調整を行なった後ナデ仕上げをしている。外器面には棒状の施文具で7㎜幅の渦巻状の凹線文様が施されている。穿孔が見られ、補修孔の可能性が考えられる。100は内外器面とも貝殻状の施文 具で器面調整を行った後、2条で平行する2.5㎜幅の沈線文様が施されている。指宿式系の土器か。101は内外器面ともナデで、平行する2本の沈線が見られる。102は内外器面とも貝殻状の施文具で器面調 整を行った後、太形凹線文様が施されている。A類に分類される可能性がある。103は内外器面とも貝 殻条痕が見られる。土器分類においてC類の可能性がある。104は内外器面ともナデ仕上げの後、棒状 の施文具で6㎜幅の短直線文が施されている。105は内外器面と

第21図　包含層出土遺物実測図（S＝1／3）



第22図　包含層出土遺物実測図（S＝1／3）

もナデ仕上げの後、棒状の施文具で6㎜幅の曲線状菱形の凹線文様が施されている。106～113は底部である。底面は全て網代底である。106 は器面と底部の厚さが同じで、底部裾にくびれを持たず、胴部に向かって逆「ハ」の字状に直行する 。内外器面ともナデである。107～109は底部裾に若干のくびれを持ち、裾が外に広がる。底面の厚みも器面と比べてわずかに厚みを持つ。110は底部裾にくびれを持たず、若干上げ底気味である。111は底部裾に若干のくびれを持ち、胴部に向かって開き気味に直行する。底部裾に指頭痕が見られる。112 は底部裾にくびれを持ち、裾が広がる。底面は厚い。113は底部裾のくびれが著しく、胴部に向かって 開き気味に延びる器形と思われる。底面は厚い。114～119は市来系の土器に分類される。114は内外器面とも貝殻による器面調整が行なわれている。肥厚する口縁部に貝殻腹縁による連続刺突が施されている。115は波状口縁をなす。内外器面とも貝殻による器面調整が見られる。屈曲する口縁部の上部と下部に斜方向の貝殻腹縁刺突が施されている。丸尾式に分類されると思われる。116～118は内外器面とも貝殻条痕が施され、口縁部に斜方向の貝殻腹縁



第23図　包含層出土遺物実測図（S＝1／3）

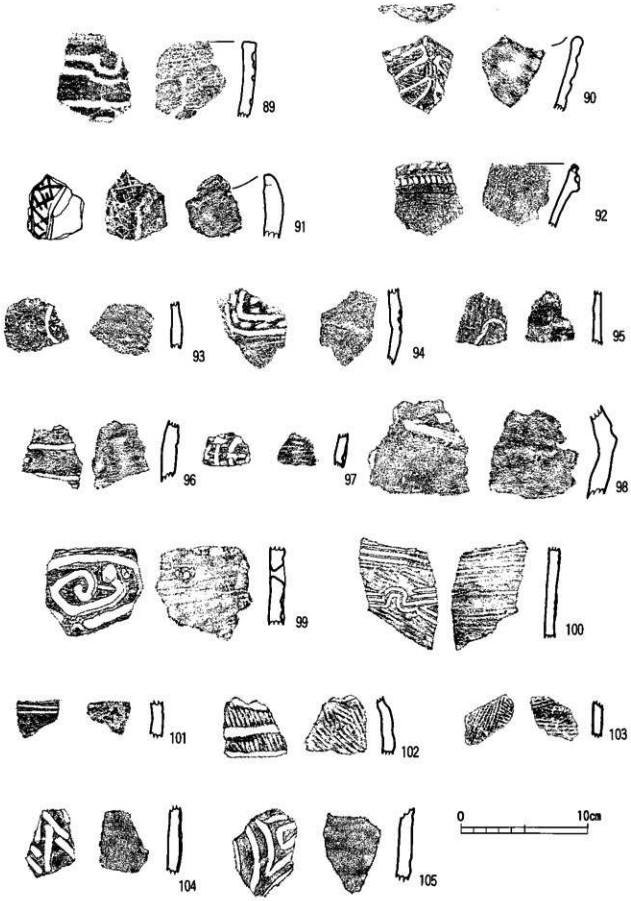
の刺突が見られる。119は内外器面とも貝殻条痕が施され、口縁部は粘土を貼り付け肥厚させている。120～122は黒色磨研土器である。120は深鉢の口縁から 頸部で、内外器面とも丁寧な横方向のミガキが施されている。121は深鉢の口縁部と思われる。内外器 面とも横方向のミガキが施されている。122は浅鉢の頸部と思われる。横方向のミガキが見られる。123～126は黒色磨研土器の系列と思われる。123は深鉢で内外器面とも粗い貝殻条痕が施されている。124 は 深鉢の肩部と思われる。内外器面ともナデ仕上げである。125は浅鉢の肩部と思われる。内外器面とも ミガキによる器面調整が行なわれている。126は深鉢の口縁部と思われるが、内外器面ともナデ仕上げ が行なわれ、口縁部に粘土を貼り付け肥厚させている。127～129は土器片錘である。

土器分類

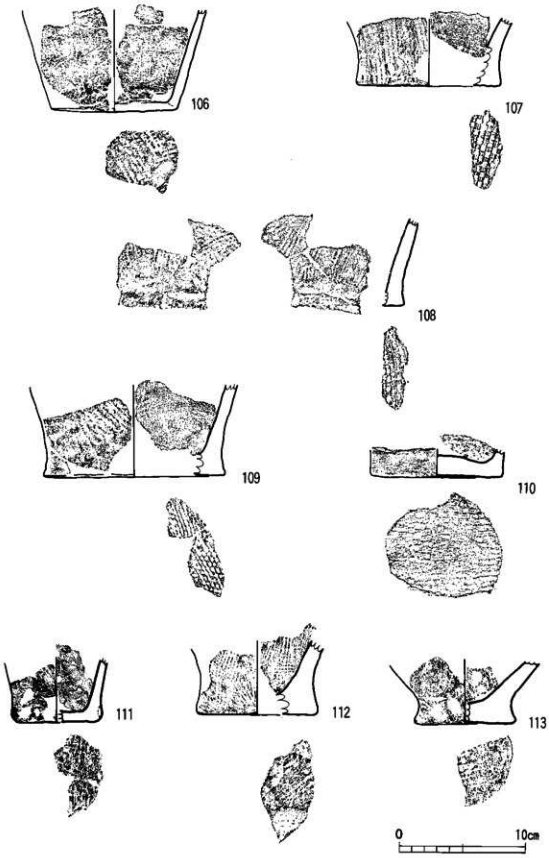
A類～太形凹線文により文様が構成されるもの。(48)
B類～口縁部に指頭ないし、ヘラ状施文具による凹線文（半月形状）をもつもの。(49～51)
C類～文様の施されていないもの。(52～55)
E類～平坦な口唇部をもつもの。(59～62)
F類～口唇部に刻目をもつもの。(63)
G類～口唇部に波状の刻目口縁をなすもの。(64～67)
H類～口唇部が若干厚くなり、文様が三角形文、菱形文、円形文等規則的な傾向を示しているもの。(68)
I類～口縁部に刺突及び凹点文を巡らすもの。(69～73)
J類～口唇部に棒状工具による押圧刻目が施されているもの。(74)
K類～施文具に棒状・ヘラ状工具以外に貝殻を利用しているもの。(75・76)
L類～口唇部に内外両側から凹圧及び刻目が施されているもの。(77－1・77－2)
M類～凹線文間に竹管端部による刺突をもつもの。(78・79)
N類～口縁に粘土帯を貼り付け、工具で凹点文を巡らしているもの。(80～82)
P類～胴部上位及び口縁部に文様が施されているもの。(83)

石器

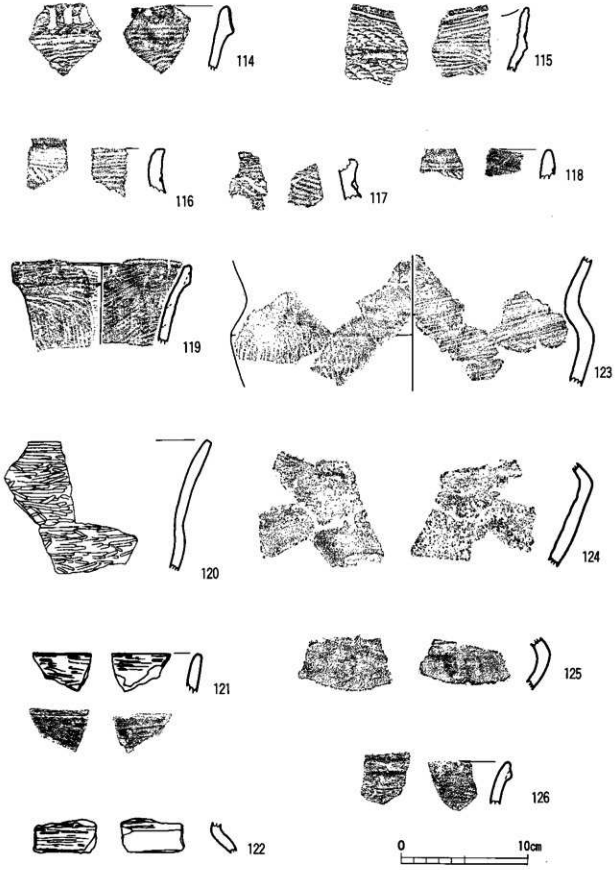
130はホルンフェルス製の打製石鏃である。131～133はスクレイパーである。131は左右側縁及び上面に刃部加工が成されている。石材はシルト岩である。132は右下面が欠損していると思われる。右側縁 上部と左側縁下部に使用痕が見られる。石材は頁岩である。133は右側縁から下面にかけて刃部加工が 成されている。右側縁に使用痕があり、右側面上部には著しい摩擦痕が見られる。使用時の擦痕と思われる。石材は砂岩である。134～139は使用痕剥片である。134は左側縁に使用痕が見られる。石材はシ ルト岩である。135は右側縁と下面に使用痕が確認される。石材は砂岩である。136は左側縁から下面にかけて使用痕か確認される。石材は砂岩である。137は右側縁と上面右側に使用痕が見られる。石材は チャートである。138は下面に使用痕が見られる。石材は頁岩である。139は右側縁に使用痕が確認される。左側縁においては二次加工痕も確認される。石材は頁岩である。140～142は磨製石斧である。140 は小型の製品で、両面に擦痕が見られる。石材は砂岩である。141は御池ボラ上面検出の柱穴（P10）から出土したものである。上半分は使用時に欠損したと思われる。両側縁



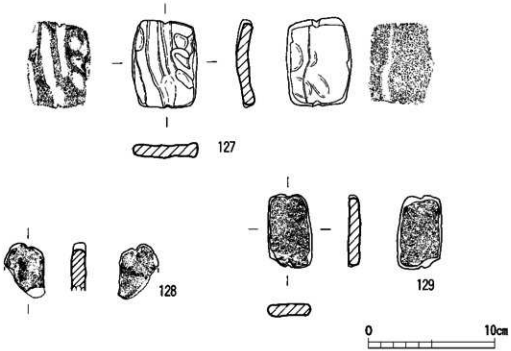
第24図　包含層出土遺物実測図（S＝1／3）



第25図　包含層出土遺物実測図（S＝1／3）

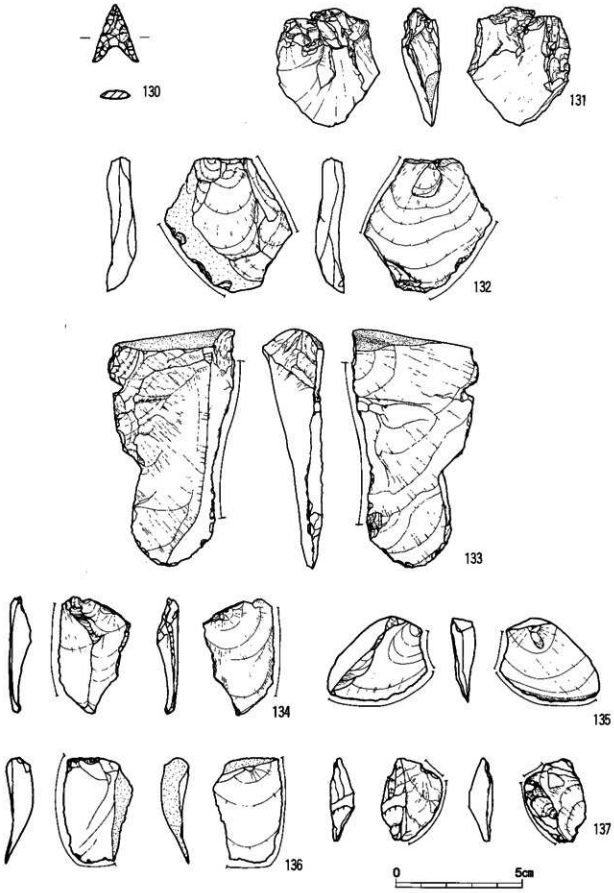


第26図　包含層出土遺物実測図（S＝1／3）

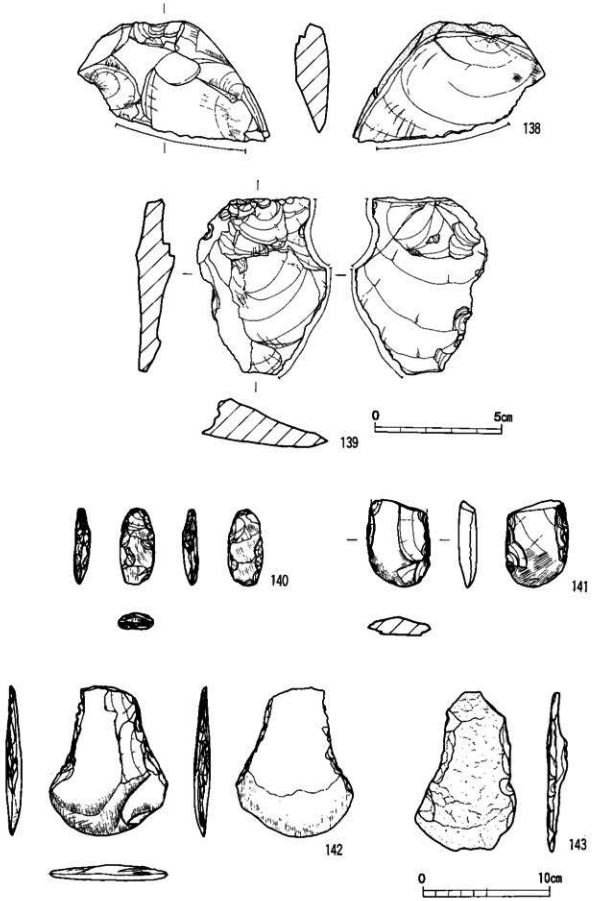


第27図　包含層出土土器片錘実測図（S＝1／3）

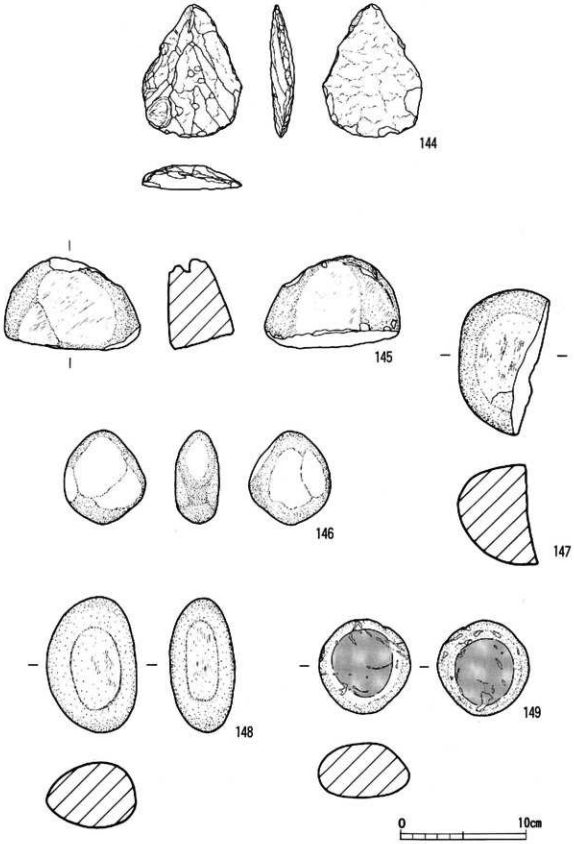
を剥離し、表面は 中央に 稜を作り出す形で磨かれている。石材は砂岩である。142 はバチ形を呈する。薄く剥離した石材の左右 両側縁を剥離して基部を作り出し、下面は両面を磨いて刃部を形成している。石材は砂岩である。143 は輝石安山岩製の打製石斧である。石材を薄く剥離して、両側縁を剥離して基部を作り出している。摩擦加工を行なう前の磨製石斧の未製品の可能性も考えられる。144 は石斧の未製品と思われる。石材は 輝石安山岩である。145 ～ 149 は磨石である。145 は砂岩製である。半分は欠損しており、両面に擦痕が 見られる。146 は凝灰岩製である。両面及び右側面上部、左側面に摩擦痕が見られる。147 は砂岩製である。上面中央部に著しい摩擦痕が見られる。148 は砂岩製である。上面及び右側面に摩擦痕が見られる 。149 は砂岩製である。両面に摩擦痕が見られる。150 ～ 155 は敲石である。150 は半分が欠損している。左側面上部に敲打痕、両面には擦痕も確認される。石材は砂岩である。151 は半分が欠損している。上側面に著しい敲打痕と両面に擦痕が確認される。石材は砂岩である。152 ・ 153 も半分が欠損している。全側面に著しい敲打痕と両面に擦痕が確認される。石材はどちらとも砂岩である。154 は凝灰岩製である。両面に敲打痕が確認される。155 は砂岩製である。上部は欠損している。下面に敲打痕が確認され る。156 は砂岩製の砥石である。両面及び右側面に擦痕が確認される。特に右側面の摩擦痕は著しい。157 は凹石である。表面中央部に凹みを持つ。石材は凝灰岩である。158 ・ 159 ・ 161 ・ 162 は台石である。158 は凝灰岩製で、両面に敲打痕が見られる。159 は凝灰岩製である。両面中央部に敲打痕が見られる。161 は輝石安山岩製である。上半分は欠損している。表面の左下に擦痕が確認される。162 は砂岩製である。表面中央部に敲打痕とその周辺に擦痕が確認される。160 は砂岩製の両端切れ目石錘である。石材は砂岩である。163 は粗粒砂岩製の石皿である。



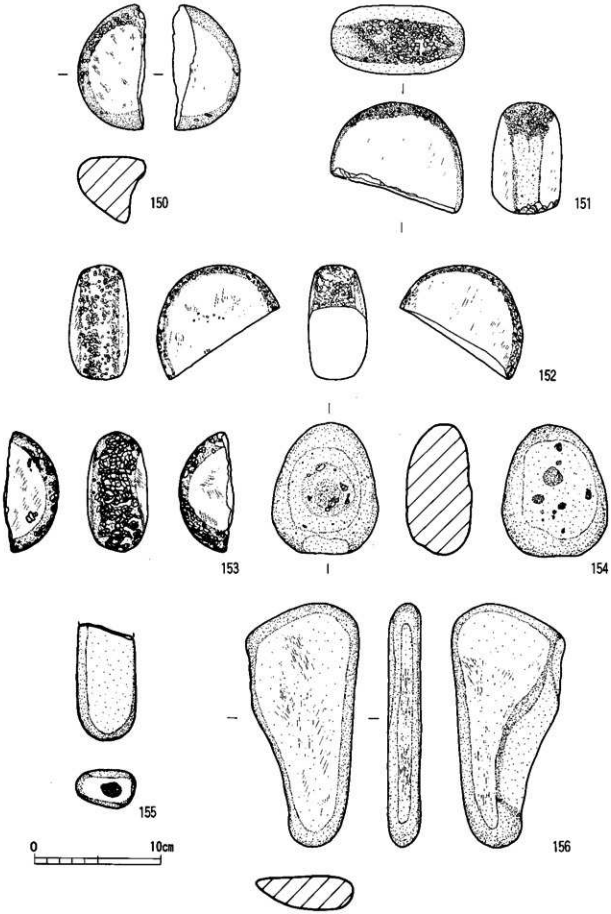
第28図　包含層出土石器実測図（S＝2/3）



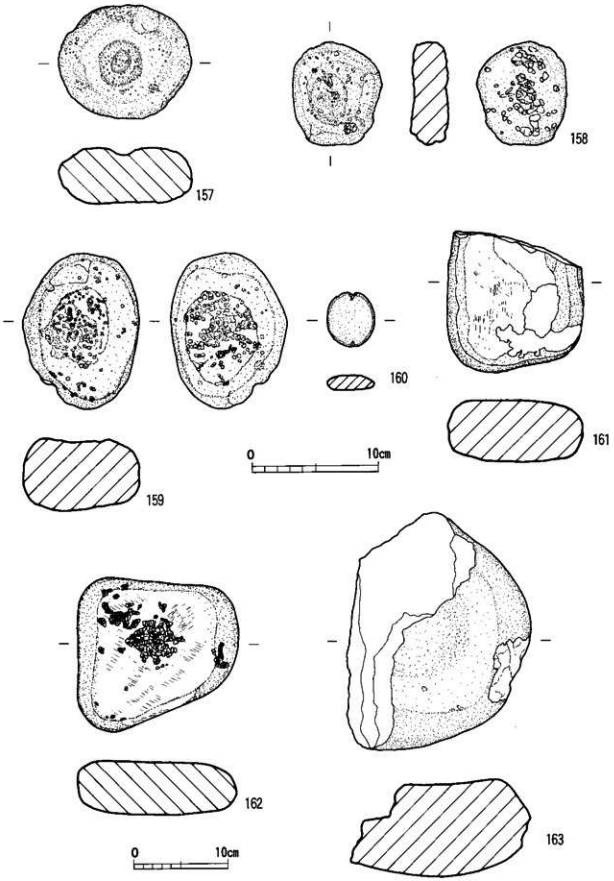
第29図　包含層出土石器実測図(138・139:S=2/3、140～143:S=1/3)



第30図　包含層出土石器実測図（S＝1／3）



第31図　包含層出土石器実測図（S＝1／3）



第32図　包含層出土石器実測図（157～161：S＝1/3、162・163：S＝1/4）

第１表　縄文時代の遺物観察表（１）

遺物番号	出土地点	分類	器部（復元口径cm）	文様	調整	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
1	SA１	A類	深鉢 口縁	口唇部は粘土を貼付け押圧刻痕 外面は10mm幅の菱形の凹線文	内外面とも貝殻条痕の上をナデ	にぶい黄橙 黒褐	暗灰黄 オリーブ褐	1mm以下の黒・褐色の粒、透明光沢粒	波状口縁 外面にススト
2	SA１	A類	深鉢 口縁(23.5) 胴部	外面は指による8mm幅の凹線文	内外面とも貝殻条痕の上をナデ	にぶい赤褐 暗赤褐	にぶい赤褐 暗赤褐	1mm以下の黒褐・灰褐・乳白色の粒	波状口縁
3	SA１	A類	深鉢 口縁(34.6)～37.4 底部 11.4	口唇部波頂部に押圧 外面は棒状工具による12mm幅の渦巻状の凹線文 底部は網代底	内外面とも貝殻条痕の上をナデ	にぶい赤褐 にぶい黄橙	明赤褐 にぶい黄橙	3mm以下の黄白・褐色の粒 1mm以下の金色光沢粒	波状口縁 内外面とも一部黒変
4	SA１	C類	深鉢 口縁(27.5) 胴部	口唇部は波頂部付近に押圧	内外面とも貝殻条痕の上をナデ	褐灰 にぶい褐	にぶい黄橙 にぶい赤褐	1.5mm以下の白灰・淺黄橙・褐灰色の粒	波状口縁
5	SA１	C類	深鉢 口縁(24.3) 胴部	口唇上部に粘土紐の貼り付け	外面は貝殻条痕の上をナデ 内面はナデ	にぶい褐 灰褐	にぶい黄橙	1mm～3mmの橙・暗褐色の粒、透明・黒色光沢粒	外面にススト 波状口縁
6	SA１	E類	深鉢 口縁(25.2) 胴部	口唇部には一部凹みがある 外面は指による7mm幅の凹線文	内外面ともナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm～5mmの淺黄橙・褐灰色の粒 2mm以下の白灰・灰白・褐灰色の粒、透明光沢粒	外面にスト
7	SA１	E類	深鉢 口縁	外面は棒状工具による6mm幅の凹線文	内外面ともナデ	灰黄褐	黒褐	1mm以下の透明光沢粒	内面にスト
8	SA１ 中央土坑	E類	深鉢 口縁	外面は指による7mm幅の押圧	内外面ともナデ	暗オリーブ褐	にぶい黄褐	1mm以下の灰白・褐色の粒 0.5mm以下の透明光沢粒	外面にスト
9-1 9-2 9-3	SA１	G類	深鉢 口縁 底部(13.75)	外面は7mm幅の凹線文 底部は網代底	内外面とも貝殻条痕の上をナデ	にぶい黄橙 灰黄	にぶい黄橙 にぶい橙	3mm以下の灰・乳白・黄灰・茶・黒色の粒 0.5mm以下の透明・半透明・黒色透明粒	外面にスト付着
10	SA１	G類	深鉢 口縁 胴部	口唇部は刻目 外面は7mm幅の凹線文	内外面とも貝殻条痕	オリーブ オリーブ黒	灰黄	2mm以下の淺黄橙・褐色の粒	外面にスト
11	SA１	G類	深鉢 口縁	口唇部は粘土紐を貼付け、指つまみによる波状の刻目 外面は5mm幅の凹線文	内外面ともナデ	暗オリーブ褐	オリーブ褐	1.5mm以下の褐灰・灰白色の粒	
12	SA１	G類	深鉢 口縁(25.7) 底部付近	口唇部は粘土紐を貼付け、指による凹圧刻目 口縁部外面は8mm幅の凹線文	外面は貝殻条痕の上をナデ 内面はナデ	にぶい赤褐	明黄褐	2mm以下の黒・灰・乳白・褐色の粒 0.5mm以下の透明・半透明・黒色光沢粒	外面に黒変ススト
13	SA１	I類	深鉢 口縁	口唇部は棒状工具による刻目 外面は平竹管工具による10mm程の刺突 浅い沈線文	外面はナデ 内面は調整の為調整不明	暗灰黄	黄灰	2mm以下の褐・灰白色の粒 1mm以下の透明光沢粒	
14	SA１	K類	深鉢 口縁	外面は貝殻腹縁文	内外面ともナデ	にぶい黄褐	明灰黄	2mm以下の灰白・褐灰・黒色の粒	外面にスト
15	SA１ 中央土坑	K類	鉢 胴部	外面は4mm幅の凹線に区画された中に刻目圧痕	内外面ともナデ	暗褐	にぶい黄褐	1mm以下の灰白色の粒	
16	SA１	L類	深鉢 口縁	口唇部は内外両面に工具による凹圧刻目 外面は指による凹点と10mm幅の凹線文	内外面ともナデ	褐灰 にぶい黄褐	にぶい褐	2mm以下の灰白・褐色の粒、透明光沢粒	
17	SA１ 中央土坑	L類	深鉢 口縁	口唇部は棒状工具による刻目	外面は調整の為調整不明 内面はナデ	にぶい赤褐	淺黄	1mm以下の灰白・淺黄橙色の粒	
18	SA１	O類	深鉢 口縁	口唇部は棒状工具による刻目 外面は5mm幅の2条の凹線文	外面は貝殻条痕の上をナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	2mm以下の褐・灰白色の粒 0.5mm以下の透明光沢粒	

第1表　縄文時代の遺物観察表（2）

遺物番号	出土地点	分類	部位（復元口径cm）	文様	調整	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
19	SA1	O類	深鉢 口縁	口唇部は指による凹圧刻目 外面は6mm幅の凹線文	内外面ともナデ	にぶい黄褐	にぶい橙	2mm以下の灰白・褐色の粒 0.5mm以下の透明光沢粒	
20	SA1	O類	深鉢 口縁	口唇部は粘土粒を貼付け凹圧刻目 外面は6mm幅の凹線文	内外面ともナデ	にぶい褐	にぶい褐	0.5mm以下の灰白色の粒、透明光沢粒	外面にススト
21	SA1	P類	深鉢 口縁～胴部	口唇部は棒状工具による5mm幅の凹線 外面は5mm幅の沈線文	内外面ともナデ	にぶい赤褐 黒褐	灰黄褐 にぶい赤褐	2mm以下の灰・灰白・黒色の粒、透明光沢粒	外面にススト
22	SA1	P類	深鉢 胴～底部付近	外面は7mm幅の工具による凹線文	内外面とも貝殻条痕の上をナデ	灰黄褐 灰褐	にぶい黄	5.5mm以下の浅黄・灰褐・赤褐色の粒 1mm以下の黒色・透明光沢粒	外面にススト
23	SA1		深鉢 口縁	口唇部に粘土紐の貼付け	内外面ともナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	1mm以下の灰白・褐灰色の粒 0.5mm以下の透明光沢粒	
24	SA1		深鉢 口縁	口唇部に竹管状工具による刺突	内外面ともナデ	灰褐灰	にぶい褐	1mm以下の灰白・黒色の粒 0.5mm以下の透明光沢粒	
25	SA1		鉢 胴部	外面は竹管状の工具による5mm幅の凹線文とその区画の中に竹管状の刺突	内外面ともナデ	灰黄褐	橙	1.5mm以下の灰白・浅黄橙・褐灰色の粒、透明光沢粒	
26	SA1 中央土坑		深鉢 胴部	外面は棒状工具による3mm幅の凹線の区画の中に棒状工具による刺突	内外面ともナデ	黒褐	暗オリーブ褐	4mm以下の赤褐色の粒 1.5mm以下の黒色光沢粒	
27	SA1		鉢 胴部	外面は棒状工具による3mm幅の凹線の区画の中に棒状工具による刺突	内外面ともナデ	褐灰	にぶい黄褐	1.5mm以下の灰白・褐灰・浅黄橙色の粒、透明光沢粒	
28	SA1 中央土坑		深鉢 胴部	外面は棒状工具による8mm幅の凹線文	外面はナデ 内面は貝殻条痕の上をナデ	黒褐	にぶい褐	2mm以下の灰白色の粒 1mm以下の黒・褐灰色の粒	
29	SA1		深鉢 胴部	外面は横方向の4mm幅の棒状工具による凹線文	内外面ともナデ	褐灰	にぶい橙	1.5mm以下の灰白色の粒 1mm以下の黒色光沢粒	
30	SA1		深鉢 胴部	外面は半竹管状の工具による6mm幅の凹線文	外面はナデ 内面は貝殻条痕	黒褐	にぶい褐	1.5mm以下の灰白・褐色の粒 1mm以下の黒色・透明光沢粒	
31	SA1		深鉢 底部（9.8）	底部はナデ	内外面は丁寧なナデ	にぶい黄褐 にぶい橙	にぶい黄褐	1mm以下の黄白・黒褐色の粒、黒色・透明光沢粒	
32	SA1		深鉢 底部（8.0）	底部は網代底	内外面は貝殻条痕の上をナデ	灰黄褐 にぶい黄褐	明黄褐	2mm以下の灰白・にぶい黄褐色の粒、黒色・透明光沢粒	
33	SA1		土器片錘	最大長（cm）7.3　最大幅（cm）5.15　最大厚（cm）1.3　重さ（g）70	網代底 ナデ	灰	明褐	2mm以下の褐色の粒、透明光沢粒	底部転用
34	SA1		土器片錘	5.3　3.85　0.7　19	貝殻条痕の上をナデ	暗灰黄	灰黄褐	1.5mm以下の乳白色粒 1.5mm以下の黒透明光沢粒	
41	SA2		深鉢 口縁	口唇部に粘土粒の貼付け 外面に横方向の棒状工具による6mm幅の凹線文	内外面ともナデ	オリーブ黒	オリーブ黒 明褐	2mm以下の灰白・褐灰色の粒	
42	SA2	D類	鉢 胴部付近	外面頸部付近に棒状工具による1条の連続刺突文 3mm幅の棒状工具による凹線文	外面はナデ 内面は貝殻条痕	明黄褐	明黄褐	1.5mm以下の赤褐色の粒 1mm以下の灰白・褐灰色の粒、透明・半透明光沢粒	外面ススト

第１表　縄文時代の遺物観察表（３）

遺物番号	出土地点	分類	器部（復元口径cm）	文様	調整	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
43	SA２		深鉢 口縁部付近	外面に棒状工具による８mm幅の回線文、その下に連続刺突文	内外面ともナデ	にぶい黄褐 褐灰	オリーブ褐 褐	２mm以下の灰褐・灰赤色の粒、透明光沢粒	
44	SA２		深鉢 胴部	外面に棒状工具による７mm幅の回線文	内外面ともナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	２mm以下の赤褐色の粒 ４mm以下のにぶい黄色の粒	外面ススス
45	SA２		深鉢 胴部	外面に棒状工具による３～４mm線の回線文	内外面ともナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	１mm以下の灰白色の粒	外面ススス
46	SA２		深鉢 底部(10.1)	底部は網代底	外面は貝殻条痕 内面は貝殻条痕の上をナデ	褐	褐	２mm以下の乳白・褐色の粒、透明光沢粒	
48	7GV層	A類	深鉢 口縁	外面は指による９mm幅の回線文	外面は貝殻条痕の上をナデ 内面はナデ	にぶい赤褐	にぶい黄褐	１mm程の黒色・透明光沢粒	
49	4GV層	B類	深鉢 口縁	口唇部は棒状工具による押圧刻目 外面は棒状工具による７mm幅の円点文とC字形の回線文	内外面ともナデ	橙	褐	２mm以下の灰・黒・黄灰色の粒 0.５mm以下の透明・半透明・黒色光沢粒	
50	7GB層 5GG層	B類	深鉢 口縁 胴部	外面は指による７mm幅の逆C字形の回線文と渦巻状の回線文	内外面とも貝殻条痕の上をナデ	明赤褐 褐	橙 にぶい橙	4mm以下の灰黄褐・にぶい赤褐・灰黄・灰褐色の粒、透明・黒色光沢粒	波状口縁 外面にススス
51	P	B類	深鉢 口縁	外面はヘラ状工具による２mm幅の逆C字形と横方向の回線文	内外面ともナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	２mm以下の灰白色の粒、透明光沢粒	波状口縁
52	7GB層	C類	深鉢 口縁		内外面ともナデ	橙 褐灰	橙 にぶい黄橙	１mm以下の黒褐・茶褐・灰褐色の粒 0.５mm以下の透明光沢粒	
53	7GB層	C類	深鉢 口縁	口唇部は粘土紐を貼付け棒状工具による押圧刻目	内外面ともナデ	橙 黒褐	にぶい黄橙 灰黄褐	２mm以下の茶褐・黒褐色の粒 １mm以下の黒褐・灰褐・乳白色の粒、透明光沢粒	
54	20GV層	C類	深鉢 口縁		内外面ともナデ	にぶい褐 黒褐	黄灰 灰黄褐	２mm以下の褐・灰黄色の粒	
55	10GV層	C類	深鉢 口縁(28.5) 胴部		外面はナデ 内面は貝殻条痕のままナデ	灰黄	にぶい黄	５mm以下の黄橙色の粒	外面にススス
56	SE２	D類	深鉢 口縁	口縁部に粘土紐を貼付け、貝殻腹縁によって刻目を施す 外面は９mm幅の縄回線	内外面ともナデ	黒	灰黄褐	２mm以下の白色の粒 １mm以下の透明・黒色光沢粒	外面にススス
57	7GB'-V層	D類	深鉢 口縁	外面は棒状工具による回線 内面は外面の施文による八	内外面ともナデ	灰褐	黄灰	１mm以下の黒色の粒、透明光沢粒 0.５mm以下の乳白・黒・灰白色の粒	波状口縁
58	7GV層下	D類	深鉢 胴部	外面は棒状工具による回線	内外面ともナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	１mm以下の灰白・灰色の粒 0.５mm以下の透明光沢粒	外面にススス
59	5EG層	E類	深鉢 口縁	外面に６mm幅の回線文	内外面とも貝殻条痕	明赤褐	黒褐	0.５mm以下の淡橙色の粒 １mm以下の灰白色の粒、透明光沢粒	
60	4GV層	E類	深鉢 口縁 胴部	外面に棒状工具による４mm幅の入組状の回線文	内外面とも貝殻条痕の上をナデ	にぶい黄橙 黒褐	灰黄褐	２mm以下の灰白・淡橙色の粒 １mm以下の透明・黒・金色光沢粒	
61	3GV層下	E類	深鉢 口縁	口唇部に押圧あり 外面に棒状工具による10mm幅の回線文	内外面ともナデ	黄褐	にぶい黄橙	５mm以下の淡黄・橙色の粒、透明・黒色光沢粒	外面ススス

第1表　縄文時代の遺物観察表（4）

遺物番号	出土地点	分類	器部（復元口径cm）	文様	調整	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
62	2HGV層	E類	深鉢 口縁	外面に工具による10mm幅の凹線文	内外面ともナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	1mm以下の淡黄色の粒、透明・黒色光沢粒	
63	8HGV層	F類	深鉢 口縁	口唇部に棒状工具による刻目 外面に棒状工具による8mm幅の押線文	外面はナデ 内面は貝殻条痕の上をナデ	にぶい褐	明褐	1mm以下の淡黄色の粒、透明・黒色光沢粒	
64	8HGV層下	G類	深鉢 口縁	口唇部は波状に押圧 外面は工具による6mm幅の凹線文	内外面ともナデ	灰褐 にぶい褐	にぶい黄褐	2mm以下の淡黄色の粒、透明・黒色光沢粒	外周にススあり
65	7HGIV層	G類	深鉢 口縁	口唇部に波状の刻目 外面は棒状工具による9mm幅の凹線文	内外面ともナデ	にぶい褐	灰黄	1mm以下の透明光沢粒	
66	5GGV層	G類	深鉢 口縁	口唇部は波状の刻目 外面は5mm幅の凹線文	内外面ともナデ	にぶい褐	にぶい褐	1.5mm以下の黄白色の粒 0.5mm以下の黒色光沢粒	
67	3HGV層	G類	深鉢 口縁	口唇部は波状の刻目 外面は8mm幅の凹線文	内外面ともナデ	明赤褐	明赤褐 にぶい黄橙	0.5mm以下の黄白・褐色の粒 1mm以下の黒色光沢粒	
68	SE5	H類	深鉢 口縁	外面は5mm幅の菱形の凹線文	内外面ともナデ	黒褐	明赤褐	1mm以下の白色の粒、黒色・透明光沢粒	外面にススあり
69	7HGV層	I類	深鉢 口縁	口縁部外面は棒状工具による6mm幅の縦形線文	外面はナデ 内面は貝殻条痕の上をナデ	にぶい赤褐	褐	1mm以下の灰白色の粒	
70	4HGV層	I類	深鉢 口縁	口縁部外面は9mm幅の凹点文 内面に外面文様の凸	内外面とも貝殻条痕の上をナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	2mm以下の灰白・黒褐色の粒、0.5mm以下の透明光沢粒	波状口縁
71	6HGV層	I類	深鉢 口縁	口縁部外面は棒状工具による5mm幅の凹点文列	内外面ともナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の黄灰・褐・黒色の粒 0.5mm以下の半透明・透明・黒色光沢粒	
72	8HGV層	I類	深鉢 口縁	口唇部は押圧による凹み 外面は管状工具による凹点文列	内外面とも貝殻条痕の上をナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	1.5mm以下の灰・褐・赤褐色の粒 1mm以下の透明・黒色光沢粒	外面にススあり
73	3HJ層下 SE1	J類	深鉢 口縁(40.4) \ 胴部	口縁部外面は棒状工具による8mm幅の凹点文列 外面は棒状工具による8mm幅の凹線文 補修孔有り	内外面とも貝殻条痕の上をナデ	赤褐	明赤褐	2mm以下の黄灰・灰・黒色の粒 0.5mm以下の黒色・透明・半透明光沢粒	波状口縁 内外面とも一部黒変
74	7HJV層 7HGV層	J類	浅鉢 口縁(17.1) \ 胴部	口唇部は押圧刻目 外面は6mm幅の凹線文	内外面ともナデ	褐	にぶい褐	1.5mm以下の白・黒色の粒 1mm以下の黒色光沢粒 0.5mm以下の透明光沢粒	外面にススあり
75	7HGV層	K類	深鉢 口縁(25.7) \ 胴部	口縁部外面は貝殻腹縁による押し引き 外面は8mm幅の凹線文	内外面とも貝殻条痕の上をナデ	明褐 黒褐	黒褐	1mm以下の褐・灰黄色の粒	波状口縁 外面にススあり
76	7HGV層	K類	深鉢 口縁	口縁部外面は貝殻腹縁による押し引き 外面は9mm幅の凹線文 補修孔有り	内外周ともナデ	黒褐	黒褐	1mm以下の灰白色の粒、黒色・透明光沢粒	75と同一個体か
77-1 77-2	8HJ層下 8HJV層下	L類	深鉢 口縁 \ 底部付近	口唇部は内外面の周囲から棒状工具による刻目 外面は棒状工具による7mm幅の凹線文	外面は貝殻条痕の上をナデ 内周はナデ	にぶい褐 褐	にぶい黄褐 黒褐	4mm以下の黒・灰・褐色の粒 0.5mm以下の黒色・透明・半透明光沢粒	
78	5HOV層	M類	深鉢 口縁	口唇部は刻目 口縁部外面は竹管による5mm幅の凹線文 その周に竹管による連続刺突文	内外面ともナデ	にぶい黄橙	褐灰	1mm以下の灰・灰褐・橙色の粒 0.5mm以下の透明光沢粒	外周にススあり
79	5HGV層	M類	深鉢 口縁	口縁部外面は竹管による7mm幅の凹線文 その間に竹管による連続刺突文	内外周ともナデ	にぶい橙	にぶい橙 にぶい黄	1mm以下の白灰・灰褐・淡黄橙の粒	外面にススあり

第1表　縄文時代の遺物観察表（5）

遺物番号	出土地点	分類	器部（復元口径cm）	文様	調整	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
80	3DG下層 6DG下層	N類	深鉢 口縁 ～ 胴部	口唇部は棒状工具による刻目 口縁部は粘土紐を貼付け竹管状の工具による巴点文 外面は棒状工具による5mm幅の平行巴線文	内外面ともナデ	にぶい赤褐	にぶい黄橙 灰褐	3mm以下の乳白色の粒	外面にススあり
81	7IG V層	N類	深鉢 口縁 ～ 胴部	口唇部に巴線文 口縁部は粘土紐を貼付け棒状工具による巴圧刻目 外面は8mm幅の巴線文	内外面ともナデ	黒褐	にぶい褐	2mm以下の乳白・黒褐色の粒 0.5mm以下の透明光沢粒	
82	7IG V層	N類	深鉢 口縁	口唇部は竹管刺突文 外面は棒状工具による巴点文	内外面ともナデ	にぶい黄褐	灰褐黄	1.5mm以下の半透明光沢粒	波状1条 外面にススあり
83	7IG V層	P類	深鉢 口縁 ～ 胴部	口唇部は押圧 外面は3mm幅の巴線文	内外面ともナデ	にぶい褐	にぶい褐 にぶい黄褐	1～2mmの淡黄色の粒、黒色・透明光沢粒	外面にススあり
84	7IG V層		深鉢 口縁 ～ 胴部	口唇部は押圧による巴み 外面は棒状工具による10mm幅の巴線文	内外面とも貝殻条痕の上をナデ	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の白・黄白・黄・赤褐・黒褐色の粒、透明光沢粒	波状1条
85	5HG V層		深鉢 口縁 ～ 胴部	口唇部は二列の刺突文 外面は連続刺突文・巴線文	内外面ともナデ	灰黄	灰黄 黄灰	1mm以下の黒褐・黄褐色の粒 0.5mm以下の透明・黒色光沢粒	外面にススあり 口縁部内面にススあり
86	7IG V層		深鉢 口縁	口唇部は押圧による巴み 外面は棒状工具による6.5mm幅の巴線文	内外面ともナデ	褐灰 にぶい褐	にぶい褐 褐灰	2mm以下の浅黄橙・灰白・褐灰色の粒、黒色光沢粒	外面にススあり
87	7DG V層		深鉢 口縁	口唇部は条痕 外面は9mm幅の巴線・押圧文	内外面ともナデ	橙	橙	1.5mm以下の黄白・黄・黒褐色の粒、透明光沢粒	外面にススあり
88	7IG V層		深鉢 口縁	口唇部は巴圧・粘土紐の貼付け 外面は4mm幅の巴線文	内外面ともナデ	にぶい橙	にぶい褐	1mm以下の透明光沢粒、浅黄橙・灰白・灰褐・褐灰色の粒	外面にススあり
89	7IG V層		深鉢 口縁	外面に棒状工具による4mm幅の平行巴線文	外面はナデ 内面は条痕の上にナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	0.5mm以下の黄白・褐色の粒、透明光沢粒	外面にススあり
90	P		深鉢 口縁	外頁に棒状工具による3mm幅の巴線文	外面は条痕の上をナデ 内面はナデ	浅黄	黄灰	2mm以下の透明光沢粒	
91	4HG V層		深鉢 口縁	外面に粘土帯を貼付けヘラ状工具による刻み	内外面ともナデ	にぶい褐	黒褐	2mm以下の灰白・茶色の粒 0.5mm以下の透明光沢粒	外面にススあり
92	7BG V層		深鉢 口縁	口唇部に貝殻腹縁による刻目 口縁部にヘラ状工具端部の連続刺突	内外面ともナデ	にぶい褐	橙	1mm以下の淡黄色の粒、透明・黒色光沢粒	外面にススあり 市来式系
93	8HG IV層		深鉢 胴部	外面に棒状工具による3mm幅の巴線文の区画内に半竹管状の刺突	内外面ともナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	1mm以下の灰白色の粒、黒色・透明光沢粒	
94	5FG IV層		深鉢 胴部	外面に棒状工具による4mm幅の巴線文間に端部刺突	内外面ともナデ	にぶい褐	黒褐	1mm以下の浅黄色の粒 0.5mm以下の透明光沢粒	
95	5HG IV層		深鉢 胴部	外面にヘラ状工具による巴線文	内外面ともナデ	褐灰	灰褐	2mm以下の浅黄色の粒 1mm以下の透明光沢粒	
96	7IG V層		深鉢 胴部	外面に棒状工具による巴線文	内外面ともナデ	灰黄褐	にぶい褐	1.5mm以下の白・黒色の粒 1mm以下の透明光沢粒	外面にススあり
97	7BG V層		深鉢 胴部	外面に棒状工具による4mm幅の巴線文	外頁はナデ 内面は条痕の上をナデ	黒褐	褐	1mm以下の白色の粒 0.5mm以下の透明光沢粒	

第1表　縄文時代の遺物観察表（6）

遺物番号	出土地点	分類	器部（復元口径cm）	文様	調整	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
98	8IGV層		深鉢 胴部	外面に棒状工具による8mm幅の四線文	内外面ともナデ	にぶい橙	にぶい黄褐	3mm以下の乳白・黒色の粒 1mm以下の透明光沢粒	外面にススあり
99	6IGV層		深鉢 胴部	外面に工具による7mm幅の渦巻状の円線 穿孔あり	内外面とも貝殻条痕の上をナデ	橙	にぶい褐 褐灰	3mm以下のにぶい黄褐・灰白・灰黄色の粒、黒色・透明光沢粒	外面にススあり
100	5FGV層		深鉢 胴部	外面に2条で平行する2.5mm幅の沈線文	内外面とも貝殻条痕	にぶい橙	にぶい橙	1.5mm以下の灰黄・灰・灰白・灰褐・橙色の粒、黒色・透明光沢粒	接痕式？
101	5HGV層下		鉢 胴部	外面に平行する2mm幅の沈線文	内外面ともナデ	黄灰	灰黄	1mm以下の灰・褐・灰褐色の粒、黒色・透明光沢粒	外面にススあり
102	7IGV層		深鉢 胴部	外面に太い四線文	内外面とも貝殻条痕	褐灰	黄灰	1.5mm以下の灰黄・褐色の粒、透明光沢粒	
103	5DGV層下		深鉢 胴部		内外面とも貝殻条痕	橙 にぶい黄橙	橙 浅黄	0.5mm以下の灰褐・白色の粒、透明光沢粒	
104	5HGV層下		深鉢 胴部	外面に棒状工具による6mm幅の四線文	内外面ともナデ	にぶい褐	にぶい褐	2mm以下の橙・灰黄・灰・灰白色の粒、黒色・透明光沢粒	外面にススあり
105	5DGV層		深鉢 胴部	外面に棒状工具による6mm幅の曲線的変形の四線文	内外面ともナデ	にぶい褐	にぶい褐 にぶい黄褐	2mm以下の灰黄・灰白色の粒、黒色・透明光沢粒	外面にススあり
106	7IGV層 7IGV層		深鉢 底部(10.0)	底部は網代底	内外面ともナデ	橙	にぶい黄橙	2mm以下の黒・灰・黄灰・褐色の粒 0.5mm以下の透明・半透明・黒色光沢粒	外面にススあり
107	3HGV層		深鉢 底部(11.35)	底部は網代底	外面は貝殻条痕のままナデ 内面はナデ	にぶい黄褐	オリーブ黒	2mm以下の橙・灰白・灰色の粒 0.5mm以下の透明光沢粒	外面にススあり
108	7IGV層		深鉢 底部	底部は網代底	内外面とも貝殻条痕の上をナデ	にぶい黄橙	橙	1mm以下の乳白・灰・褐色の粒 0.5mm以下の透明・半透明・黒色光沢粒	外面にススあり
109	5FGV層 6FGV層		深鉢 底部(14.4)	底部は網代底	内外面とも貝殻条痕の上をナデ	にぶい褐	明赤褐	1mm以下の浅黄色の粒、透明光沢粒	外面にススあり
110	5FGV層		深鉢 底部(10.4)	底部は網代底	内外面ともナデ	明赤褐	橙 にぶい黄橙	5mm程の灰白色の粒 2mm以下の褐色の粒 1mm以下の灰白色の粒、透明・黒色光沢粒	
111	4GGV層下		深鉢 底部(7.2)	底部は網代底	内外面ともナデ	にぶい褐	灰黄褐	2mm以下の灰白・黄白・褐・赤褐色の粒 1mm以下の透明光沢粒	
112	5HGV層		深鉢 底部(9.4)	底部は網代底	内外面とも貝殻条痕の上をナデ	にぶい橙	にぶい黄	4～5mmの浅黄橙色の粒 2mm以下の白灰・浅黄橙・灰白・褐灰・褐色の粒	外面にススあり
113	5DGV層下		深鉢 底部(8.1)	底部は網代底	内外面とも貝殻条痕の上をナデ	にぶい褐	にぶい黄橙	1.5mm以下の黄白・灰白・赤褐色の粒 1mm以下の透明光沢粒	外面にススあり
114	5DGV層下		深鉢 口縁	外面に貝殻腹縁による連続刺突	内外面とも貝殻条痕の上をナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	2mm以下の茶・灰・褐色の粒 0.5mm以下の透明光沢粒	口縁部肥厚
115	2HGV層		深鉢 口縁	外面は貝殻腹縁による押引き	内外面とも貝殻条痕	橙	浅黄 橙	1～3mmの茶・浅黄色の粒、半透明光沢粒	波状口縁 外面にススあり 丸尾式

第1表　縄文時代の遺物観察表（7）

遺物番号	出土地点	分類	器部（復元口径cm）	文様	調整	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
116	4BGV層		深鉢 口縁	外面は貝殻腹縁による刺突	内外面とも貝殻条痕の上をナデ	橙	橙	1mm以下の茶褐・灰褐・黒褐色の粒 0.5mm以下の透明光沢粒	
117	4FGV層		深鉢 口縁	外面は貝殻腹縁による刺突	内外面とも貝殻条痕	にぶい赤褐 暗赤灰	明赤褐	4mm以下の乳白色の粒 1mm以下の灰褐・乳白・茶褐色の粒 0.5mm以下の透明光沢粒	
118	7HGV層		深鉢 口縁	外面は貝殻腹縁による刺突	内外面とも貝殻条痕	にぶい黄褐	橙	2mm以下の灰白・褐色の粒 1.5mm以下の透明光沢粒	
119	9BGV層下		深鉢 口縁～胴部		内外面とも貝殻条痕の上をナデ	にぶい赤褐	にぶい黄褐	1.5mmの赤褐色の粒 0.5mm以下の黄白・褐色の粒、透明光沢粒	口縁部肥厚
120	6BGV層		深鉢 口縁～頸部		外面はミガキ 内面はミガキ、ナデ	黒褐 灰褐	黒褐 にぶい褐	1mm以下の灰黄・黒・褐色の粒、透明光沢粒	外面にススト
121	5GGV層下		深鉢 口縁		内外面ともミガキ	明赤褐	明赤褐	1mm以下の白・黄白・赤褐色の粒	
122	4GGV層		浅鉢 頸部		内外面ともミガキ	黄灰	黄灰 暗灰黄	1mm以下の灰黄色の粒	
123	3BGV層 5BGV層 5FGV層		深鉢 頸部～胴部		内外面とも貝殻条痕の上をナデ	明赤褐 赤褐	赤褐 にぶい黄褐	5mm程の黄灰色の粒 2mm以下の灰白・褐灰・黒褐色の粒 1mm以下の透明光沢粒	外面にススト
124	5BGV層 5FGV層		深鉢 胴部		内外面ともナデ	橙 灰黄褐	にぶい黄橙 にぶい黄	2mm以下の灰黄褐・褐色の粒、黒色・透明光沢粒	外面にススト
125	4BGV層		浅鉢 胴部		内外面にミガキ	にぶい黄橙	灰	2mm以下の暗灰・灰白・黒褐・赤褐色の粒、黒色・透明光沢粒	
126	4FGV層		深鉢 口縁		内外面ともナデ	浅黄	浅黄	2mm以下の灰白・褐色の粒、透明光沢粒	口縁部肥厚 外面にススト
127	7HGV層		土器片錘	最大長(cm) 7.0 / 最大幅(cm) 5.15 / 最大厚(cm) 1.0 / 重さ(g) 47		暗灰黄	にぶい褐	1.5mm以下の橙・灰・褐・乳白色の粒、黒色光沢粒	
128	7HGV層		土器片錘	4.3 / 3.25 / 1.15 / 15		にぶい赤褐	黒褐	2mm以下の灰白色の粒、黒色・透明光沢粒	
129	4FGV層		土器片錘	5.8 / 3.5 / 1.0 / 25		褐	明赤褐	2mm以下の灰・浅黄・乳白色の粒、透明・黒色光沢粒	

第2表　石器計測表

レイアウト番号	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (cm)	器種	備考
35	SA1	敲石	(11.65)	10.1	4.5	(900)	砂岩	
36	SA1	磨石	10.15	7.85	5.9	645	凝灰岩	
37	SA1	砥石	(7.5)	8.1	8.3	(296.3)	凝灰岩	
38	SA1	石皿	19.65	24.3	8.6	5,500	輝石安山岩	
39	SA1	石皿	19.25	10.3	5.3	2,000	輝石安山岩	
40	SA1	使用痕剥片	5.9	4.9	2.0	41.6	頁岩	
47	SA2	石鼎	32	25.15	8.6	8,000	凝灰岩	
130	V層	打製石鏃	2.35	1.8	0.3	0.8	ホルンフェルス	
131	V層	スクレイパー	4.7	4.1	1.55	25.8	シルト岩	
132	V層	スクレイパー	5.3	5.05	1.15	23.9	頁岩	
133	V層	スクレイパー	9.3	5.0	2.4	67.4	砂岩	
134	V層	使用痕剥片	4.55	2.8	8.5	7.1	シルト岩	
135	V層	使用痕剥片	3.35	3.9	1.0	9.7	砂岩	
136	V層	使用痕剥片	4.15	2.75	0.85	9.8	砂岩	
137	V層	使用痕剥片	3.25	2.4	0.95	4.8	チャート	
138	V層	使用痕剥片	4.6	7.6	13	53	頁岩	
139	V層	使用痕剥片	7	5.25	1.75	51.7	頁岩	
140	IV層	磨製石斧	6	2.7	1.2	24.8	砂岩	
141	P10	磨製石斧	6.92	490	1.45	66.6	砂岩	
142	SE3	磨製石斧	11.8	9.35	1.25	138.2	砂岩	
143	IV層	石斧	12.5	7.95	1.6	144.1	輝石安山岩	
144	SE3	石斧未製品	10.50	7.90	1.90	163.9	輝石安山岩	
145	V層	磨石	(7.4)	10.7	5.1	(477.1)	砂岩	
146	V層下	磨石	7.35	6.5	3.45	200	凝灰岩	
147	一括	磨石	11.5	7.1	7.87	748	砂岩	中心厚 7.71cm
148	3GGV層	磨石	10.7	7.05	5.15	500	砂岩	
149	SE3	磨石	7.45	7.3	4.3	300.6	砂岩	
150	V層	敲石	(9.9)	5.3	5.25	(327.6)	砂岩	
151	IV層	敲石	8.8	10.5	5.4	648	砂岩	
152	V層	敲石	(9.0)	9.7	4.65	(449.7)	砂岩	
153	V層	敲石	(8.5)	4.3	4.7	(256.6)	砂岩	
154	V層	敲石	10.4	8.39	5.15	531	凝灰岩	
155	IV層	敲石	(9.12)	4.65	3.05	(207.4)	砂岩	
156	一括	砥石	19.05	9	2.6	634	砂岩	中心厚 2.55cm
157	SE3	凹石	10.45	9	4.4	341	凝灰岩	中心厚 3.8cm
158	V層下	台石	10.9	9.45	4.05	294	凝灰岩	
159	一括	台石	16.5	12.3	7.55	1,200	凝灰岩	
160	IV層	石錘	4.3	3.7	1.2	30.2	砂岩	
161	IV層	台石	(15.5)	13.3	6.55	(2,500)	輝石安山岩	
162	IV層	台石	17	16.25	6.7	2,600	砂岩	
163	V層下	石鼎	19.39	25.15	10.3	6,100	粗粒砂岩	中心厚 9.78

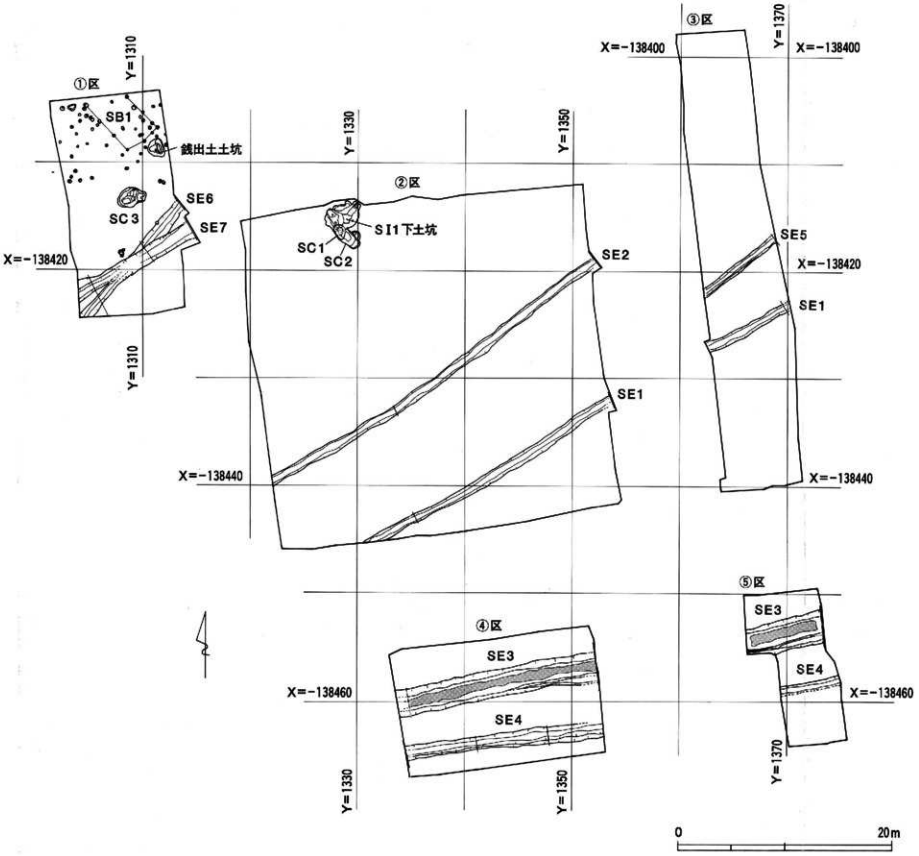
第３節　弥生から古墳時代の遺物

弥生から古墳時代の遺構は検出されておらず、遺物のみの確認となった。

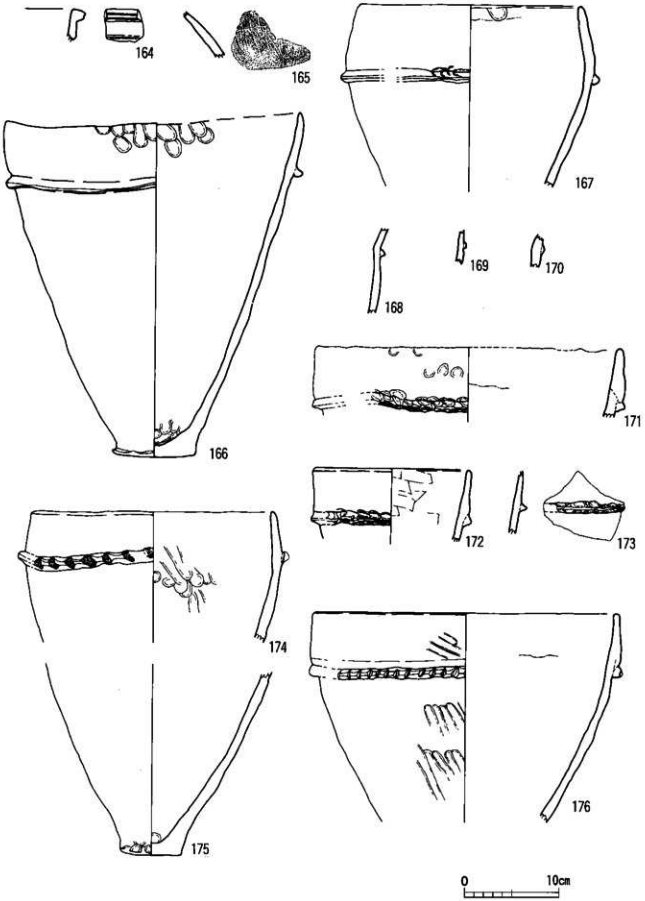
遺物は②区南東側、③区南側、⑤区北側の第Ⅳ層から多く出土している。遺物は全体的に集中した出土状況であったが、遺構としてのにじみや落ち込み等は確認できなかった。地形にそれほどの傾斜は見られないが、若干北西から南東にかけて傾斜しているので遺物が調査区の南東側に流れ込んだのか、またはＳＥ１とＳＥ３の間の調査区外に遺構が確認されることも推測される。遺物は弥生時代の甕や壺の土器片が数点と、古墳時代の突帯や刻目突帯付きの甕、壺、高坏などが出土している。

包含層出土の遺物（第34～36図、図版12～14）

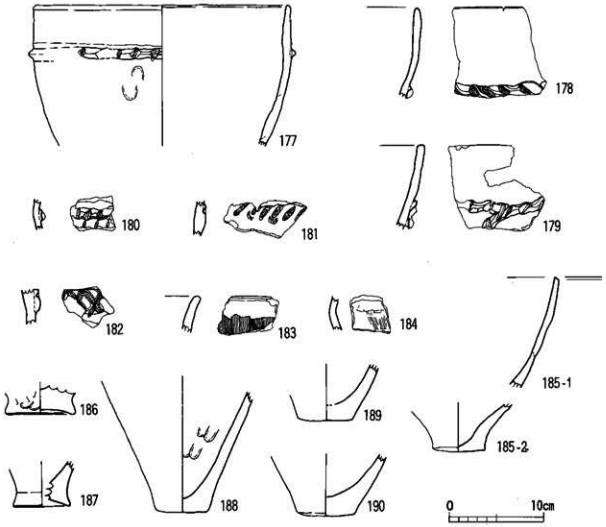
164・165は弥生土器である。164は甕の口縁で、口縁部に断面台形の突帯を持ち逆Ｌ字形となる。口 縁部突帯の先端に沈線と、胴部には突帯状の膨らみが見られる。165は壺の肩部である。縦方向のハケ 目の後、斜方向の４条の線刻のようなものが見られる。166～170は貼り付け突帯のある甕である。166は平底を呈し、胴部から口縁にかけて開き気味に延びる。口縁部に最大径を持ち、口縁は若干内湾する。口唇部より5.5㎝下 に貼り付け突帯が巡らされている。内外器面ともナデで、外器面にはススが付着している。167は胴部上位に最大径を持ち、貼り付け突帯を有する。口縁部は内湾する。内外器面とも ナデである。168は頸部くびれ部に貼り付け突帯を持つものである。内外器面ともナデである。171～173は貼り付け突帯に著しく指つまみの痕が見られる甕である。171・173は内外器面ともナデで、外器面 にはススが多く付着している。172は小型の甕と思わ れる。内器面に横方向の工具ナデが見られる。174～182は貼り付け刻目突帯を持つ甕である。174と175は同一個体である。平底を呈し、胴部から口縁部にかけて内湾気味に延びる。最大径を持つ胴部上位に貼り付け刻目突帯を有する。外器面は縦方向の工具状のナデ、刻目には布目圧痕が見られる。176は口縁部に最大径を持つ甕である。胴部から口縁部に かけてやや内湾気味に延びる。外器面にはススが多く付着し、著しい斜方向の指ナデが見られる。177 は最大径を持つ胴部上位に貼り付け刻目突帯を有する。胴部は内湾するが、口縁部は直口する。内外器面ともナデで、刻目には布目圧痕が見られる。178は内湾しながら延びる胴部と口縁部に最大径を持つ 甕と思われる。刻目には布目圧痕を有する。179は口縁部に最大径を持つと思われる甕である。180は若干くびれを持つ甕のくびれ部に貼り付け刻目突帯を巡らせているものと思われる。刻目には布目圧痕が見られる。181は幅の広い貼り付け突帯に刻目（押圧）が施されている。刻目には布目圧痕が見られる 。182は幅の広い貼り付け突帯に格子目状の刻目が施されている。刻目には布目圧痕が見られる。183・184は外器面にハケ目を持つ甕である。185―1・185―2は甕である。平底を呈し、くびれた底部から胴部 ・口縁にかけて内湾しながら延びる。口縁に最大径を持ち、口唇部は斜めに面取りされたような仕上げが見られる。186～190は甕の底部である。186・187は上げ底を呈する。186は底部裾を丸く仕上げ、く びれを持つ。くびれ部には指頭痕が見られる。187は底部裾を若干鋭く仕上げている。188～190は平底 を呈する。底部にくびれを持たずに胴部に延びる器形を呈する。191～199は壺である。191は小さな平 底を呈する壺である。胴部中位に最大径を持ち、頸部径はその半分を測る。頸部から口縁はやや外側に開きながら直口するものと思われる。器面には指頭痕が多くみられる。192は頸部に貼り付け刻目突帯 を有する壺である。肩の張った器形が推



第33図　Ⅴ層上検出遺構分布図（S＝1／350）

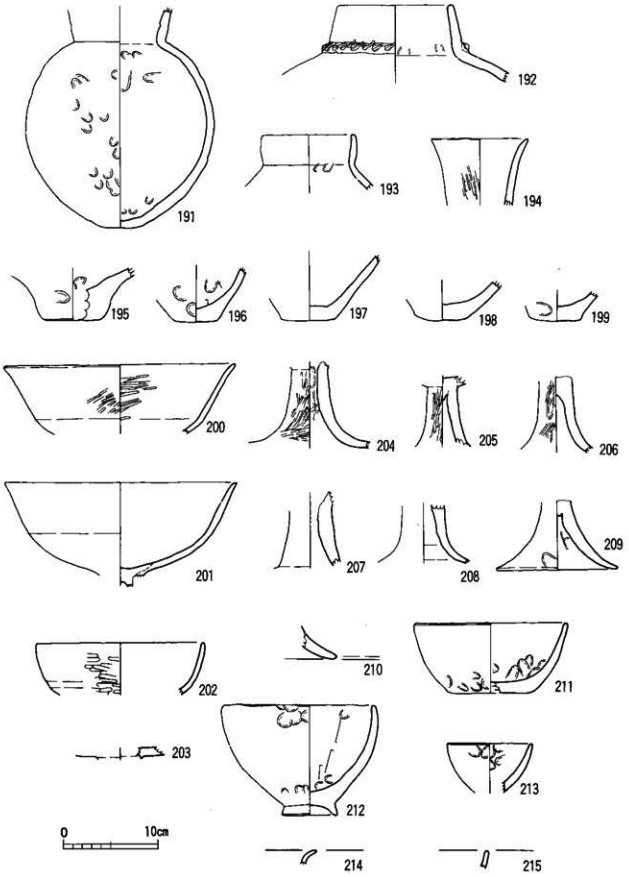


第34図　弥生～古墳時代の遺物実測図（S＝1／4）



第35図　弥生～古墳時代の遺物実測図（S＝1/4）

定される。短い頸部から口縁部は内側に向かって延びている。193は頸部から口縁部が内湾気味に延びる壺である。194は長頸壺の口縁部である。口縁部は外反する。外器面には縦方向のミガキが見られ、一部ススが付着している。195～199は壺の底部で、全て平底である。195は厚みのある底部をなし、くびれをもって胴部に広がる。196～199は厚みのない底部から、くびれを持たずに胴部に広がるものである。200～210は高坏である。200～203は坏部である。200は坏底 部に緩やかな屈曲を持ち、口縁部に向かって外反しながら延びる。外器面は斜方向、内器面は横方向のミガキが施されている。一部にススが付着している。201は坏底部に屈曲をもたずに内湾しながら口縁部に向かって延び、口唇部は外反する。202は坏部は内湾しながら口縁部に向かって延び、口唇部はそのまま直口する。外器面に丹塗りが施され、横方向のミガキが見られる。203は坏底部である。外器面 に丹塗りが施されている。204～210は高坏の脚部である。204は脚柱部からラッパ状に裾が開くものである。外器面には丹塗りが施され、丁寧なミガキ調整が見られる。205～207は外器面に丹塗りが施された脚柱部である。脚柱部は膨らまず、脚柱部と裾部に明瞭な屈曲を持たずに裾に向かって広がりながら延びるものと思われる。205・206はミガキ調整、207はナデ仕上げである。208・209は脚柱部から裾部 にか



第36図　弥生～古墳時代の遺物実測図（S＝1／4）

けて屈曲を持たずに末広がりに延びている。内外器面ともナデ仕上げである。209の裾先端部はやや細く、丸みをおびた仕上げである。210はやや厚みのある裾部で、先端部は丸く仕上げている。211は鉢である。平底を呈する。胴部は外側に開き気味に延び、口唇部に向かって直口する。口唇部は太く、丸く仕上げている。212は上げ底を持つ鉢である。胴部から口縁部にかけて内湾しながら延びている。外器面はナデ、内器面には工具ナデが見られる。213は小型の鉢である。内外器面とも指頭痕が多く見られる。214は小型高坏の坏部かい。外器面に丹塗りが施されている。215は小型坏部かい。外器面に丹塗りが施されている。

第3表　弥生土器・土師器観察表（1）

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
164	弥生	壺 口縁～頸部	5FG Ⅳ層				ナデ、口縁端部に沈線、口縁部貼付突帯、突帯	ナデ	にぶい橙 にぶい黄	にぶい黄	1mm以下の黄橙・褐灰・褐色の粒	
165	弥生	壺 肩部	3DG Ⅳ層				ハケ目の後丁寧なナデ、工具痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	6.5mm以下の浅黄橙の粒 1mm以下の透明光沢粒	
166	土師器	壺 口縁～底部	5FG Ⅲ層 6FG Ⅲ層 5FG Ⅳ層 6FG Ⅳ層 6FG Ⅴ層	30.85	(8.75)	36.70	ナデ、指頭痕、貼付突帯 赤変、口縁部にスス付着	ナデ、指頭痕 黒変、炭化物付着	明赤褐 灰黄褐	橙 明褐	5mm以下の茶・灰、4mm以下の黒色光沢粒、3mm以下の透明光沢粒・乳白色粒	
167	土師器	壺 口縁～頸部	6FG Ⅳ層	(23.2)			ナデ、指頭痕 貼付突帯	ナデ、指頭痕 粘土のつなぎ目	にぶい橙 灰黄褐	にぶい橙	2mm以下の黒・茶色、1mm以下の白・透明光沢粒・黒色光沢粒	
168	土師器	壺 頸部～胴部	3EG Ⅳ層				ナデ、貼付突帯	ナデ	浅黄 灰黄褐	淡黄 にぶい黄橙	3mm以下の灰白・黒褐色・黒色光沢粒	
169	土師器	壺 胴部	5GG Ⅲ層				ナデ、貼付突帯	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒・褐・透明光沢粒	
170	土師器	壺 胴部	SE2				ナデ、貼付突帯	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の黄褐・灰黄・灰・橙・黄橙・黒色光沢・透明光沢粒	
171	土師器	壺 口縁	5HG Ⅳ層 5IG Ⅳ層	(32.00)			ナデ、貼付突帯 スス付着、指頭痕	ナデ 粘土のつなぎ目	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙	3.5mm以下の灰白・灰褐・褐灰・暗赤褐の粒	
172	土師器	壺 口縁	5HG Ⅲ層 5HG Ⅳ層	(16.20)			ナデ、貼付突帯	工具ナデ	にぶい橙	にぶい橙	4mm以下の白灰・灰白・褐灰・灰褐・褐色の粒・透明光沢粒	
173	土師器	壺 頸部	5HG Ⅳ層				ナデ、貼付突帯 スス付着	ナデ、黒変	にぶい褐	にぶい橙	1.5mm以下の灰白・褐灰・浅黄橙の粒	
174	土師器	壺 口縁～頸部	6FG Ⅳ層	(25.0)			ナデ、貼付刻目突帯 スス付着	ナデ、指頭痕	浅黄橙 黒褐	明赤褐 黒褐	4mm以下の赤褐色、3mm以下の褐色、2mm以下の黒灰・灰・灰白色の粒、1.5mm以下の透明光沢粒、1mm以下の黒色光沢粒	同一個体か
175	土師器	壺 頸部～底部	6FG Ⅲ層 6FG Ⅳ層 6FG Ⅴ層 5GG Ⅳ層		(6.55)		工具によるナデ、指頭痕	ナデ、指頭痕、黒変	にぶい橙	にぶい黄橙	5mm以下の赤褐色、3mm以下の灰色、2mm以下の黒・灰白粒	
176	土師器	壺 口縁～頸部	5HG Ⅲ層 4HG Ⅳ層 5HG Ⅳ層 7IG Ⅳ層	(31.50)			ナデ、貼付刻目突帯 スス付着	ナデ、黒変 粘土のつなぎ目	にぶい褐	にぶい橙	2mm以下の茶・灰白・黒色の粒 3.5mm以下の灰・黒褐色の粒 1.5mm以下の黒色光沢粒 0.5mm以下の透明光沢粒	
177	土師器	壺 口縁～頸部	4HG Ⅳ層	(27.4)			ナデ、指頭痕 貼付刻目突帯	ナデ 粘土の継ぎ目	灰白	灰白	2.5mm以下の黒色光沢粒 2mm以下の透明光沢粒	
178	土師器	壺 口縁	5HG Ⅳ層 5HG Ⅴ層				ナデ 貼付刻目突帯	ナデ	灰白	灰白	4mm以下の明黄褐色粒 1mm以下の灰色の粒	
179	土師器	壺 口縁	8IG 層 8IG Ⅳ層				ナデ、貼付刻目突帯、スス付着	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙 にぶい赤褐	2mm以下の褐灰・赤褐・灰黄褐色の粒	
180	土師器	壺 頸部	4HG Ⅳ層				ナデ 貼付刻目突帯	ナデ	淡黄	淡黄	4mm以下の黒・褐色の粒	
181	土師器	壺 胴部	5HG 層 5HG Ⅳ層				ナデ 貼付刻目突帯	丁寧なナデ	にぶい橙	橙	2mm以下の褐・黒色の粒	
182	土師器	壺 頸部	3HG Ⅳ層				ナデ 貼付刻目突帯	ナデ、スス付着	橙	にぶい黄橙	2mm以下の黒・灰白色の粒、透明光沢粒	
183	古墳	壺 口縁	SE7				ナデ、縦ハケ目 スス付着	ナデ、指頭痕 スス付着	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の浅黄橙・白灰・褐灰の粒、透明・黒色光沢粒	
184	古墳	壺 頸部	4GG 層				ナデ 斜ハケ目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の褐色の粒 1mm以下の透明光沢粒	

第３表　弥生土器・土師器観察表（２）

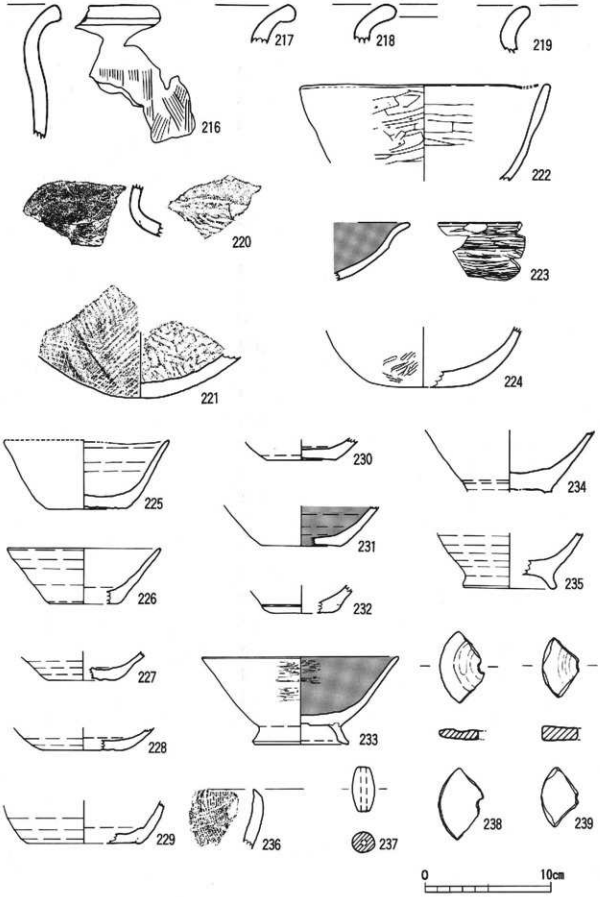
遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
185-1	土師器	甕 口縁～胴部	5HG IV層 5HG V層				ナデ 粘土のつなぎ目	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	2mm以下の黄白・赤褐・黒褐・灰白色の粒、0.5mm以下の透明光沢粒	
185-2	土師器	甕 底部	5FG III層 6FG IV層		5.6		ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	3～4mmの赤褐色の粒、1.5mm以下の黄白・赤褐・黒褐色の粒、1mm以下の透明光沢粒	
186	土師器	甕 底部	7IG IV層		(7.4)		ナデ	ナデ 黒炭	にぶい黄橙 橙	灰	1～2.5mmの淡黄・褐・灰・乳白色の粒、半透明・黒色光沢粒	
187	土師器	甕 底部	8IG V層		(6.0)		ナデ	ナデ	にぶい橙	浅黄	1mm以下の灰褐・褐灰色の粒、透明光沢粒	
188	土師器	甕 胴部～底部	5FG IV層		(5.25)		ナデ	ナデ 指頭痕	にぶい黄橙	浅黄 にぶい橙	1～3mmの灰・黒・茶・褐色の粒、黒色・透明光沢粒	
189	土師器	甕 底部	5GG IV層 5HG IV層		(5.7)		ナデ	ナデ	灰黄褐	褐灰	2mm以下の赤褐色の粒、黒色・透明光沢粒	
190	土師器	甕 底部	5HG III層 5HG IV層		6.0		ナデ、黒斑	ナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙	3.5mm以下の褐・灰白・黒色の粒 2mm以下の黒色光沢粒	
191	土師器	壺 胴部～底部	4BG IV層 5FG IV層 6FG IV層		(2.5)		ナデ、指頭痕、黒斑	ナデ、指頭痕	にぶい橙 にぶい褐	にぶい橙 にぶい黄褐	4mm以下の明赤褐・にぶい赤褐・褐・灰白・灰黄・黒色の粒、透明・黒色光沢粒	
192	土師器	壺 口縁～胴部	5HG IV層 5IG IV層	(11.6)			丁寧なナデ、貼付剥目突帯、黒斑	丁寧なナデ 指頭痕	にぶい橙	にぶい橙	4mm以下の茶・白・黒色の粒 1mm以下の透明光沢粒	
193	土師器	壺 口縁～胴部	5HG IV層 5IG V層	(9.5)			ナデ	ナデ、指頭痕、粘土のつなぎ目	橙	橙	0.5mm以下の黒・灰色の粒、半透明光沢粒	
194	土師器	壺 口縁	4BG V層	(10.2)			縦ミガキ、ミガキの後ナデ、黒斑	ナデ	灰黄褐	にぶい黄褐	1mm以下の褐・淡黄・灰・黒色の粒	
195	土師器	壺 底部	4FG IV層		(6.0)		ナデ、指頭痕、黒斑	ナデ、指頭痕、黒斑	にぶい黄橙	浅黄	2.5mm以下の茶・灰・褐色の粒、透明・黒色光沢粒	
196	土師器	壺 底部	5IG IV層		(4.35)		丁寧なナデ 指頭痕、黒斑	ナデ、指頭痕、工具痕	にぶい橙	にぶい黄橙	6mm以下の赤褐色の粒 2mm以下の透明光沢粒 1mm以下の浅黄色の粒	
197	土師器	壺 底部	5HG IV層		(5.7)		ナデ、黒斑	ナデ、黒炭、スス付着	浅黄 にぶい黄橙	にぶい黄 褐灰	6mm以下の赤茶色の粒 4mm以下の浅黄色の粒 1mm以下の透明光沢粒	
198	土師器	壺 底部	5HG IV層 5GG V層		(5.6)		ナデ	ナデ	灰黄	にぶい橙	3.5mm以下の浅黄色の粒 2.5mm程の赤褐色の粒 1mm以下の透明光沢粒	
199	土師器	壺 底部	SE3		(5.35)		ナデ、指頭痕	ナデ	灰黄	灰黄	2mm以下の黒・灰褐色の粒 1mm以下の透明光沢粒	
200	土師器	高坏 口縁	5HG IV層	(24.4)			ナデの後ミガキ、丹塗り、スス付着	ナデの後斜ミガキ、黒炭	にぶい赤褐	にぶい黄橙	きめ細かな光沢粒	
201	土師器	高坏 口縁～受部	5BG III層 5HG IV層	(24.5)			ナデ	ナデ、黒斑、スス付着	にぶい黄橙 橙	にぶい黄橙 黄灰	1mm以下の褐灰・明赤褐色の粒、黒色・半透明光沢粒	
202	土師器	坏 口縁	4HG III層	(17.8)			横ミガキ、丹塗り	ナデ	赤褐	にぶい黄橙	2mm以下の灰褐・灰白・灰黄色の粒、透明光沢粒	
203	土師器	高坏 受部	SE4				ナデ	ミガキ	浅黄橙	灰	2mm以下の黒・灰・褐色の粒、微細な半透明・黒色光沢粒	
204	土師器	高坏 脚部	2HG IV層 2HG V層				斜ミガキ、丹塗り	ナデ、指頭痕、黒斑	赤	灰黄	1mm以下の透明・黒色光沢粒	
205	土師器	高坏 脚柱部	5HG IV層				縦ミガキ、丹塗り	ナデ、丹塗り、黒斑	赤	にぶい橙 浅黄	2mm以下の灰白・褐灰色の粒、透明光沢粒	
206	土師器	高坏 脚部	5HG IV層				縦・斜ミガキ、丹塗り	ナデ、黒斑	赤 にぶい橙	浅黄	1mm以下の灰褐・褐灰・浅黄橙色の粒、透明・黒色光沢粒	
207	土師器	高坏 脚柱部	5IG IV層				風化気味、ナデ、丹塗り	ナデ、黒斑	浅黄 黄灰	浅黄	2mm以下の灰白・黒色の粒 0.5mm以下の透明・黒色光沢粒	
208	土師器	高坏 脚部	5HG IV層				ナデ	ナデ、黒斑	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の黒・灰・褐・黄灰色の粒、微細な透明・半透明・黒色光沢粒	
209	土師器	高坏 脚部	6FG IV層		(12.6)		ナデ 指頭痕	ナデ、指頭痕	にぶい黄橙	灰黄	1mm以下の褐・灰白色の粒、黒色・透明光沢粒	
210	土師器	高坏 脚部	5HG V層				ナデ、丹塗り	ナデ、黒斑	にぶい橙	黒	0.5mm以下の透明光沢粒	
211	土師器	鉢 口縁～底部	5HG IV層	(15.85)	8.0	7.45	ナデ、指頭痕、スス付着、黒斑	丁寧なナデ、指頭痕、黒斑	にぶい褐	橙 にぶい黄	4mm以下の灰黄・にぶい黄褐・浅黄・灰褐色の粒、透明・黒色光沢粒	
212	土師器	鉢 口縁～底部	5FG II層 5FG IV層	(15.8)	(5.4)	11.6	ナデ、指頭痕、スス付着、黒斑	工具ナデ、指頭痕、黒斑	にぶい黄褐 橙	にぶい黄褐 橙	5mm以下の茶褐色の粒、2mm以下の白色の粒、黒色・透明光沢粒	
213	土師器	小鉢 口縁～胴部	5HG IV層	(8.7)			ナデ、指頭痕、黒斑	ナデ	褐 黄灰	にぶい褐	6mm以下の茶褐色の粒、1mm以下の白色の粒、透明光沢粒	
214	土師器	小型坏 口縁	4HG IV層				ナデ、丹塗り	ナデ、丹塗り	にぶい橙	にぶい橙 褐灰	1.5mm以下の橙・灰黄色の粒、透明・黒色光沢粒	
215	土師器	坏 口縁	4HG V層				ナデ、丹塗り	ナデ、丹塗り	赤褐	にぶい褐	1mm以下の黒褐・橙・灰白色の粒、透明光沢粒	

第4節　古代の遺物

古代については遺構の確認はできず、遺物が若干出土しただけである。古代の遺物は主に第Ⅲ層および第Ⅳ層の上部から出土している。口縁部が開き、口唇部を丸く仕上げた甕、タタキ調整のある土師質の甕、鉢、土師器坏、高台付き坏、黒色土器、布目痕土器、土錘、紡錘車などがある。

包含層出土の遺物（第37図、図版14・15）

216～221は甕である。216は口縁部が開き、口唇部を丸く仕上げ、内器面はケズリ、外器面は縦・斜方向のハケ目が施されている。217～219も同様のタイプの甕であると思われる。220・221はタタキによる器面調整が行われた甕である。220は甕の頸部で、外器面に平行タタキ目、内器面に同心円の当て具痕が見られる。221は甕の底部である。外器面は平行タタキ目、内器面には当て具痕が見られる。222は鉢と思われる。外器面に横方向のケズリ、内器面に工具による横方向のナデが見られる。胴部下部は薄く、口縁部を比較的厚く仕上げた鉢である。223は黒色土器の鉢と思われる。浅い器形を呈し、外器面 には、胴部と外反する口縁部の間にくっきりとした稜を持つ。外器面は横方向のミガキ、内器面は単位不明のミガキが見られる。224は鉢の底部か。内外器面にわずかにミガキの痕跡が見られる。225～230 は土師器杯である。225は体部から口縁部にかけて若干外反しながら延びる。口唇部は細く、ヘラ切り 底を呈する。226は体部から口縁部にかけて外側に直線的に延びるものである。227は底部と体部の間に若干のくびれを持つもので、底部はヘラ切りを呈する。228は内湾気味に体部が延びるものと思われる。底部はヘラ切りを呈する。229は底部径と口径の差が小さい坏で、体部が内湾気味に立ち上がるもの と思われる。底部は風化が著しいがナデが見られる。230は内外器面にミガキが見られ、底部から体部への屈曲部に明瞭な稜を持つ。底部はヘラ切りを呈する。231は黒色土器の坏である。内器面は単位不明のミガキ、外器面はナデで、底部はヘラ切り底を呈し、若干上げ底気味である。底部から体部への屈曲部に明瞭な稜を持ち、内湾気味に体部が立ち上がっている。232は円盤高台付き坏である。内外器面ともナデである。233は黒色土器の高台付き坏である。内外器面に横方向のミガキを持つ。体部から口縁部にかけて外側に直線的に延びる。高台端部は面取りされ、外側に開く。234・235は高台付き坏である。234は内外器面ともナデで、外器面の体部下は赤変している。235の高台端部は外側に開き丸く仕上げている。236は布目痕土器の口縁部である。237は土錘、238・239は土製紡錘車である。



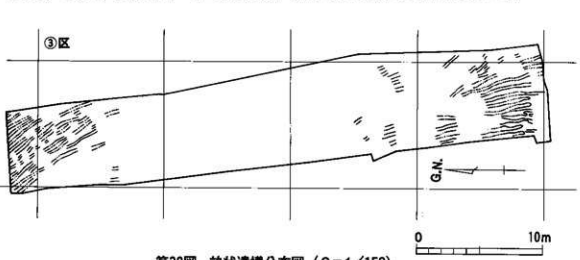
第37図　古代の遺物実測図（S＝1／3）

第4表　古代の遺物観察表

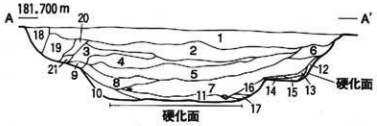
遺物番号	種別	器種 部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
216	土師器	壺 口縁～頸部	4DG IV層 4DG V層				ナデ、ハケ目の上をナデ	ナデ、ケズリ	橙	橙	3.5mの黒白色の粒、2.5mm以下の灰・褐・茶褐色の粒、1mm以下の黒色光沢粒	
217	土師器	壺 口縁	4GG III層				丁寧なナデ	丁寧なナデ	橙	橙	2mm以下の茶・褐色の粒 0.5mm以下の白色の粒、透明光沢粒	
218	土師器	壺 口縁	5FG IV層				ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	8.2mm以下の橙色の粒、3mm以下の灰白色の粒、1mm以下の黒灰色の粒	
219	土師器	壺 口縁	5EG V層 5FG V層				ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	1mm以下のにぶい赤褐・灰褐色の粒、透明・黒色光沢粒	
220	土師器	壺 頸部	3DG IV層				ナデ、平行タタキ、丹塗り	ナデ、当具痕、粘土のつなぎ目、丹塗り	にぶい黄橙	黄橙	2mm以下の茶・褐・灰・黄灰色の粒	
221	土師器	壺 底部	3DG IV層				平行タタキ	当具痕	橙	黄橙	2mm以下の黒・灰・褐・黄灰色の粒 0.5mm以下の透明・半透明・黒色光沢粒	
222	土師器	鉢 口縁～頸部	3HG IV層 3HG V層 3IG V層	19.5			ナデ、横ケズリ	横ナデ、黒斑	にぶい赤褐 にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の茶色の粒 1mm以下の透明光沢粒	
223	黒色土器	鉢 口縁～頸部	4HG IV層 5EG V層				横ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	黒	0.5mm以下の灰白・褐色の粒、透明光沢粒	
224	土師器	鉢 底部	4HG IV層 4IG IV層 5HG V層				丁寧なナデ、斜ミガキ、黒斑	丁寧なナデ	にぶい黄橙 にぶい橙	にぶい黄橙	4mm以下の灰白・褐色の粒、2mm以下の白・褐・赤褐・黒褐色の粒、1mm以下の透明光沢粒	
225	土師器	坏 口縁～底部	5FG IV層	13.0	(6.4)	(5.7)	ナデ、ヘラ切り底	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の黒褐・褐灰・赤褐色の粒	
226	土師器	坏 口縁～底部付近	4FG IV層 5FG	(12.1)	(5.9)	(4.8)	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰白・褐灰色の粒、黒色光沢粒	
227	土師器	坏 底部	4EG V層		(5.4)		ナデ、ヘラ切り底	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	0.5mm以下の褐色の粒、透明光沢粒	
228	土師器	坏 底部	5FG IV層 5DG IV層		(6.3)		ナデ、ヘラ切り底	ナデ	橙	橙	1mm以下の黒色光沢粒	
229	土師器	坏 体部～底部	5FG III層		(8.9)		ナデ	ナデ	にぶい黄橙 浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の茶・黒色の粒	
230	土師器	坏 底部	4EG IV層		(5.4)		ミガキ、ヘラ切り底	横ミガキ	にぶい黄橙	黄灰色	1.5mm以下の灰・茶・黒色の粒	
231	黒色土器	坏 体部～底部	5FG IV層		(6.2)		ナデ、ヘラ切り底	ミガキ	にぶい黄橙	黒	0.5mm以下の白・赤褐色の粒	
232	土師器	坏 底部	5EG IV層		(6.0)		ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	0.5mm以下の灰褐・黒色の粒	円盤高台
233	黒色土器	高台付坏 口縁～底部	5FG IV-V層	(15.4)	7.6	(6.9)	ナデ、横ミガキ、ヘラ切り底	ミガキ	にぶい黄橙 黒	黒	1mm以下の褐・灰・乳白色の粒、透明・黒色光沢粒	
234	土師器	高台付坏 体部～底部	5FG IV層				ナデ	ナデ	にぶい黄橙 浅黄	にぶい黄橙	1mm以下の茶色の粒、黒色光沢粒	
235	土師器	高台付坏 体部～底部	5FG III層		(7.0)		ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	5mm以下の茶色の粒、1mm以下の白色の粒、透明光沢粒	
236	布袋土器	坏 口縁～頸部	4EG III層				ナデ	布目痕	橙	橙	6mm以下の黒・褐・灰色の粒	
237	土師器	土錘	3DG IV層	最大径(cm) 3.5 / 最大厚(cm) 1.75 / 最大長(cm) 1.05 / 重さ(g) 8.5								
238	土師器	紡錘車	4FG V層	最大径(cm) (7.0)	孔径(cm) (0.8)	最大厚(cm) 0.8	最大長(cm) (13.0)	重さ(g)	にぶい橙	にぶい黄橙	1mm以下の灰白・褐・褐灰・白灰色の粒	
239	土師器	紡錘車	4EG	(6.4)		1.15	(13.0)		浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の灰褐色の粒 1mm以下の赤褐・黒褐色の粒	

第5節　中世から近世の遺構と遺物

中世から近世の出土遺物は少なく、遺構に伴うものも僅かであるが、若干の出土遺物と埋土中の火山灰の状況から遺構の時期の位置付けを行った。中世の遺構は畝状遺構、近世の遺構は溝状遺構2条（ＳＥ３・ＳＥ４）である。遺物は14～15Ｃ頃の白磁、青磁、近世の擂鉢などが出土している。

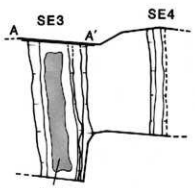


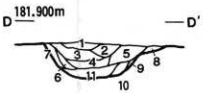
第38図　畝状遺構分布図（Ｓ＝1／150）



SE3

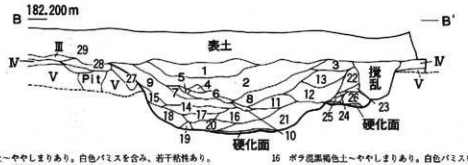
1 ポラ混暗褐色土～ややしまりあり。白色パミスを含み、若干粘性あり。
2 ポラ混やや明るい暗褐色土～やや軟。白色パミスを含み、若干粘性あり。
3 ポラ混暗褐色土＋ポラ混褐色土～ややしまりあり。白色パミスを含む。
4 ポラ混黒褐色土～軟質。白色パミスを含み、若干粘性あり。
5 ポラ混ややにぶい黒褐色土～しまりあり。白色パミスを含む。白磁含む。
6 ポラ混黒褐色土～ややしまりあり。白色パミスを含む。
7 ポラ混黒褐色土～やや軟。白色パミスを含む。粘性あり。
8 ポラ混暗褐色土～軟質。白色パミスを含む。
9 ポラ混暗褐色土～非常に軟。白色パミスを含む。
10 ポラ混褐色土～軟質。白色パミスを含む。
11 ポラ混黒褐色土～軟質で粘性あり。白色パミスを含む。
12 ポラ混黒褐色土～硬質。
13 ポラ混黒褐色土～非常に硬質。
14 黒褐色土炭ポラ層～非常に硬質。
15 ポラ混黒色土～非常に硬質。
（13～15：硬化している。）
16 ポラ混黒色土～非常に軟質。白色パミスを含む。粘性あり。
17 ポラ混黒褐色土～非常に軟質。
18 ポラ混暗褐色土（第Ⅴ層）＋ポラ混黒褐色土～しまりあり。
19 ポラ混黒褐色土～しまりあり。白色パミスを含む。
20 ポラ混黒褐色土～やややや軟。白色パミスを含む。
21 ポラ混黒褐色土～ややしまりあり。白色パミスを含む。



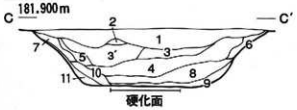


SE4

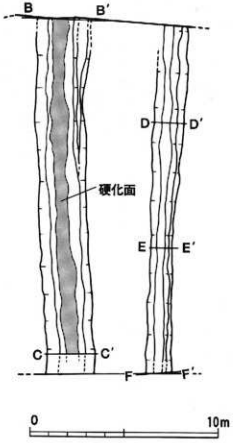
1 ポラ混黒褐色土～ややしまりあり。若干粘性あり。白色パミスを含む。
2 黒褐色土～ややや軟。若干粘性あり。白色パミスを含む。
3 ポラ混暗褐色土～ややや軟。若干粘性あり。白色パミスを含む。
4 ポラ混黒褐色土～ややや軟。若干粘性あり。白色パミスを含む。
5 ポラ混暗褐色土～しまりあり。白色パミスを含み、粗い。
6 ポラ混黒褐色土～ややしまりあり。白色パミスを含む。
7 暗褐色土～軟質。
8 ポラ混黒褐色土～軟質。
9 ポラ混暗褐色土～軟質。
10 ポラ混暗褐色土～しまりあり。
11 ポラ混黒褐色土～ややしまりあり。

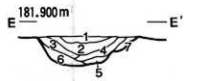


1 ポラ混暗褐色土～ややしまりあり。白色パミスを含み、若干粘性あり。
2 ポラ混やや明るい暗褐色土～ややや軟。白色パミスを含み、若干粘性あり。
3 ポラ混暗褐色土～しまりあり。白色パミスを含む。
4 ポラ混黒褐色土～ややしまりあり。白色パミスを含む。
5 ポラ混暗褐色土～ややや軟。白色パミスを含む。
6 ポラ混明るい暗褐色土～軟質で若干粘性あり。白色パミスを含む。
7 ポラ混ややにぶい暗褐色土～ややしまりあり。白色パミスを含む。
8 ポラ混黒褐色土～ややしまりあり。若干粘性あり。白色パミス、土器小片を含む。
9 ポラ混黒褐色土～ややや軟。若干粘性あり。白色パミスを含む。
10 ポラ混黒色土～ややや軟。若干粘性あり。白色パミスを含む。
11 ポラ混暗褐色土～しまりあり。白色パミスを含む。
12 ポラ混黒褐色土～しまりあり。白色パミスを含む。
13 ポラ混黒褐色土～ややしまりあり。白色パミスを含む。
14 ポラ混黒褐色土～しまりあり。白色パミスを含む。
15 ポラ混暗色土～軟質。白色パミスを含む。
16 ポラ混黒褐色土～ややしまりあり。白色パミスを含む。
17 ポラ混暗褐色土～硬質。白色パミスを含む。
18 ポラ混黒褐色土～軟質。白色パミスを含む。
19 ポラ混黒色土～硬質。
20 ポラ混黒色土～ややや軟。白色パミスを含む。
21 ポラ混黒褐色土～ややしまりあり。白色パミスを含む。
22 ポラ混黒褐色土～ややや軟。白色パミスを含む。
23 ポラ混黒褐色土～軟質。白色パミスを含む。
24 ポラ混暗褐色土～軟質。
25 ポラ混明るい暗褐色土～軟質。サラサラ粒子土。
26 ポラ混黒色土～非常に硬質。白色パミスを含む。
27 ポラ混黒色土～軟質。白色パミスを含む。
28 ポラ混褐色土＋ポラ混黒褐色土～しまりあり。
29 ポラ混褐色土＋ポラ混黒褐色土～第28層よりしまりあり。

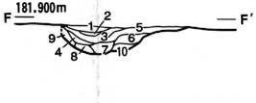


1 ポラ混黒褐色土～ややしまりあり。焼土塊及び褐色土ブロックが混じる。若干粘性あり。
2 暗赤褐色土～軟質。若干粘性あり。
3 ポラ混暗灰色土～ややや軟。若干粘性あり。白色パミスを含む。
3′ ポラ混茶褐色土～ややや軟。白色パミスを含む。
4 ポラ混黒褐色土～軟質。粘性あり。白色パミスを含む。
5 ポラ混黒色土～軟質。粘性あり。白色パミスを含む。
6 ポラ混暗褐色土～ややしまりあり。ポラ混褐色土ブロックを若干含む。
7 ポラ混暗褐色土～ややや軟。
8 ポラ混黒色土～ややしまりあり。粘性あり。
9 ポラ混暗灰色土～しまりあり。
10 ポラ混黒褐色土～硬質。
11 ポラ混暗褐色土～ややや軟。





1 ポラ混黒褐色土～ややしまりあり。若干粘性あり。白色パミスを含む。
2 ポラ混暗褐色土～ややや軟。若干粘性あり。白色パミスを含む。
3 ポラ混黒褐色土～ややしまりあり。若干粘性あり。白色パミスを含む。
4 ポラ混暗褐色土～しまりあり。白色パミスを含む。
5 ポラ混暗褐色土～ややや軟。若干粘性あり。
6 ポラ混黒褐色土～ややしまりあり。若干粘性あり。
7 ポラ混黒褐色土～しまりあり。



1 暗灰色土～ややや軟。白色パミスを含む。
2 暗灰色土～しまりあり。白色パミスと炭化物粒を含む。
3 暗灰褐色土～ややしまりあり。若干粘性あり。白色パミスを含む。
4 ポラ混暗灰褐色土～ややや軟。粘性あり。白色パミスを含む。
5 ポラ混暗褐色土～ややしまりあり。若干粘性あり。白色パミスを含む。
6 ポラ混黒褐色土～ややや軟。白色パミスを含む。
7 ポラ混暗褐色土～しまりあり。白色パミスを含む。
8 ポラ混黒褐色土～ややしまりあり。白色パミスを含む。
9 ポラ混暗褐色土～ややや軟。
10 ポラ混暗褐色土～ややしまりあり。

0　1m
（土層断面スケール）

第39図　SE3・4平面及び土層断面実測図（平面：S＝1/200、土層：S＝1/40）

畝状遺構（第38図、図版４）

畝条遺構は③区の第Ⅱ層上で検出された。黒色土に平行して走る白色粒混黒色土の筋として確認した。白色粒は15世紀後半に降下したとされる桜島起源の文明降下軽石である。筋状の部分が畑の畝間（畝溝）部分であると思われる。畝間の埋土は痕跡程度しか残っておらず、平面的には畝間の深さはほとんど確認できず、断面においても畝の高まりは確認できなかった。畝状遺構は南北方向に走行し、等高線に直交する。残存値で測ると畝幅30～40㎝、畝間幅30～40㎝である。

ＳＥ３（第39図、図版３）

ＳＥ３は第Ⅴ層上で検出した。④区と⑤区の北側を東西方向に走り、ＳＥ４と平行しいる。溝の上場幅2.45～3.0ｍ、下場幅1.3～1.6ｍ、深さ0.6～0.75ｍを計り、断面逆台形状を呈する。この溝は地形に沿ったものではなく、谷は西側に位置するが、溝は東側に向かって深くなっている。また、フラットな溝底の中央部には硬く締まった硬化面を持ち、④区側の溝の半分から東側には、南側の壁に１段のテラスが派生する。このテラス面にも若干硬化面が確認される。埋土中には白色パミス（文明降下軽石？）が全体的に混在している。出土遺物については次に記すが、溝の時期に伴うと思われる近世陶磁器の他に縄文土器片、古墳時代の甕の底部、白磁・青磁等が出土している。

出土遺物は第40図に示している。240～244がＳＥ３出土の遺物である。240は中国産の白磁の皿で、口縁部は輪花口縁を呈する。14～15世紀。241は青磁椀の口縁部か。242は17～18世紀頃の国産陶器と思われるが、器種は不明である。蓋の可能性も考えられる。243・244は摺り鉢である。243は口縁部で、内外器面とも釉が施されているが、口縁部は重ね積みのための釉剥ぎが見られる。薩摩系で17～18世紀頃のものか。244は底部で、内外器面、底部に釉が施されている。17～18世紀頃のものか。

ＳＥ４（第39図、図版３）

ＳＥ４は第Ⅴ層上で検出した。ＳＥ３の南側に平行して走行する溝である。ＳＥ３と同じく西から東側に流れる溝で、溝の上場幅1.1～1.3ｍ、下場幅0.3～0.5ｍ、深さ0.3～0.38ｍを測る。特徴として溝の南側の壁が緩やかに落ち込む形態がうかがわれる。埋土は全体的に白色パミス（文明降下軽石？）が混在している。出土遺物は少ないが17世紀代の陶磁器が出土している。ＳＥ３とは位置や走行方向の関係、埋土の状況からみて同時期に存在したものと推定される。

遺物は第40図に示してある。245は唐津産の皿である。17世紀前半。

包含層出土の遺物（第40図、図版15）

遺構外の出土遺物は数点と僅かである。246は中国産の白磁皿である。体部内外面及び底 部に透明釉が施され、口唇部は伏せ焼き技法による釉剥ぎが見られる。13～15世紀。247は中国産の高台付きの白磁小皿である。釉が全体に施され、体部が大きく外反する器形を呈する。14～15世紀。

第40図　ＳＥ3・4出土及び包含層出土遺物実測図（Ｓ＝1／3）

第5表　中・近世の遺物観察表

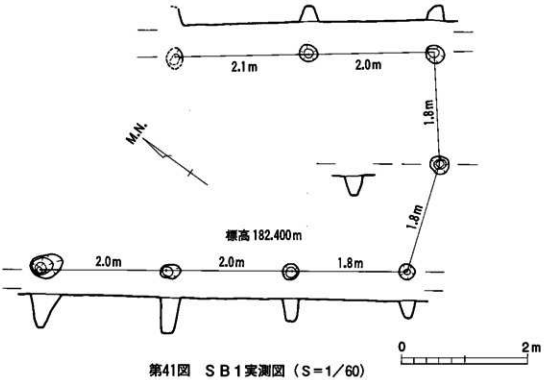
遺物番号	種別	器種	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	形態および文様の特徴	色調 外面	内面	備考
240	磁器	鉢 口縁～体部	SE3	(11.2)	—	—	白磁	白	白	14～15C
241	陶器	鉢	SE3	—	—	—	外内　ヨコナデ	灰	灰黄	
242	陶器	壺か	SE3				外内　ヨコナデ　貫入	灰	灰	17～18C　国産
243	陶器	擂り鉢	SE3				口縁部　軸剥ぎ 外　ヨコナデ　施釉 内　ヨコナデ　施釉　4条のかき目	オリーブ黒	オリーブ黒	
244	陶器	擂り鉢	SE3				外　施釉 内　施釉　かき目 底　施釉	にぶい黄褐	灰黄	17～18C
245	陶器	皿	SE4				外内　施釉　貫入	灰黄	灰オリーブ	17C前半　唐津
246	磁器	皿	2BG	(10.2)	(7.0)	(1.9)	白磁 口巻部　釉剥ぎ	白	白	13～15C　中国
247	磁器	高台付小皿	7IG		(6.3)		白磁	白	白	14～15C　中国

第6節　時期不明の遺構と遺物

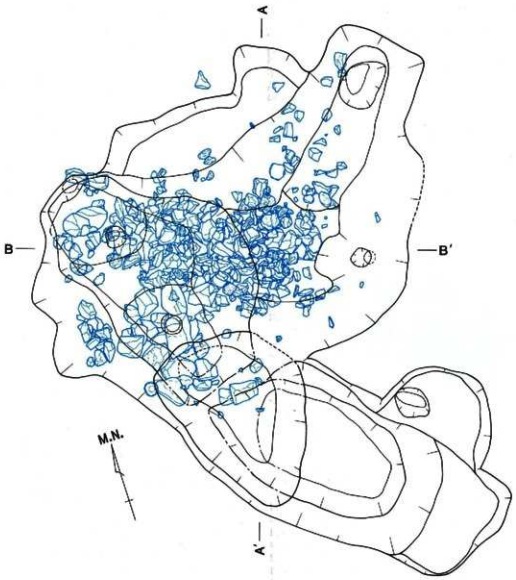
第Ⅴ層（御池ボラ混暗褐色土）及び第Ⅵ層（暗褐色土混御池ボラ層）上で検出された遺構は、柱穴群や土坑、溝状遺構などがあるが、出土遺物が希薄であるため時期決定が困難なものが多い。柱穴群については多くの柱穴が検出されたにもかかわらず建物の確認は殆どできなかった。土坑は火山灰や遺物の出土が確認できたものもあるが、性格不明のものについてはここで事実記載を行なう。溝状遺構についても遺物の混在が見られることから、時期を確定するには危険性があるため、ここで記述を行ないたい。

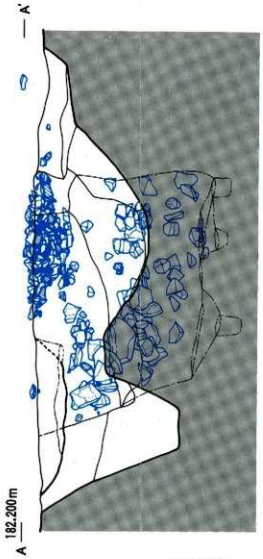
柱穴群

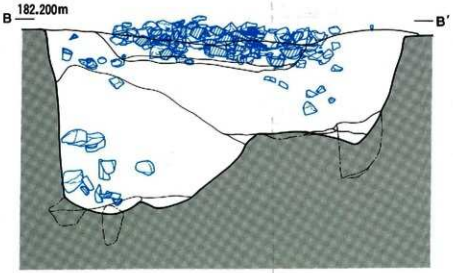
柱穴の検出は第Ⅴ層上では困難であったため、主に第Ⅵ層上で行なった。ただし①区に関しては第Ⅴ層上で確認している。掘立柱建物跡の確認は1棟のみであるが、これも全容は明らかではない。埋土は3分類程できたが、時期決定及び建物の確認にまでは至らなかった。柱穴内から数点の遺物が確認されているが、②区に検出された柱穴内からは磨製石斧（第29図、141）が、①区に検出された土坑内柱穴からは銭貨『崇寧通宝』（直径3.45㎝、図版P91―①）が出土している。

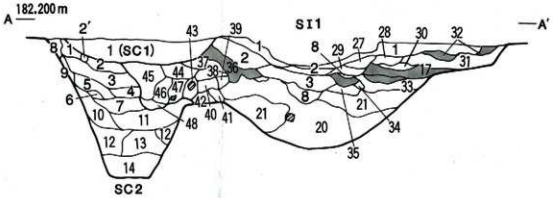


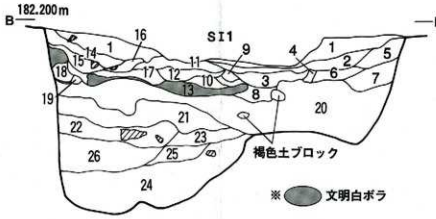
第41図　ＳＢ１実測図（Ｓ＝1／60）











SI1下土坑

1 暗褐色土～硬質。白色ボラ（文明ボラ）混。礫を含む。
2 黒褐色土～硬質。白色ボラ（文明ボラ）混。
3 黒色土～やや軟。若干粘性あり。白色ボラ（文明ボラ）混。
4 ボラ混黒褐色土～もろい。白色ボラ（文明ボラ）混。
5 ボラ混黒褐色土～しまりあり。白色ボラ（文明ボラ）混。
6 ボラ混黒褐色土～しまりあり。粗い。
7 ボラ混黒褐色土～しまりあり。第6層より粗い。
8 褐色土混ボラ層～もろく崩れやすい。
9 褐色土～しまりあり。第8層と同じ。
10 褐色土＋暗褐色土～やや軟。第8層と同じ。
11 ボラ混暗褐色土～やや軟。黒褐色土ブロックと白色ボラ（文明ボラ）が混じる。
12 第8層と同じ。
13 黒色土ブロック混褐色土～しまりあり。白色ボラ（文明ボラ）混。
14 黒褐色土～若干しまりあり。白色ボラ（文明ボラ）混。
15 黒褐色土～白色ボラ（文明ボラ）が多く堆積する。
16 黒褐色土～ややしまりあり。
17 黒色土～しまりあり。下層に白色ボラと黒色土ブロックが混在している。
18 黒褐色土～軟質。白色ボラ（文明ボラ）混。
19 黒褐色土混ボラ層～もろく崩れやすい。
20 褐色土混ボラ層～もろく崩れやすい。
21 御池ボラ＋褐色土＋黒色土ブロック層
22 ボラ混黒褐色土～しまりあり。礫混。
23 暗褐色土混ボラ層～もろい。
24 ボラ混暗褐色土～もろい。礫混。
25 暗褐色ブロック混ボラ層～もろい。
26 ボラ混暗褐色土～若干しまりあり。礫混。
27 ボラ混黒褐色土～しまりあり。白色ボラ（文明ボラ）混。
28 ボラ混にぶい黄褐色土～しまりあり。
29 ボラ混黒褐色土～しまりあり。白色ボラ（文明ボラ）混。
30 ボラ混暗褐色土～しまりあり。
31 ボラ混にぶい黄褐色土～しまりあり。粗い。白色ボラ（文明ボラ）混。
32 暗褐色土＋ボラ混にぶい黄褐色土～しまりあり。白色ボラ（文明ボラ）混。
33 ボラ混褐色土～やや軟。
34 第13層と同じ
35 第13層と同じ
36 ボラ混黒褐色土～硬質。粗い。白色ボラ（文明ボラ）混。
37 ボラ混黒褐色土～しまりあり。白色ボラ（文明ボラ）若干含む。
38 褐色土＋ボラ混黒褐色土～しまりあり。白色ボラ（文明ボラ）混。
39 黒褐色土混ボラ層～硬質で粗い。
40 第37層と同じ
41 褐色土ブロック～軟質。
42 黒褐色土ブロック混ボラ層～しまりあり。
43 ボラ混黒褐色土～もろい。
44 ボラ混黒褐色土～やや軟。
45 暗褐色土混ボラ層～もろく崩れやすい。
46 ボラ混黒褐色土～軟質。もろい。
47 ボラ混黒褐色土～しまりあり。礫混。
48 ボラ混黒褐色土～軟質。

SC2

1 ボラ混黒褐色土～しまりあり。
2 ボラ混黒褐色土～しまりあり。
2' ボラ混黒色土
3 ボラ混黒褐色土～しまりあり。
4 ボラ混黒褐色土～やや硬質。
5 ボラ混褐色土～ややしまりあり。
6 ボラ混暗褐色土～ややしまりあり。
7 ボラ混黒褐色土～ややしまりあり。
8 ボラ混暗褐色土～やや軟。もろい。
9 ボラ混暗褐色土～ややしまりあり。
10 ボラ混黒褐色土～ややしまりあり。ボラ粒やや多く含む。
11 ボラ混黒色土～ややしまりあり。粗い。
12 御池ボラ～もろく崩れやすい。
13 黒褐色土混ボラ層～もろく崩れやすい。
14 ボラ混黒褐色土～ややしまりあり。

SC1

1 ボラ混黒褐色土～硬質。

第42図　SI1・SC2実測図（S＝1／30）

ＳＢ１（第41図、図版４）

主軸をＮ－43°－Ｗにとる２間×３間の建物と推定される。梁3.6ｍ、桁行約5.9ｍを測る。柱穴径は30㎝前後で、深さ25～55㎝である。柱穴間の距離は図に示してある。

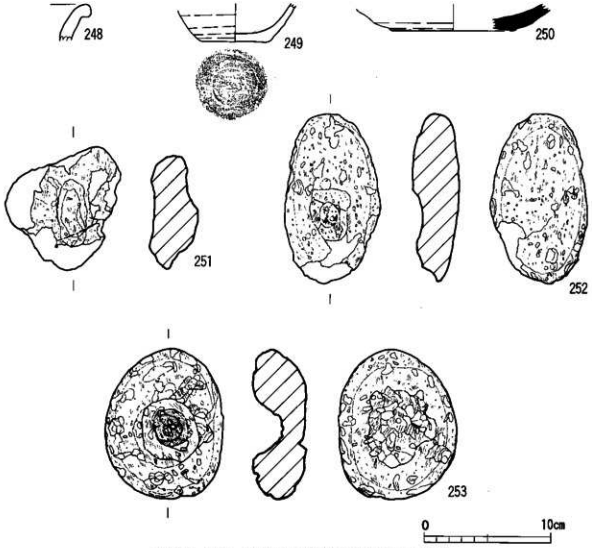
遺物は古代の土師器杯と思われる口縁部や古墳時代の甕と思われる胴部片などが出土しているが、流れ込みの遺物と思われる。

ＳＩ１・ＳＣ２（第42図、図版４）

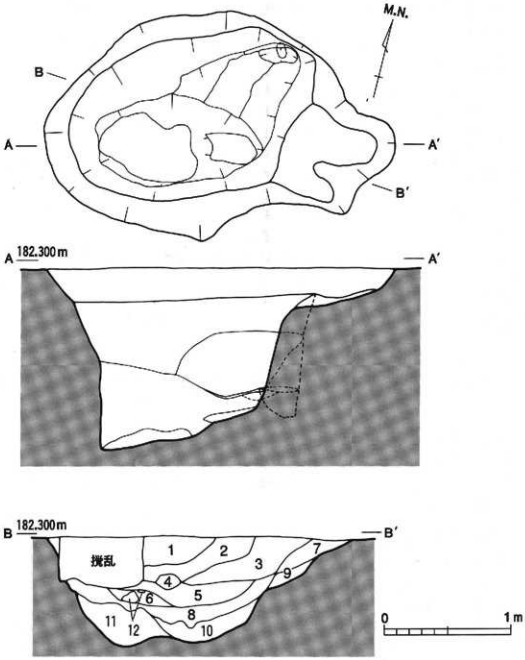
ＳＩ１とＳＣ２は②区の北西側に位置する。集石状遺構と幾つかの土坑が切り合った状態で確認された。第Ⅱ層混じりの第Ⅲ層上面を精査すると拳大程の安山岩礫の集中が検出された。更に集石上の土を除去すると文明降下軽石が堆積する楕円形の土坑上に礫が集積された状態で確認された。集石状遺構（ＳＩ１）とそれに伴う土坑（ＳＣ１・２）とは切り合いが見られる。土層で確認すると古いものからＳＣ２→ＳＩ１→ＳＣ１の順になる。

ＳＣ１は長軸1.4ｍ、短軸1.0ｍ、深さ0.25ｍの不定形の土坑で、埋土は黒色土である。遺物は古代の甕の胴部片や土師器坏底部が出土しているが流れ込みと思われる。

ＳＣ２は長軸1.8ｍ、短軸1.2ｍ、深さ約1.1ｍの隅丸長方形を呈する。埋土の状況は、もろくなって崩れた御池ボラと黒色土の堆積が見られる。遺物は古墳時代の甕の底部片や胴部片、古代の甕の口縁（第４３図、248）などが出土しているが時期は不明である。



第43図　ＳＩ1・ＳＣ2出土遺物実測図（Ｓ＝1／3）

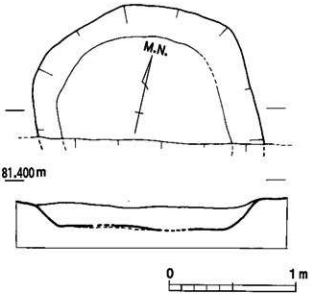


SC3

1 ボラ混黒褐色土～ややしまりあり。
2 ボラ混黒褐色土～硬質。
3 ボラ混黒褐色土～硬質。第2層よりボラを多く含む。
4 ボラ混黒褐色土～ややしまりあり。第V層土ブロックを含む。
5 ボラ混黒褐色土～硬質。
6 ボラ混黒褐色土～細粒子土でしまりあり。焼土？炭化物粒、角礫が混在する。
7 ボラ混黒褐色土～しまりあり。
8 ボラ混黒褐色土～しまりあり。
9 黒褐色混ボラ層～非常に硬質。
10 黒褐色土ブロックと御池ボラが混在～もろく崩れやすい。
11 黒褐色土混ボラ層～非常にもろく、崩れやすい。
12 焼土？

第44図　ＳＣ３実測図（S＝1／30）

ＳＩ１は長軸１.７ｍ、短軸０.９ｍの範囲に、安山岩を中心とした礫が集積されている。先に記述したように礫は文明降下軽石が堆積する埴土内にレンズ状に集積され、深いところで30㎝程を測る。礫内には軽石製品（凹石）や土師器坏、須恵器坏、古代の甕が出土している。礫の下には土坑が確認され、完掘状況から見ると３基程が切り合っているようであるが明確な確認はできなかった。土坑内には人頭大もしくはそれ以上の自然礫が確認され、ＳＩ１と同質の礫であるが接合はできなかった。遺物については第43図に示している。249は土師器杯である。ヘラ切り底を呈し、底部から体部にかけて内湾気味に延びるものと思われる。250は須恵器杯で復元底径が10㎝程と大きく、鉢のようなものも考えられる。251～253は軽石製品の凹石である。



第45図　ＳＣ４実測図（Ｓ＝1／30）

ＳＣ３（第44図、図版４）

①区の中央に位置し、第Ⅴ層上で検出された。長軸２.78ｍ、短軸１.８ｍ、検出面からの深さ１.５ｍを測る。古墳時代の土器片が数点確認されているが、遺構の時期は不明である。

ＳＣ４（第45図）

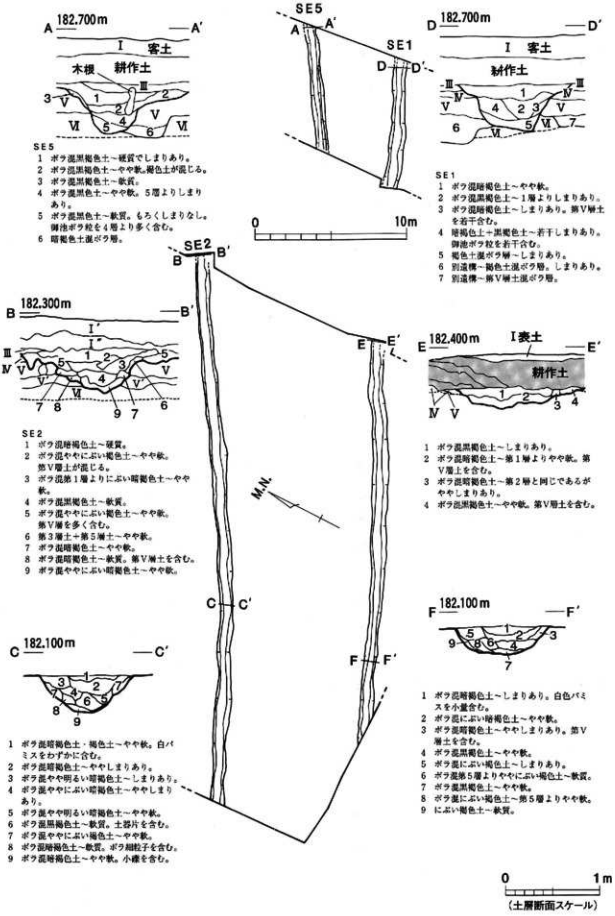
⑤区の北側に位置し、第Ⅴ層上で検出された。ＳＥ３との切り合いが見られ、残存しているのは半分のみである。径が１.75ｍ、深さ０.２ｍを測る。遺物は縄文時代の土器片が出土しているが、遺構の時期は不明である。

ＳＥ１・２・５（第46図、図版４）

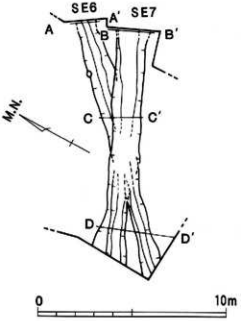
②・③区の第Ⅴ層上で確認されている。３本の溝は等高線に沿って走行している。ＳＥ２は北東から南西方向に流れる溝で、③区に確認されなかったことから②・③区の間で派生することが推測される。溝の上場幅１.０ｍ、下場幅０.６ｍ、検出面からの深さ０.４ｍを測る。ＳＥ１と５は合流または分岐する溝であることが推測される。②区に検出されたＳＥ１は北東から南西に走行する溝であることが確認できるが、③区のＳＥ１と５についてはそれ程の傾斜が確認されないため断定できないが、総合的には北東から南西に走行する溝であると思われる。ＳＥ１は上場幅１.０～１.２ｍ、下場幅０.４～０.６ｍ、検出面からの深さ０.２～０.５ｍを測る。ＳＥ５は上場幅０.８ｍ、下場幅０.２～０.３ｍ、検出面からの深さ０.55ｍを測る。出土遺物は古墳時代の甕や古代のものと思われる鉢などが出土しているが、床面から浮いているものが殆どで、流れ込みの遺物であると思われる。

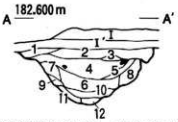
ＳＥ６・７（第47図、図版４）

①区の南側に位置し、第Ⅴ層上面で検出した。ＳＥ６がＳＥ７に切られている。２本の溝は等高線に沿って走行する。ＳＥ６は南西から北東に走行し、ＳＥ７は逆に北東から南西に走行している。ＳＥ６は上場幅０.８～１.２ｍ、下場幅０.４ｍ、検出面からの深さ０.22～０.６ｍを測る。ＳＥ７は上場幅１.２～１.５ｍ、下場幅０.４～１.０ｍ、検出面からの深さ０.28～０.48ｍを測る。出土遺物は古墳時代の甕などが出土しているが遺構の時期は不明である。

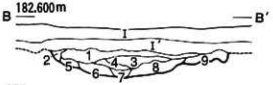


第46図　SE1・2・5平面及び土層断面実測図（平面：S＝1／250、土層：S＝1／40）

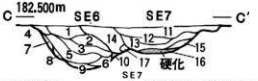




SE6
1 白色パミス混黒褐色土＋ボラ混褐色土～硬質。
2 ボラ混黒褐色土～しまりあり。
3 暗褐色土～しまりなし。ボラ混褐色土ブロック含む。
4 ボラ混暗褐色土～ややしまりあり。
5 ボラ混暗褐色土～軟質。
6 ボラ混暗褐色土～しまりあり。ボラ粒多く粗い。
7 ボラ混によい暗褐色土～ややしまりあり。
8 暗褐色土～第6層より軟質。
9 やや明るい暗褐色土～しまりあり。
10 ボラ混褐色土～非常に硬質。ボラ混黒褐色土ブロックを含む。
11 ボラ混褐色土～硬質で粗い。
12 ボラ混黒褐色土～ややしまりあり。

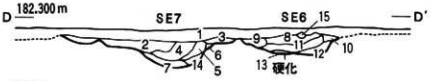


SE7
1 ボラ混黒色土～硬質で若干粘性あり。
2 ボラ混暗褐色土～しまりあり。
3 ボラ混やや明るい暗褐色土～やや軟。ボラ混褐色土ブロックを含む。
4 ボラ混黒色土～ややしまりあり。
5 ボラ混黒褐色土～ややしまりあり。
6 ボラ混黒褐色土～しまりあり。
7 ボラ混黒色土～やや軟質で粗い。
8 ボラ混黒色土～しまりあり。
9 ボラ混暗褐色土～しまりあり。

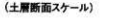


SE6
1 ボラ混暗褐色土～ややしまりあり。若干粘性あり。
2 ボラ混やや明るい暗褐色土～しまりあり。
3 ボラ混黒褐色土～しまりがあり、粗い。
4 ボラ混黒色土～ややあり。
5 ボラ混暗褐色土～しまりあり。
6 ボラ混黒色土～ややしまりあり。若干粘性あり。
7 ボラ混黒褐色土～ややしまりあり。
8 ボラ混黒褐色土～ややしまりあり。第7層よりボラを多く含む。
9 ボラ混黒褐色土～硬質でしまりあり。
10 ボラ混黒褐色土～しまりあり。

SE7
11 ボラ混やや明るい暗褐色土～しまりあり。ボラ混褐色土ブロックを含む。
12 ボラ混黒色土～ややしまりあり。若干粘性あり。
13 ボラ混黒褐色土～ややしまりあり。
14 ボラ混黒色土～軟質。
15 ボラ混黒褐色土～硬質。
16 ボラ混黒色土～非常に硬い。
17 ボラ混黒色土～軟質。



SE6・7
1 暗灰色土～軟質でサラサラ。
2 ボラ混暗褐色土～軟質。
3 ボラ混黒褐色土～やや軟。
4 ボラ混暗褐色土～やや軟。
5 ボラ混やや明るい暗褐色土～しまりあり。
6 ボラ混黒褐色土～しまりあり。
7 ボラ混黒褐色土～しまりあり。
8 ボラ混黒褐色土～ややしまりあり。
9 ボラ混ややにぶい黒褐色土～ややしまりあり。
10 ボラ混暗褐色土～しまりあり。白色パミスを若干含む。
11 ボラ混暗褐色土～しまりあり。
12 ボラ混明るい暗褐色土～しまりあり。
13 ボラ混黒色土～非常に硬質。
14 ボラ混暗褐色土～しまりあり。
15 ボラ混黒褐色土～ややしまりあり。



（土層断面スケール）

第47図　SE6・7平面及び土層断面実測図（平面：S＝1／200、土層：S＝1／40）

第6表　SI1・SC2出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種 部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
248	土師器	甕 口縁	SC2				ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	4mm以下の灰赤色の粒 2mm以下の透明光沢粒	
249	土師器	坏 体部～底部	SI1		5.65		ナデ,ヘラ切り底	ナデ	橙	橙	1mm以下の茶色の粒	
250	須恵器	坏 底部付近	SI1		(9.7)		ナデ	ナデ	灰	灰	1mm以下の白色の粒、透明光沢粒	

レイアウト番号	出土地点	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(cm)	器種	備考
251	SI1	凹石	9.7	9.25	3.9	101.7	軟石	
252	SI1	凹石	13.3	7.6	3.65	146.8	軟石	
253	SI1	凹石	11.7	9.15	4.4	156	軟石	

第7節　まとめ

上牧第2遺跡は、縄文時代中期後葉～後期初頭の集落の他、弥生から古墳時代、平安時代から中・近世に至るまでの遺構・遺物が出土する複合遺跡である。本調査では、遺物の出土量に対して若干遺構密度が低いことが感じられるが、調査区が部分的であったことにも一因があると思われる。そのため遺跡の全容を把握するには至らなかったが、阿高系の土器を出土した縄文時代後期初頭の竪穴住居跡が確認されたことは大きな成果といえよう。

本報告では著者の勉強不足と時間不足により、十分な土器分類や考察が出来なかった。ここでは調査の成果について簡単にまとめたい。

1．縄文時代の遺構と遺物

(竪穴住居跡)

縄文時代の遺構については、竪穴住居跡が2基確認された。埋土出土の土器から後期初頭の住居跡として捉えている。住居形態は2基ともほぼ同様で、直径約4mの不定円形プランを呈する。床面中央には土坑状の落ち込みが掘り込まれ、石皿が出土している。土坑埋土からは炭化物粒や焼土が確認されていることから、炉が設置されていたことが考えられる。主柱穴は、土坑内に2本と住居内の壁際に円形状に6本配置されている。

出土遺物は、SA1で多く出土しているのに対して、SA2では僅かであった。SA1では、遺物番号3や9－1・2・3等のように完形のものがほぼ床面直上で圧し潰された状態で出土している。住居の中央部にある土坑内から出土したものは遺物番号8、15・17・26・28であるが、小片で、器面にススが付着し、脆くなったものが多い。ＳＡ２の出土遺物は僅かではあるが、第15図の土器が中央土坑内やほぼ床面直上で出土している。器面にはススが付着し、脆くなっている。また、ＳＡ１の埋土中からは黒曜石の小剥片が多く出土している。

九州において当該期の住居跡の検出例は皆無に等しいが、ほぼ同形プランの住居及び同時期の土器を

出土している遺跡としては、鹿児島県牧園町の九日田遺跡があげられる。

(土器)

今回の調査で出土した縄文土器のうち、そのほぼ全体を占めるものは深鉢の凹線文系の土器群である。この土器群はいわゆる「阿高」系や「岩崎式」の要素を持つものと思われる。その他、二平行沈線を持つ「指宿式」の要素を持つものや貝殻文系の土器である「市来」系のものも一部見られる。

「阿高」系に当たる土器群は、幅広の幾何学的な凹線文を施したもの（A類：1～3）や口縁部に凹点文列が巡らされているもの（I類：73）などがある。

「岩崎式」の要素を持つ土器群としては、口縁部に連続の凹（列）点文を施すもの（B類：49～51）や若干肥厚する口縁部に連続の凹（列）点文を施すもの（I類：69～71）、口縁部に貝殻腹縁による連続列点（押し引き）文を施すもの（K類：75、76）等がある。

なお、県内で本遺跡出土の土器群と類似する遺跡としては南郷町の崩野遺跡、県外では鹿児島県末吉町の宮ノ迫遺跡や牧園町の九日田遺跡等がある。

「指宿式」の要素を持つ土器は（89、100）などである。

「市来」系の土器としては、（92、114～119）が上げられる。その中でも115は市来式土器様式の最終段階と考えられる丸尾タイプの土器である。

その他、深鉢で内外器面とも貝殻条痕による器面調整のみが施され、文様が施されていないもの（C類：4、5、52～55）や、口唇部に粘土紐を貼り付けたり、口縁部に粘土帯や粘土紐を貼り付け装飾を施しているもの（5、80、87）なども見られる。

2．弥生から古墳時代の遺物

出土遺物には甕、壺、高坏、鉢などが見られ、南九州独自の成川式土器と呼ばれるものが主に出土している。弥生土器と確認できるものは僅かで、口縁部に断面台形状の突帯を貼り付けた逆L字状の甕、外器面にハケ目調整が施された壺の肩部と思われるものなどである。成川式土器の甕は口縁部形態と貼り付け突帯において幾つかのタイプに分けられる。口縁部形態は、口縁部が内湾するもの（166・167・174）と直口するもの（171・172・176・177）、頸部にくびれを持って外側に開くと思われるもの（168・170）とがある。また、直口するもので、口縁部を肥厚させてその下に突帯を貼り付けるもの（171・172・176）が確認できる。貼り付け突帯は、刻み目を持つもの（174・176～180）、持たないもの（166～170）、指による押圧痕が明瞭に見えるもの（171～173）がある。壺は出土量が少ない。小さな平底を呈する球胴形のものや、内傾する短頸壺のくびれ部に貼り付け刻目突帯が巡らされているものなどがある。高坏は坏部、脚部ともに丁寧なミガキと丹塗りが施されているものが多く出土している。

県内において成川式土器が出土しているのはえびの市の妙見遺跡、高原町の荒迫遺跡などがある。これらについては6世紀中頃の年代観が与えられているが、当遺跡においては出土遺物の特徴も踏まえて、6世紀前半から中頃の年代観が比定される。

3．古代及び中・近世の遺構と遺物

遺物包含層のほとんどが耕作により削平されていたため、遺物の出土量は少なかった。遺構は畝状遺

構、溝状遺構、集石状遺構、土坑などが検出されているが、出土遺物が少ないため時期決定には説得力に欠ける。遺物は土師器や白磁などが出土している。土師器坏はヘラ切り底のものがほとんどで、円盤高台や黒色土器も出土している。白磁は13～15世紀の中国産のものが多く見られる。

(畝状遺構について)

今回の調査で確認された畝状遺構は、非常に遺存状態が悪かったため、調査及び調査成果において詳細を検討するには至らなかった。近年、水田や畑跡などの生産遺跡の調査が増加しており、これまでにも当地域周辺の中尾山・馬渡遺跡、牧の原第2遺跡などで15世紀後半に降下したとされる文明白ボラが堆積する畝状遺構が確認されている。この畝状遺構は、遺構の性格について検討が必要である。現時点では、白ボラの堆積する畝状遺構（小溝状遺構）は、畑の畝間及び白ボラ降下後の復旧痕の両者が考えられている。

(ＳＥ３・ＳＥ４について)

④・⑤区に検出された溝状遺構３・４号（ＳＥ３・４）は東西方向に並列して走行している。出土遺物は縄文土器、土師器、中近世の陶磁器などが確認されている。本文では、遺構埋土の状況から近世の遺構として捉えたが、他に同時期の遺構は確認されていない。第５節にも述べたように、溝は地形に沿うものではなく、排水だけの機能をもつものではないように思われる。両溝とも南側の壁にテラスを持つことやＳＥ３は底面とテラス面が硬化していることから「道」としての機能も推測される。

(ＳＩ１について)

集石状遺構（ＳＩ1）は、下部土坑の埋土中に15世紀後半に降下したとされる文明白ボラが混在することから中世以降のものと推測されるが、出土遺物が少ないことと、遺構の性格が不明であることから正確な時期決定は行っていない。集石状遺構内から３つの軽石製凹石が出土したことは何らかの意味をもつのであろうか。

〈参考文献〉

(1)『崩野遺跡』「南郷町文化財調査報告書　第２集」　南郷町教育委員会　1990

(2)『崩野遺跡Ⅱ』「南郷町文化財調査報告書　第３集」　南郷町教育委員会　1991

(3)『野久首遺跡　平原遺跡　妙見遺跡』「九州縦貫自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書第２集」　宮崎県教育委員会　1994

(4)『荒迫遺跡』「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第11集」　宮崎県埋蔵文化財センター　1998

(5)『都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内中央部）』「都城市文化財調査報告書　第５集」　都城市教育委員会　1986

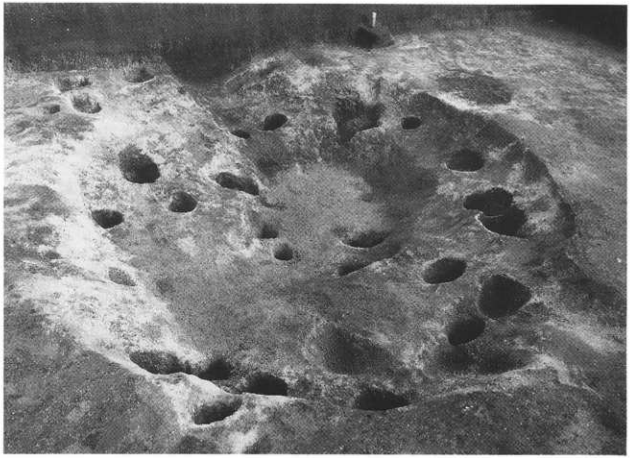
(6)『九日田遺跡２』「牧園町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）」　牧園町教育委員会　1995

(7)『宮之迫遺跡』「末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）」　末吉町教育委員会　1991

上牧第2遺跡遠景

上牧第2遺跡全景

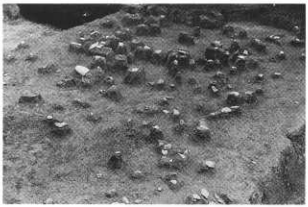
図版2



ＳＡ1

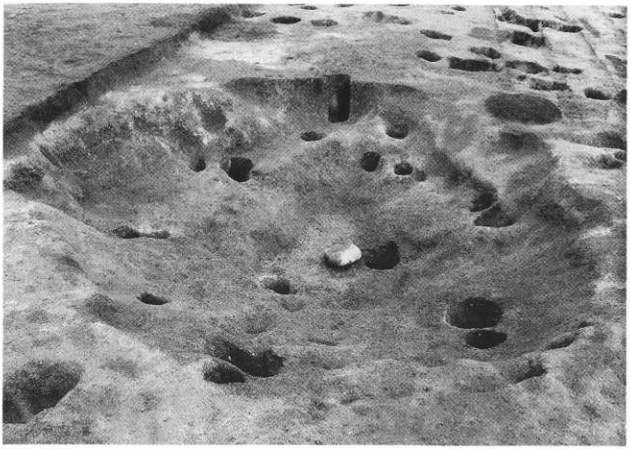
ＳＡ1土器出土状況

ＳＡ1土器出土状況



ＳＡ1周辺遺物出土状況（第Ⅴ層）

ＳＡ1周辺遺物出土状況（第Ⅴ層）

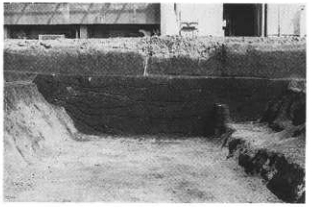


SA2

⑤区　SE3

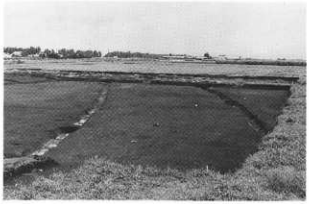
④区　SE3・4

SE3土層断面B－B′



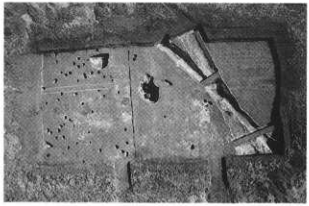
SE3土層断面A－A′

図版4



②区　SE1・2

③区　畝状遺構検出状況



①区　全景（SB1、SC3、SE6・7）

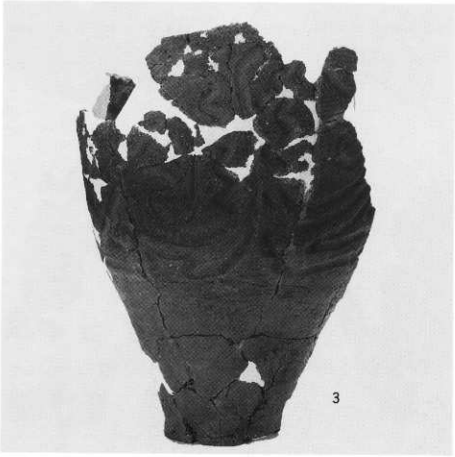
②区　SI1検出状況

①区　SE6・7

②区　SI1・・SC1・SC2検出状況

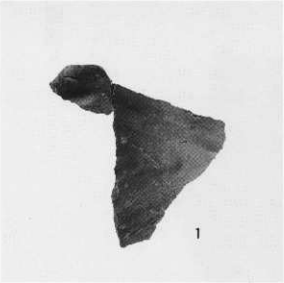
第Ⅴ層土器出土状況

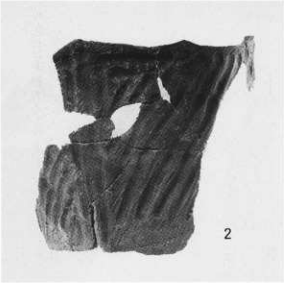
SI1下部土坑及びSC2完掘状況

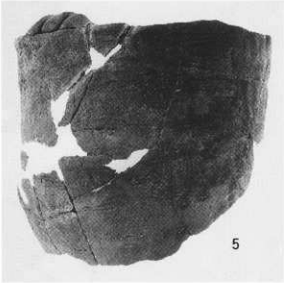


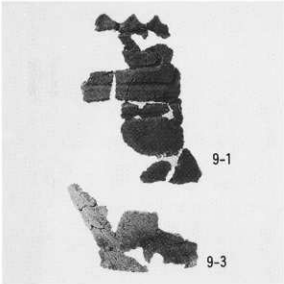
SA1 出土土器

図版6

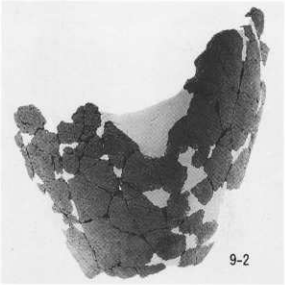


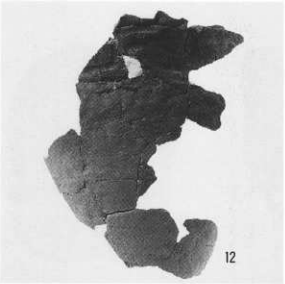


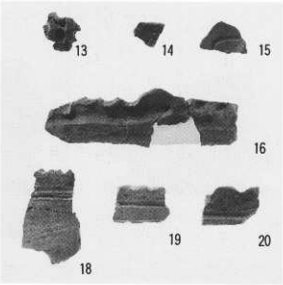


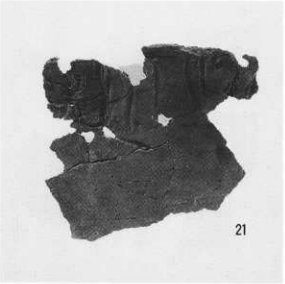


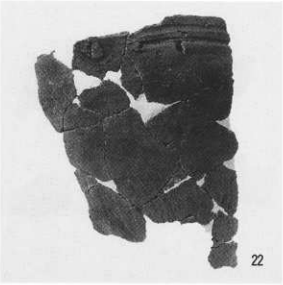
SA1 出土土器





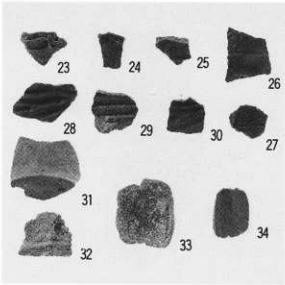




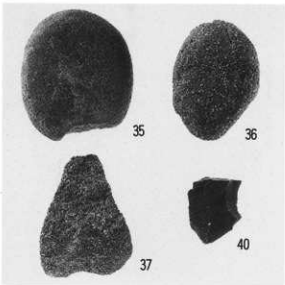


ＳＡ1 出土土器

図版8



ＳＡ1 出土遺物

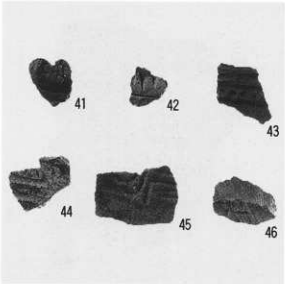


ＳＡ1 出土石器

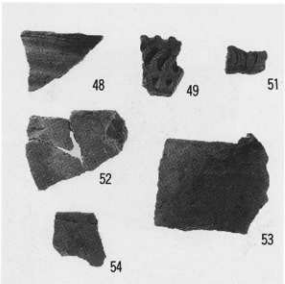
ＳＡ1 出土石皿

ＳＡ1 出土台石

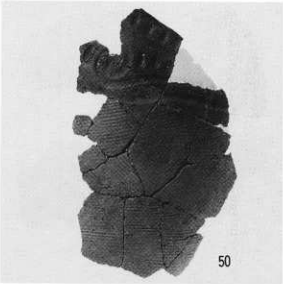
ＳＡ2 出土石皿

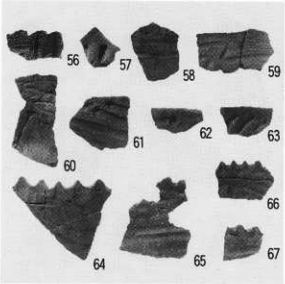


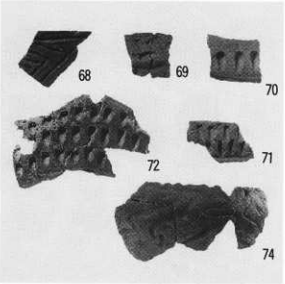
ＳＡ2 出土土器

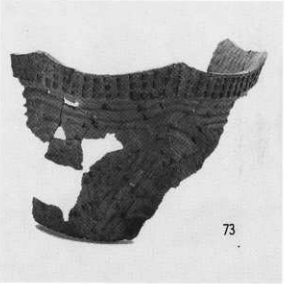


包含出土土器（縄文）



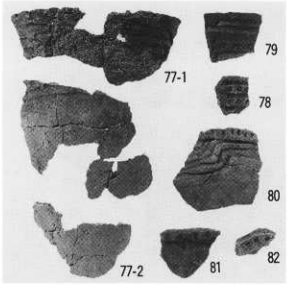


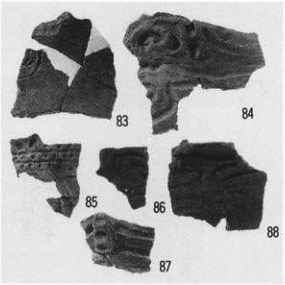


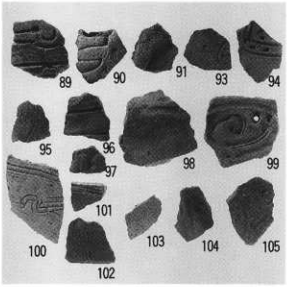


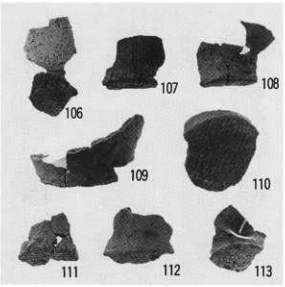
包含出土土器（縄文）

図版10

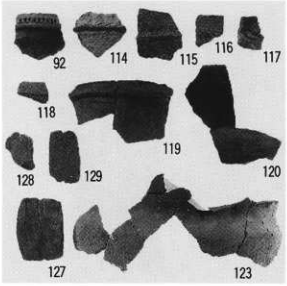




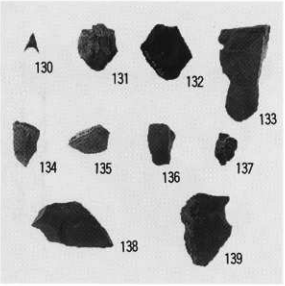




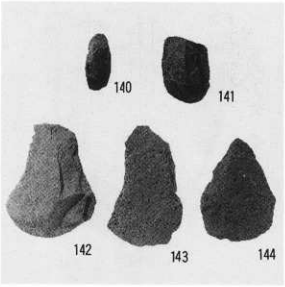
包含層出土土器（縄文）

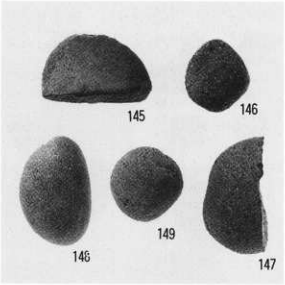


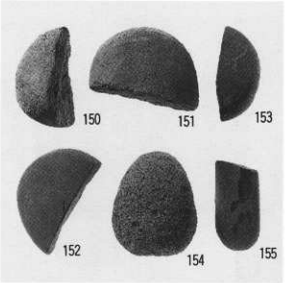
包含層出土土器（縄文）

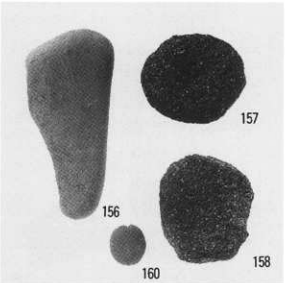


包含出土石器

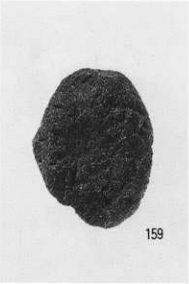




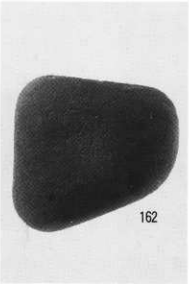




包含層出土石器



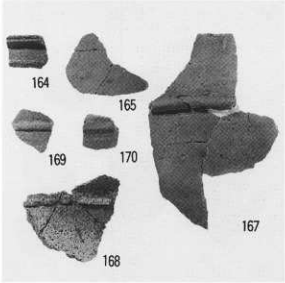
包含層出土台石

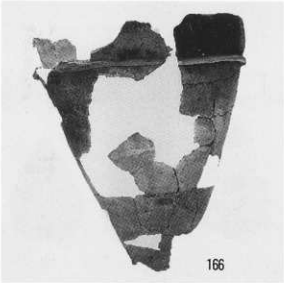


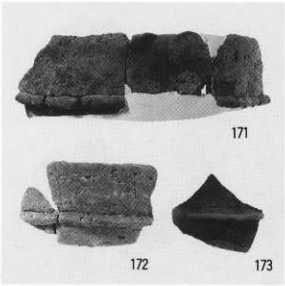
包含層出土台石

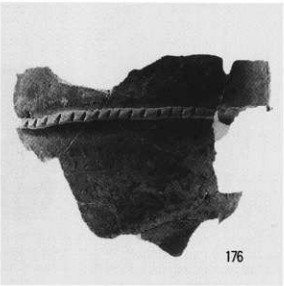
包含層出土石皿

図版12

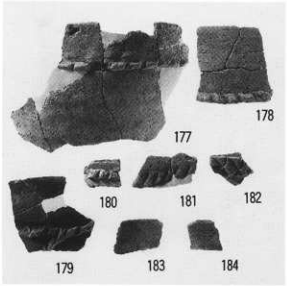


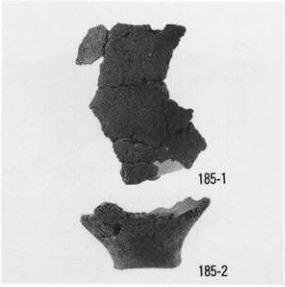


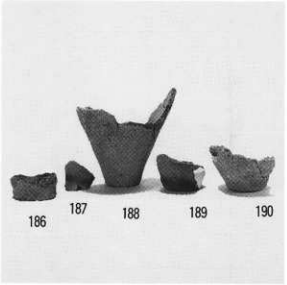


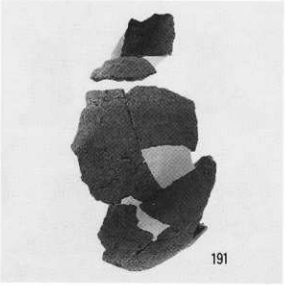


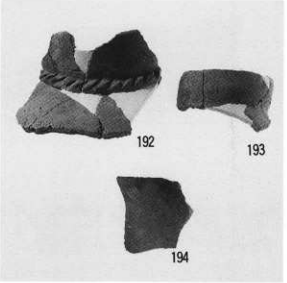
包含層出土土器（弥生～古墳時代）

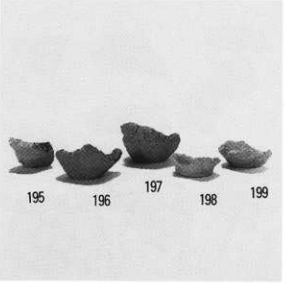






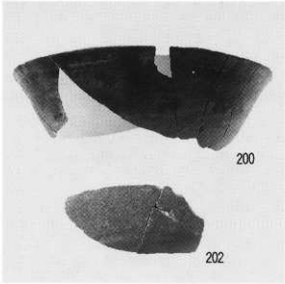


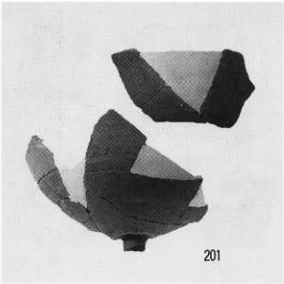


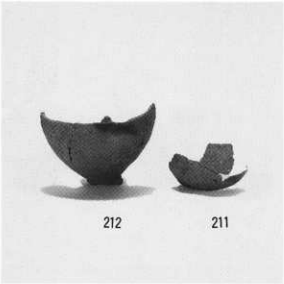


包含層出土土器（弥生～古墳時代）

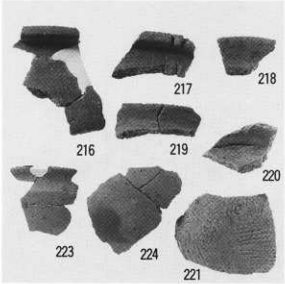
図版14

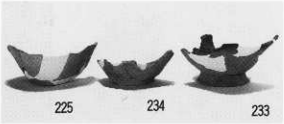






包含層出土土器（古墳時代）





包含層出土土器（古代）